

ると二十万年若しくは三十万年の太古より、地上に生存しをりしとの學説是れなり。歐州に在りては既に第三紀層中の中新統 (Miocene series) に於て、人類の生存しをりしを説くの人類學者あるも、日本には未だ此證無し、然るに彼の第四紀の岩層に至れば、其洪積統 (Diluvial series) 中に、原始人類の使用せし石、角、骨、象牙等を以て製作せる各種の武器あり、又人類の遺骨は、彼の本紀に於て最も著名なる『マムモス』象の齒牙と共に、至大なる人類接存の遺物となりて存在し、殊に佛國、マデレヌのトルドマ窟産の象牙には此有名なる『マムモス』象を彫刻せしものあり、然れば少くとも本期に於ては、明かに此『マムモス』象と共に棲住しをりし人類の存在を證明するものなり。今此原始人類の生存せし時代を、人類學者は更らにまた三期に小分し、石器時代、銅器時代、鉄器時代と爲せり、而て此石器時代をマン、ラボック氏は、更らに二小期に分ちて、舊石器時代及び新石器時代と爲せり、然り而て人類に一種の宗教的思想の存在せしは、その舊石器時代の太古に在りては大に疑はしきものありて存し、モルチレー氏の如きは當期に於ては、今日尙未だ人類間に宗教の存在を證據するに足る、充分の遺物を發見せざるが故に、當期人類は

尙未宗教を保有しをらざりしならんと説き、レイニング氏亦此説に贊せり、然れば古石時代に於ける宗教の存在は、現今の地質學人類學上の遺物上よりは、到底その存在を認定するを得ず。然れど新石器時代に至れば、當時の蠻人中に、早く既に宗教なる現象は、明かに存在せしとを歴々指點し得可きの證あるなり、則ち當期に於ける人類の遺物に就て考ふるに、當時既に人類か死者を葬りたる墳墓あり、土塔あり、偶像あり、呪符あり、以て明に彼れ等が一種の宗教思想を有しをりしを知るに足るものとす、特に彼等原始人類の未來に關する思想の如きは、彼等が死者の未來の生活に於てもその使用の具に供せんが爲めに、殊更に死者と共に埋葬したりし器物に由りて之れを證す可く、彼等が惡靈邪鬼の存在に關する一種の思想を有しをりしとは、死者の頭蓋に孔隙を穿ちて、之れによりて死者の身体中に宿どりて、遂に其死者致死の原因となりたる、惡靈邪鬼を追ひ出さんと企圖したるにても察知し得可きなり (S. Laing: Modern Science and Thought, p. 20-98. Saussey: Science of Religion, p. 26-28.) 而て斯かる地層中より發見せらるゝ原始人類の宗教的遺物は、舊石器時代に進むに従ひ、次第に減少し去りて、遂に舊石器時代

に至りて全くその痕を絶つに了るものなり、故に斯かる遺物のみよりするとき
 は、舊石器時代に於ける人類中には一種の宗教なる思想の存在せしや否やは今
 日尙不明なりと雖も、少くとも新石器時代に在りては當時の人類は既に一種の
 宗教思想を有しをりしとは事實上明白なる證左有るものとす、是れマックス・ミュ
 ラー氏が、宗教は世界と共に古く、少くとも吾人の知りたる世界と同じく古るき
 ものなりと云ひ、アウクスチヌスが今日吾人が目して以て基督教と稱しをる所
 のものも、古代希臘人等の諸民族中に既に業に存在しをりし所のものにして、尙
 その實を刻して之を言へば、夙に吾人々類と共にその初めを爲せるものと謂は
 る可からず (*Res ipsa, quae nunc religio christiana nuncupatur, erat apud antiquos, nec
 defuit ab initio generis humani.*) と稱せし所以なりとす。然れば吾人人類の宗教な
 るものは、時間上に於ては今より遡りて之れが起原を考ふるに、大凡そ三十万乃
 至二十万年の昔時より、其新石器時代なる地質時代に於て、明かにその存在を認
 め得る事は事實の上より考定したる、科學的探求の結果なりとす。
 次ぎに現今地球上に棲息せる人類中、苟も其人文の發展或程度に迄到達しをれ

る、日支歐米の諸民族中、宗教を有せざるもの全く是れ無く、其所謂無宗教者なる
 者も、それは只佛教基督教の如き成立宗教を信奉しをらざるまでの事にして、皆な
 一種の宗教を有しをるものなり、然れば苟も文化の或程度迄進みをれる人民に
 在りては、皆な一種の宗教を有しをるとは明瞭なる事實なるが、彼の所謂野蠻未
 開の民族に在りては、或は宗教なる思想を歆如しをるもの無きに非ずやと謂ふ
 に、元來野蠻未開の民族の信仰に關する探究は頗る困難なるもの存して存し、觀
 察の不充分なるよりして往々事實の真相を見誤り、從て吾人が目して以て無宗
 教の民族なりとなす所の者も、彼等の間に在りては明白なる一種の宗教的信仰
 を有しをるものあるを發見するとあり、殊に歐米等の基督教國より、亞非利加内
 地等に派遣せられたる、基督教宣教師の齎らし來れる報告等に至りては、頗る信
 を措き難きものあり、彼れ宣教師は基督教に非ざるものは一切皆な偽宗教なり、
 宗教に非らざるなりとの先入主の僻見を以て、彼等蠻族間に行はれたる諸宗教
 を觀察するが故に、彼れ蠻族の宗教や何ぞ能く宗教たるの資格を有せん、彼れ蠻
 族間に流布せる信仰や、儀禮や崇拜や、皆な彼れ基督教家の目して以て宗教に非

ずと爲す所のもの、斯かる皮想上の觀察よりして某々蠻族は無宗教なりと傳ふ、何の族か無宗教たらざらん、然れば今日迄無宗教なりとの報告に接しをれる野蠻未開の種族に在りても、正確詳密なる觀察の下に在りては、一種の宗教を有するものと化し去り、先入主の僻見を離れて、公平無私の視察を遂げんか、昨日までは全然宗教を有せずと想像しをりし民族も、その實一種の宗教を有しをりしとの事實を發見するに至るものなり、是れ實に野蠻未開の民族の宗教に關する報告中、同一種族に就てその宗教の有無を報導するに當りても、其報告者に由りて或は宗教を有すと爲し、或は宗教を有せずと説く所以なり、然れば學者にして若し正確詳密なる觀察と、公平無私の意見とを有して、蠻族間に於ける宗教を觀察するときは、何かなる野蠻未開の人民と雖も、何等か一種の宗教的信念を有しをらざる者は殆んど是れ無かる可し、是れマソン、ラボック、タイラー等の諸氏がアシムメン、ホッテントツ、及びアンダマン等の蠻族間には宗教を有せざるものありと主張し、諸種の證據を列擧せしにも關はらず、ラボック自からも是れ等諸蠻族の中にも一種不可知的の對象を畏怖し、魔術を尊信するの事實を認容しをる所以

にして、氏は之れを以て宗教と見做さるが故に、此等の民族中には宗教を有せずと主張すと雖も、それは只宗教なる語の意義上の爭論たるに止りて、宗教なる語を廣意を以て解釋するときは、氏が目して以て宗教に非ずと爲せる所のものも、一種劣等なる宗教に外ならざるものとなるなり、此故に宗教なる語を極めて廣き意義を以て解釋するときは、クラーク氏がその著十大宗教第二卷十七頁以下)及びレネーユ氏の宗教史(History of Religions)中に於て論ぜるが如く、宗教は人類一般に通せる普遍的の事實にして、渾圓球上苟も人類たる以上は、何かなる人類と雖も、その宗教に高下優劣の差こそあれ、何等か一種の宗教を有せざる者一も是れ無しと謂ふも毫も過言に非ざるなり、此故にクラーク氏も宗教は人類の普遍的事實なり、縦令タイラー氏の云へる如く宗教を有せざる蠻族ありとするも、それは除外例なりと主張せり、レネーユ氏は尙之れを補ひて、縦令今日何等の宗教をも有せざる二三の蠻族あるとを發見するに至るも、之れに由りて宗教が人性固有の必然性に基いするを拒否し得ざるは、尙幼兒が數理を實地に活用し能はざるが故に、數理は人性の固有せる必然性に非らずと論斷し能はざるが如きなり

と謂ひ、ブライントン氏亦その原始民族の宗教(Brinton: Religions of Primitive Peoples)に於て宗教の普遍的事實なるを斷言せり。然れば宗教は吾人々類の言語と同じく、空間上には吾人々類間に於て最も廣く行はれをる所の普遍的事實なりと稱するを得可きなり。

上來論明し來りたるが如く、宗教は吾人人類の中に於ては、その古石器時代は姑く措き、新石器時代に至りては、明かにその發現を見るに至りたるものなるが、その古るきや實に十數万年の昔時に初まり、延いて今日に至りたるものにして、今日に於ては洋の東西を問はず人智の文野を論せず、渾圓球上至る所にその發達の程度こそ異なれ、宗教なる事實の存在しをらざる個所は一も是れ有ると無し。然れば斯る普遍的事實は果して吾人々性に何等の根底も無き、超自然的産物たるが、若しくは、施政者僧侶の偽巧に出でしものなるか、將た又吾人々性の病的變態より生成し來りたるものなるか、此等兩説の到底今日に維持す可からざる非科學的の獨斷論たるとは吾人嚮者に既に之れを論明し置けるが如し、然れば吾人にして超自然主義を奉ずれば則ち止む、苟も人類間に表現せる諸現象を説明

するに人智の範圍を以てし、時間的には古往今來十數万年に亘たれる吾人々類の生活をして、泡沫と化し夢幻と變じ、空間上には渾圓球上に棲存せる幾億の吾人々類の生活をして、龜毛空華視し、之れを吾人精神の正態を缺ける病的變態となさめしざる以上は宗教なる現象は人類社會に於ける確固たる事實にして、而も吾人々性の本性に基いせる必然的普遍的事實なりと考ふるは、極めて正當適確なる見解と見做さるを得ざるなり、換言すれば人文の開展發達上、或歷程に到達し來るときは、宗教なる現象は必然的に吾人々類の意識上に表現し來たるの事實なりとす、尙他語以て之れを謂へば、宗教は吾人々性の心理的必然に基きて生成し來たれる、人文史上の一大事實なりとす。蓋し吾人にして一たび彼の各國民の宗教的意識の發達開展し行ける歷程を回顧追想し來るときは、彼等諸國民の宗教思想には意外なる暗合の存するあるを認む可く、而てその宗教思想の暗合が全然符節を合はす如きものありて、吾人は之れに對して何かにも奇異の感を惹起せずんばあらずと雖も、然かもその宗教思想の暗合や敢て地球上の諸國民に交通連絡ありて、一地方の宗教思想が他の地方に波及し、彼此相接觸感化

せしの結果に出づるに非ずして、何等の交渉關係をも有せざる諸地方に、全然符節を合すが如き宗教思想の各獨立に開展發達しを見るは實にその偶然に出づるものとす。然れど退いて考ふるに、斯く各民族間の宗教思想が全然暗合しをるは、敢て一民族の宗教思想を以て他民族の宗教思想に交渉せしの結果に非ずして、實に各民族間に同一の宗教思想を特發するに至りたる偶然の暗合に出づるものなりと雖も、抑々斯かる偶然の暗合をして依りて以て生起せしめたるの原因理由無くんばある可からず、果して然らばその原因理由とは何ぞや、曰く宗教なるものは人文發達の或歷程に於ける、吾人々類の同一人性に基ける必然に出づるものにして、何なる民族と雖も、若し一たび智識發達の此歷程にさへ到達せば、宗教は必然的に表現し來たるものたるに由る、換言すれば同一人性の心理的必然性に促進せられて、此に宗教なる現象を開展發達し來たりたることは是れなり、既に各民族間に於ける宗教なるものは、共に同一人性に基いせる、人文開展の歷程上に於ける必然性より發現し來たりたる結果なるが故に、その人文化育の程度同一様の人類に在りては、又その宗教も同一様の色彩を以て表現

し來り、各民族は其精神進歩の同一歷程に在りては、同一宗教思想を開發し來らざる可からざるや固より其所にして、却て各民族間に同一宗教思想の存在せざるこそ寧ろ奇異にして變態的現象なりと謂はざる可からず、果して然らば毫も思想の接觸交通を見ざる各民族間に同一宗教思想の存在しをりて、偶然の暗合を見ると雖も、是れ毫も怪むに足らざる所のもの、否そは偶然の暗合に非ずして、却て人性必然上の契合なりとす、何んとなれば斯かる暗合は皆な是れ同一人性の必然より生起し來りたる現象にして、斯く大觀し來れば、其所謂偶然の暗合なるものも、又偶然の暗合に非ずして、必然的結果たるを知る、既に各宗教にして斯かる人性の同一必然に基因して惹起せられたるの現象なるが故に、各宗教間には固より幾多の契合點を具有しをる可きや勿論なりと雖も、各民族の宗教にして、其全然同一なるものは又一も是れあると無し、是れ果して何かなる理由に由るものなるか、曰く元來宗教なるものは同一人性の必然より基因し來ると雖も、その同一人性の由りて以て感發擧動せらるゝ因縁事情は各民族とも決して同一なるを得ず、各民族は其過去歴史たる風俗習慣を異にし、土地氣候等の環象

や社會的關係やの事情を異せるが故に、此に各民族間に於てその宗教は各、異なる形狀を以て表現するに至るものとす、故に彼の自然現象の崇拜の如き心靈崇拜の如き動植物崇拜の如き、上下古今を通じ、渾圓球上に於て頗る廣く流布しをるの信仰にして、宗教の一原始的表現たるに相違無しと雖も、印度のアーリヤ族に在りては、同一、天賦崇拜自然現象の崇拜よりして、多神教的凡神教的思想の傾向を取り來り、之れに尋いで非人格的神格を寫象せる思辨的傾向に推移し、遂に沈痛なる認識論的唯心論的や無宇宙論を胚胎し、而して常に人生の解脫觀に究竟しをると雖も、セム民族に在りてはその當初印度のアーリヤ族と同く、その宗教思想を天賦崇拜自然現象の禮拜に發せしも、而も幾くも無くして其自然現象を神化したる神格は直ちに其自然現象の痕を匿くして、國民的唯神教的となり、人格的實在の崇拜に趨向し行き、遂に森嚴なる倫理的唯一神教を醗酵し、以て神の救濟的攝護を要求するの思想を中心として發達開展せり。斯くの如く宗教は元來同一人心の必然に基因するものなりと雖も、その依りて以て表現すべき因縁事情を異にするより、此に各民族間に於ける宗教の異なる形相あり

て存するを見るものとす、換言すれば宗教が吾人々性の同一必然に基因しをるは、頓がて各宗教に契合の一致點あるを見出す所以にして、その各國諸宗教の表現せる形狀に差異ある所以は、その同一人性の必要より惹起せられたる宗教思想の依りして以て發現す可き因縁事情の異同に原因するものとす、斯くの如く宗教が同一吾人人性の必然に基因しをるは、則ち各國諸宗教の一致契合の點ある所以にして、人類の文化が或る程度に迄到達し來るときは、吾人人心の本性上當さに宗教なる現象を産み來らざる可からざる必然の結果なりとす、何んとなれば彼れ下等動物や動物に等しき蠻族に在りては、吾人と同一の因縁事情に遭遇しをるも、その精神力の發達は吾人と同一の程度に迄達しをらざるが故に、現今吾人の有するが如き宗教なるもの得て存せざるなり、然れば宗教なるものは一に人文開展の或歷程上に至れば、必然的に表現し來たれる吾人人心の本性に基因するものたるや明かなるものにして、決して天降地湧の神寶にも非らず、人間の手に成れる故造偽作にも非らず、又人心の病的變態にも非るものとす、故にフアンマン氏の言に曰く、彼の各原始民族の宗教思想に頗る顯著なる類同相似を

有しをる所以のものは、之等民族間に存する口碑傳説ありて然らしむるものにも非らず、血族の關係ありて然らしむるものにも非らず、歴史的關係ありて然らしむるものにも非らずして、それは全然個人の有する精神状態の同一組織に起因しをるものなりと謂はざる可からざるなり (It is to prove that the striking similarity in primitive religious ideas comes not from tradition nor from the relationship of the individual man, notions of early peoples, but from the identity in the mental constitution of the individual man, wherever he found. Brinton: Religions of Primitive Peoples, p. 8.) 宗教はその根底實に此同一人性に基因しをるものにして、唯其表現上に於て諸種の因縁事情を異にするものなるが故に、或は印度的色彩を帯びて表現し來り、或は猶太的風趣を以て發現し來ると雖も、宗教の本性眞髓に至りては等しく同一人性に基因しをるものなるが故に、何等の徑庭異同あるを見ず、是れ一切の宗教を分類して眞宗教 (True religion) 偽宗教 (False religion) と區別するの不可なるが如く、佛教基督教亦世人の惟ふが如く全然睽離背反せるものに非ずして、その眞髓核實に至れば結局同一に歸して止まんとす、然れば佛教や基督教や、之等兩宗教が社會に表現す

る因縁事情を異にせるが故に、假りに基督教となり佛教となり、而て各其發達の高度に達せる今日に於ては、一見此兩者間には千歳打ち越し難き峻峭鴻溝の横はれるものありて存するが如く思惟せらるゝと雖も、佛耶兩教は元來根本的にしかく相背反睽離しをるものに非ずして、其極致に到達するときは、共に等しく一味の宗教思潮に皈入して止まんとするものなり、何となれば佛耶兩教とも共に等しく同一人性の必然に基因せしものなればなり、之れを是れ思はずして、徒らに佛耶兩教は千歳構和し難き、反對的矛盾の思想より成りをるが如く思惟せらるは、頭迷固陋の宗教家は姑く措き、眞摯に宗教學を研究せんとする者の採らざる所なりとす、否な管に彼の高等なる發達を爲せる佛耶兩教の根本義に至りては、此兩者は互に相融合調和して一致に皈して止む者なるのみならず、何なる劣等なる野蠻未開の人民中に行はるゝ、宗教と雖も、其極致を尋ねれば、共に同一人性の必然に基因しをる者にして、唯其表現の因縁事情に於て、今日吾人の如き發達せる文化の歷程を缺如しをるが故に、或は咒物崇拜教 (Fetichism) となり、或は自然崇拜教 (Naturism) となり、或は心靈崇拜教 (Animism) となり、或は祖靈崇拜教

(Ahonkultus)となり、或はトテム崇拜教(Totemismus)となりて、表現し來たりたりと雖も、それは等しく同一人性の必然にその深奥の根底を有しをるものたるや、現今其發達の高等なる階段に迄到達しをれる佛耶兩教と異なる無きものなり、是れ實に一切の宗教を分類して眞偽に岐つの不可なる所以なると同時に、高等なる宗教は劣等なる宗教を目して、以て一切迷信なりと貶黜し去る能はざる所以、從て佛耶兩教中、その一が永くその教敵たる他を異端邪宗として、強ちに排斥し去る能はざる所以なりとす。

以上論明せるが如く、宗教なるものはその行はるゝ所の範圍は、時間上空間上共に遼遠茫漠たるものにして、人類間に於ける極はめて普遍的事實なるとは、言語が人類間に於ける普遍的事實たると一般にして、斯かる普遍的事實を以て吾人人性に於ける必然性に基つけるとなすの學說を拒否せんか、人性に於ける一切他の普遍的事實もその必然性を亡失し來り、その結果吾人の常識が是定しをれる一切の事物は、龜毛の如く空華の如く、將た海市の如く、人生は何等の意義をも有せざる如く、幻虛假無根底の一大怪秘と化し去り、その結果人をして覺えず悚然

として毛髮森堅たらしめずんば止まざるに至らん、然れど之れに反して若し一たび宗教の同一吾人人性の必然に基因すと爲すときは、之れに由りて諸有諸宗教上に於ける難點疑團は一時に氷釋し去らるゝと、恰も驕陽の積雪を漸盡するか如く、快刀亂麻を斷つの概あるものとす、是れ吾人が宗教は同一吾人人性の必然性に基因する普遍的事實なりと稱する所以なり。請ふ吾人は更らに節を改めて、斯かる人性の必然性に、内存的にその素質の存在しをる所の宗教の萌芽が發達長育し來りて、遂に嚴然たる今日吾人の有するが如き、一大宗教の大木成樹を成すに至るには、何かなる外部的要素と、何かなる内部的要素と、の必要ありて存するかを論明せんと欲するものなり。

第四節 宗教生成の外的要因

宗教は實に吾人類が本來具有せる必然的同一本性に基因せる素質なり、能力なり、潛勢存在(δυναμεις)たるものなり、然れば既に吾人類の本性として、疾くその内に潛みをれる、其潛勢力をして外に發して、此に宗教なる一現象を顯勢存在(ἐπιφάνεια)たる顯勢力として表現せしむるに至るは、何かなる進程經過を要す可

一七六

きか、換言すれば潜勢存在としての宗教が、顯勢存在として表現するに至るは何かなる外的要因と何かなる内的要因とを要するか、尙他語以て之れを云へば、宗教の生成には外部客觀の側よりは何かなる刺撃感化ありて在するを要するか、又之れと同時に内部主觀の側よりは何かなる應動作用ありて在するを要するか、是れ吾人が今や當さに考察闡明を要す可きの問題とは成れり、請ふ吾人は先づ宗教生成に關する外部の要因よりその論明の端緒を開かん。

抑、吾人人類は何かなる智識經驗を得んとするにも、必ずや先づ外界客觀上の物的觸發と、之れに應動する所の内界主觀上の心的作用とありて共存するを要し、此兩者契合の關係上より此に初めて吾人人類の智識經驗は生成し來るものなり。今眼を開いて之れを見れば、日月星辰の燦然たる、河海の汪洋たる、山嶽の巍峩たる、雲飛びて天に戻り、魚淵に躍る、斯かる外界客觀世界の多種異様なる、何物か吾人の精神主觀を觸發感動するの具とならざる、此に於てか之等諸種の客觀的外部の刺撃と、主觀的內部の精神とは相互に觸發應動して、此に諸般の現象を生起し來るものとす、則ち吾人が今現に寫象しをる如き、物理界人事界に於け

一七七

る百般の現象は皆是の内外兩要素の感發應動の結果に非るはなし、然り而て斯くして生起せられたる人事界の諸現象中には、風俗習慣倫理道德科學哲學文學宗教等百般人文の諸現象を、包括せるものとす、然り而て又等しく宗教と稱するもの、中に於ても諸種の因縁事情の下に諸種の宗教を産出し來るを見る、今之れを發達せる宗教に就いて例示せんか、佛教基督教儒教道教の如き皆な是の產物ならざるは無し、則ち佛教は印度てふ外的事情に觸發せられて生出し、基督教は猶太てふ外的因縁に催進せられて生起し來り、儒道二教は支那てふ外的刺衝の下に表現し來りたるものとす。既に發達せる宗教に就いて之を見るも尙斯の如くなるが如く、太古草昧の時代に於ける宗教も亦幾多の外的刺撃に觸發感動せられて此に始めてその生成を見るに至るものとす、果して然らば太古草昧の世に於て外部より吾人の宗教的意識を衝動して、その所謂原始的宗教なるものを生成せしめたる外的原因は何ぞやと謂ふに、第一呪物、第二心靈、第三に神として崇拜せらるゝ或種の動植物即ち『トテム』第四に自然現象是れなり、而て此中その第二の心靈は更らに之れを三部に細別するを得可し、則ち個人々々の身軀

中に宿される精神靈魂てふ思想より得來れる死人の靈特に死せる祖先の靈魂と個人の身軀を離れて能く獨立自存し以て諸所を飄游漂泊し得と想像せられたる游魂と之等人間の精神と祖靈及び游魂の思想を擴充し來りて宇宙間の万物苟も吾人の眼前に映寫しをる所の森羅万象は各自皆精神靈魂を具有しをりてその靈魂の力に由りて宇宙万有は皆な斯かる潑々地の活動を營爲しをるものなりと思惟せられたる万有諸靈 (Naturseele) と是れなり又その第四の自然現象は佛のレヴィーユ氏は大自然 (Grosse Natur) と小自然 (Kleine Natur) とに細分し前者は日月星辰の如きマックス、ミューラーの所謂非觸知的對象 (Intangible object) にして後者は樹木泉流動物等マックス、ミューラーの所謂半觸知的對象 (Semitangible object) の此中に包含せらるゝを見る而て今此に列擧せる宗教生成の外的四要素は早とに外部より特別な勢力を以て不斷原始人類の精神を刺撃觸發して此に宗教なる一現象を惹起せしむるに至るものとす。然れども此外的四個要因の何れが最も古く吾人人類の精神を刺撃して先づ宗教なる一現象を生成せしめたるか是れ實に學者間に於て頗る異説の存する所にして嚙々紛々甲論乙駁殆

んど底止する所を知らざるの觀あり請ふ今左に少しく各學者の所見を評論せん。

彼の呪物を以て先づ彼れ原始人類の精神を刺撃して宗教なる現象を生ぜしめたるものなりと主張し宗教の起原を呪物崇拜教 (Fetichismus) なりと爲すの學者少なからず然れど等しく呪物崇拜なりと謂ふ中にも學者に由りては呪物崇拜なる現象を自ら二様の意義に解釋しをるものたるを見る則ちその第一はシュルツェの如く呪物崇拜は木片石塊禽羽貝殻等極はめて些末些小なる諸種の物軀そのものを崇拜するにありと説きその第二はマックス、ミューラー、ブライデラー、ブライントン諸氏等の定義せるが如く呪物崇拜は斯かる些末なる物軀そのものを崇拜するに非ずしてその物軀中に宿どりをれる一種の不可思議的奇靈の魔力即ち呪力を崇拜するものなりと説くにあり然れば此説に従へば呪物なる些末の物軀中にも能く吾人の疾病を癒やし彼れ蠻人に戰勝を與へその諸般の祈願を成就せしめ得る一種の妖力たる呪力を具有しをるものなるが故を以て斯かる物軀を崇拜するは此に之れを呪物崇拜と稱するなり。然るに前説に在りて

はその物躰は何かに些末なるものなるにもせよ、原始人類がそれを崇拜するに至りしは、元彼れ原始人類が一般に事物の性能を皇張誇大して考ふるの通性と、直ちに外物を人格化し去るの習慣と、偶然の關係上より吉凶禍福をその物躰と聯關して想像するの天性とに由りて、直ちに些小なる該物躰そのものを人化し神視して、それを崇拜するに至るものなりと云ふにありとす。然り而て今此兩説の異同は兎に角、斯くの如き外界的勢力たる咒物に觸發感動せられて、その咒物を崇拜するに至りし咒物崇拜を以て宗教の最も原始的形狀なりと論結せんとする所の者は、彼れ咒物崇拜論者なりとす。然れど咒物崇拜は果して一切宗教の表現以前に於ける、最古の形式にして、その最も原始的表現なるかに至りては、吾人實に大に之れを怪まざるを得ず、今まシュルツェ氏の説に従へる咒物崇拜なるものが果して一切各宗教の最古の形式なりやを攻究せん、シュルツェ氏の言に従へば、其物躰は何かに些末微小なるにもせよ、彼れ原始人類は稟性之れを人化し神視するの風あるが故に、此にこそ咒物として崇拜するに至るものなりと説くと雖も、此原始人類の心的作用は、吾人が後ちに至りて將さに説明せんとする、レ

ユ氏等の所謂自然を人化し神事するに至る、自然崇拜とその心的經過に於ては何等の徑庭異同あると無し、果して然らば此に惹起し來る問題は、彼れ原始人類は何が故に大自然小自然の現象を人化し神視するに先ちて、木片羽毛の如き些末なる微小物塊を人化し神視するに至りたるか、何が故に彼れ、原始人類は自然現象の彼れが如く普遍にして宏大に、その暴力や時に或は彼れ原始人類を苦しめ、その表現の神變不可思議なる彼れが如くなるは未だ曾て是れあらざるなり、實に彼れ原始人類を刺撃する所の外部の觸發物中之れより甚しき勢力あるものは恐らく他に其比類を見ざる所ならん、然るに何にが故に彼れ原始人類は斯くの如く普遍にして而かも優勢に、彼等の注意を惹起し易く、從てそれを人化し神視し得可き機會の極はめて多大なるものを措き、却て先づ咒物の如き微小物塊を人化し神視する咒物崇拜の如きものを生ぜしか、縱令彼れ論者の謂へる如く、咒物崇拜たる微小物塊を崇拜するは、彼れ原始人類の本性之れをして此に至らしめたるものなりとすも、そは何故に彼等の注意を喚起す可き強大なる刺撃物たる、普遍優勢の自然現象の如きものを擱きて、却て先づ彼の比較的吾人

人類の注意を喚起するの機會少なき、咒物の微小なるものを崇拜するに至りしか、若し夫れ一步を譲りて縱令彼の刺撃の度弱小なる咒物も、刺撃の度強大なる自然現象と同じく、彼れ原始人類の宗教心を鼓舞發動し得可きものありて存すとすも、咒物崇拜と彼の自然崇拜と或は同時に表現し來たるの事實は是れ有る可し、未だ咒物崇拜の自然崇拜に先ちて存在せるの宗教なりとはその論證の根據那邊にかある、苟も咒物崇拜をして自然崇拜より先きに表はれたる宗教の形式たらしめ能はざる以上は、咒物崇拜は之れを以て最も原始的なる宗教の表現なりと認むる能はざるもの、矧んや咒物崇拜を以て咒物たる物躰そのものを直ちに崇拜するに非ずして、その物躰の裏面に潜在せるプライデラーの謂ひし超絶的なる一種の不可思議的魔力妖力即ち咒力を崇拜するに在りて存せんか、斯かる意味に於ける咒物崇拜は、極はめて原始的なる我他彼此の區別をも尙未辨知せざる、蠻人の胸中に先づ浮び來りし宗教なりと稱するは、頗る不當の推論たるを免れ得ざる可し、何となれば斯かる意味に於ける咒物崇拜は該物躰そのものと、その物躰の裏面に在住せる咒力(亞非利加土人は此咒力を以て靈魂と同

一視しをるの事實ありしは、ウィット、プライントン及びマックス、ミューラー諸氏の既に道破せし所なりとすを不完全ながらも抽象的に兩分して思考しをるものにして、斯くの如きは未だ我他彼此の區別肉躰心靈の區別をも識知し得ざる彼れ原始人類の胸中に先づ生起し得可き宗教の形式たるを得ざるものなるを以てなり、果たして然らば咒物崇拜なるものは或は之れを以て彼の原始人類と稱せらるゝ民族中に流布せる一宗教なりと稱し得可きも、未だ之れを以て一切の宗教に先ちて既存せる最古の原始的宗教なりとは稱す可からざるものとす、從て彼の所謂咒物なるものは、それが吾人人類の宗教的意識を夙とにその所謂原始時代の昔時に於て、觸發衝動する一種の刺撃物を爲し、や勿論なりと雖も、それを以て吾人人類の宗教的意識を觸發感動する最も古るき外的勢力即ち外的刺撃物なりとは吾人未だ遽かに斷言し得可からざるものとす。

次に彼の心靈なるものは果して吾人の宗教心を喚起せし最も原始的外來の刺撃物なるか、換言すれば心靈崇拜は宗教の最も原始的形式なる乎との問題ありて生じ來るを見る。吾人は此問題に答へて言はん、曰く否な彼の心靈崇拜な

るものが宗教の最古の原始的表現に非るや尙マックス、ミューラー、プライアラー等の定義せし咒物崇拜が宗教の最古の原始的表現たるを得ざるが如きなりと。抑、等しく心霊崇拜と稱すと雖も、心霊なる語の中には自ら三種の區別ありて存することは前既に一言し置きたるが如きなり、今タイラー氏は此三種を總稱してその崇拜を等しく心霊崇拜教 (Animismus) と呼びしものとす。今先づ氏が何かにして之等の心霊崇拜教が生成し來るやを論明せるを見るに、氏は彼の原始人類がその肉體と心霊との別を辨知するに至る經過的進程を以て、主として睡眠夢幻の事實に在りて存すと爲し、彼れ原始人類が醒るげながらも主觀客觀肉體と心霊との別を識知するに至るは夢幻及び睡眠中の我れと、醒覺時の我れとの異同よりして皈納し來たるの結果なりと説き、此事實よりして自己の肉體と心霊との別を識知し此に初めて人魂 (Soul) てふ意識生じ、此意識や直ちにその死せる祖先の肉體と共に消滅に皈し去らざる所の靈魂が、別に死後にも存続するものたるを推斷するに至り、此に祖靈崇拜 (Ahnenkultus) を生ず、而て之れに繼いで、その人魂が肉體を離れて隨意に遊離獨存し得るものなりとの意識を發達

宗 教 新 論

本

論

し來たれば此に游魂 (Spirits) なる意識を生成す、若し又彼れ原始人類の智識の發達不完全なる未だ明かに外物と自己との區別を判知せざるや、一たび自己の精神心霊の活動を識知するに及べば、直ちに之れを外界事物にも應用して、外物は一切その外物中に存する精神心霊の力に由りて活動しつゝあるものなりとの意識に到達し來る、此に於てか自然界に通ずる一切の活動は皆な是等万有中に存在せる心霊の活動なりと思惟するに至るものとす、此に於て彼れ原始人類は万有諸靈 (Naturseele) の意識に到達す、故にタイラー氏は彼の人體がその中に在住する心霊に依りて活動せるが如く、宇宙の活動が一に又万有各自の心霊に由りて遂行せらるゝものなり (As the human body was held to live and act by virtue of its own inhabiting spirit-soul, so the operation of the world seemed to be carried on by other spirits.) と云へり、今彼れ原始人類にして斯かる人魂從て又祖靈及び游魂万有諸靈なるものゝ存在を認めて、そを崇拜するに至れば、此に心霊崇拜教 (Animismus) 生ずるものなり、然り而てタイラー氏は此の心霊崇拜を以て最古の原始的宗教なりと主張するものとす、然れど此説の困難なる所は吾人が嚮者にマックス、ミューラー、プラ

イテラー等の定義せし咒物崇拜教が、最古の原始的宗教としてはその思想の抽象的複雑に過ぐるの批難あるを指摘せしと同一の難點在りて存するを見る、換言すれば彼れ原始人類は何にが故に肉體と心靈とを區別する如き、多少抽象的複雑なる心的作用を營爲する後に非ずんば、識知し難き對象を以て、先づその崇拜の目的物と爲し、却て手近き一層入り易き而かも普遍優勢なる自然現象そのものを崇拜して以て宗教的對象と爲さざりしかとの疑問是なり、今此心理的必然の理はタイラー氏の學說を以てしては到底その満足なる解釋を與へ得可からざる所のものとす。

既にタイラー氏の心靈崇拜教が最古の原始的宗教の形式たる能はざるが如く、タイラー氏の所謂心靈崇拜中の一部たる祖靈崇拜 (Ahnenkultus) のみを以て一切宗教の最古の原始的形式と爲し、之れより餘他の各原始的宗教の發達開展し來る所以を説明せんと企てたるスペンサー、リッパルト諸氏の祖靈崇拜教も亦た何かにその説明の巧妙なるもの有りて存するにもせよ、そはまた到底最古の原始的宗教たるの仕格無きや勿論なりとす、今一言その説の不可なる所以を評論

せんに、抑、此タイラー氏の心靈崇拜教を以て最古の原始的宗教と爲せる學說に與へられたる批難たる、斯かる心靈や祖靈を崇拜するに至る以前に於ても、換言すれば斯かる肉體を離れ出でたる後ちに於て尙祖靈の永存を信ずるが如き、複雑なる精神作用の行はれをらざる以前に、既に業に自然崇拜の如きものは嚮者に縷陳せるが如く尙容易に行はれ得可く、從て祖靈崇拜以前に於て自然崇拜は行はれ得可しとせば、祖靈崇拜は或は原始時代に行はれたる宗教の一形式なりとは稱し得可からんも、未だ之れを以て最古の原始的宗教なりとは稱し得可からざらんと批難是れなり、而てスペンサーの哲學思辨に富み智識の統一を欲するや、彼の祖靈崇拜を以て一切宗教の最古の原始的形式なりと主張し、而て之れに由りて齊合的に彼の自然崇拜をも説明解釋せんとせり、此に於てかスペンサーの謂へるが如く原始人類の自然を崇拜せるは、彼の太陽や星辰や風雨や雷霆や山嶽や河海や一切皆な彼等の祖先の靈が逝きて住せるの住地なるが故に、又或はその祖先の昔時斯かる天體の出沒する地方やその山嶽河海の横はれる地方より下降來住せしとの故を以て、之れ等の自然現象を崇拜するに至るもの

なりと説かざる可からず、則ちスベンサー氏は前者の場合には日月星辰はその中に祖靈の止住しをれる一大咒物なるが故に之れを崇拜し、後者の場合に於ては山嶽河海は其所に會て住せし彼れ原始人類の祖先に關する觀念聯合上より之れを崇拜するに至るものと説けり。然れど仔細にスベンサーの謂ふ所を考察するに是れ明かに紀元前三世紀の頃に於ける希臘の哲學者オイエーメーロスの首唱せる所謂オイエーメーロス主義(Euhemerismus)の再興に外かならざるものにして、斯かる立脚地よりすれば彼の天空を神化して天の父と呼べるツォイスも、その本源に遡りて之れを考ふれば、その墳墓は現にクレイター島の内に存する同島の一王侯と爲り、春の野の麗はしき黄金色なる太陽の光線を以て養はれたる、沃土の神化たるダナーエも結局彼のツォイスが黄金万鎰を投じて購ひ求めたる、クレイター島の女后に過ぎざるものとなるなり、然れど十九世紀の後半に於て著るしく進歩したる比較言語學の智識は最早斯くの如き牽強附會なる非科學的文辭を弄するを許さざるなり、何んとなれば彼のツォイス神の如き古代羅馬人は之れをユピター(Jupiter)と呼び、北獨乙の民族はチオ(Zio)と稱し、共に言

語學上天空を意味せる印度アールヤの一神格ヅヤールウス(Dyans)と同一語原より出でたるものたるを判明し來たり、フアエトーン、ペルソニス、ヘーラクレースも亦たサムソフ、アドニス、オシリスの如く太陽諸神に外かならざるを發見するに至りたるの今日に在りては、スベンサー、リッパート諸氏の祖靈崇拜は、到底之れより自然崇拜の由りて以て必然的に發達開展し來たりたる所以の歷程進路を詳かにすると能はず、その牽強附會なる説明法は言語學神話學上の事實と衝突矛盾するを如何んせん、是れ祖靈崇拜を以て一切宗教の最も原始的表現なりと爲す學說の妥當ならざる所以なりとす。

第三に彼の動物の一種種族には植物の一種を擧げて以て、原始民族の一種族と同一の血統關係を有するものと爲し、從てその動物若くは植物の一を以て其種族の祖先として之れを崇拜する宗教あり、之れを『トテム』崇拜教(Totemismus)と稱す、是れ現今亞米利加印度人の間に於て極はめて熾に行はれる所の宗教なりとす。而て此『トテム』崇拜は全地球上の人間がその人文發達の過去の歷程上に於て必ず一度は經過し來りし所の階段たるもの、如し、然ればロバートソン、ス

ミス氏は彼のエルハウゼン氏の反對あるにも關はらず、セム民族の宗教は殆んど吾人の知り得ざる有史以前に於て此『トテム』崇拜たりしの證據歴々として掩ふ可からざるものありと主張し、以てセム民族の宗教の起原を『トテム』崇拜より始まると説き、而て尙進んで氏は世界に於ける一切宗教の起原を『トテム』崇拜に求めざるものゝ如し、然れど『トテム』崇拜を以て一切宗教の原始と爲さんとするときは又諸種の難問ありて起こり來るを見る、然れど一言以て之れを覆へば其思想の最古の宗教としては頗る複雑なりとの批難是なり。故に斯くの如き複雑なる思想の成形し來る前に於ても、尙彼の天然崇拜の如き形式の宗教は能く存在し得べく、從て『トテム』崇拜は未以て最古の原始的宗教なりとは稱し得可からざるなり、何んぞればその『トテム』として崇拜する所の動植物は個々の動物又は植物に非らずして、その動物又は植物の一種類全體を代表しをるの動物若くは植物を崇拜するものなり、即ちその動植物全體に亘る標形的 (Typisch) の動植物を取りて之れを崇拜するものなり、故に言はばその種類に屬する動植物の不完全ながらも原始人類の心意作用に由りて多少理想化せる所の動植物そのも

のを崇拜するに在り、即ちその標形的動植物はその中に屬するそれと同一種類の各個の動植物よりは或種の性質に於て特別に秀逸せる性能を有しをるものにして、その各個動植物は斯かる原本的標形の動植物を祖先として生れ來たりたるものなりと想像するものとす、然れど斯かる不完全ながらも一種の標形的動植物を想像してそを『トテム』として崇拜するに至るが如きは稍人智の發達したりし、後ちならでは惹起せられざるに明かにして、此點より之れを見れば彼の自然現象の崇拜の如きは斯かる複雑なる精神作用を待たずして能く成立し來たり得るものなるが故に、自然現象の崇拜は心意發達の理論上『トテム』崇拜に先ちて存せるものと謂はざる可からず。加ふるに『トテム』崇拜はその『トテム』として崇拜する動植物とその種類中に屬する一切の動植物との血統の關係を識知し、而て又その『トテム』とその『トテム』を崇拜する民族との血縁あることを想像し來らざれば、『トテム』崇拜は到底生起する能はざるもの、然れば斯かる複雑なる精神作用は天然崇拜の單簡なる思想に先ちて存すとは吾人到底之れを思惟する能はず、是れ『トテム』崇拜を以て一切の宗教に先ちて存せる最も原始的なる宗教

の形式なりと稱し得可からざる所以なりとす。

以上論明せるが如く咒物崇拜や、タイラーの心靈崇拜や、スペンサーの祖靈崇拜や、ロバートソン、スミスの『トテム』崇拜や、皆な共に最古の原始的宗教としては尙ほその意識の複雑に過ぐるもの有りて存するを見る、故に之等の各崇拜は或は之を以て彼れ原始民族間に行はれをりし一種の原始的宗教なりと稱するは不可なしと雖も、此中の何れも皆な自己を以て最古の原始的宗教なりと稱し得可き權利と仕格とを缺如しをるものとす、此に於てか第四にマックス、ミュラー、ハートマン、オイゲン、シュミット、フライデラー、レプリーユ氏等の如きは、自然崇拜 (Naturverehrung) を以て各宗教中最も原始的なるものとなし、斯かる宗教を自然崇拜教 (Naturismus) と稱せり、而て此説を主張する學者中その詳細なるものに至りては人々各意見を異にすと雖も、自然現象を崇拜することが宗教の最古の表現なりと云ふに至りては、皆な共にその説を一にしをるものとす。則ちマックス、ミュラー氏は印度アールヤ人種の原始的宗教を研究して自然現象を崇拜するに智的美的觀想より來りしものとなし、彼れ等印度のアールヤ人は之等自然現象に

由りて無限 (The Infinite) を憧憬しつゝありしと説けり。然るにシュミット氏はマックス、ミュラー氏の無限なる語に更ふるに世界を支配し統御するの勢力 (Might) なる語を以てせり。然るに彼のハートマンは更らに人生の實際的方面より觀察して、宗教の生成は自然現象が吾人々類に施與する幾多の恩恵と幾多の危害とより來るものにして、或はその恩恵に浴し或はその危害を恐懼するより生起し來たりたるものなりと説けり、例之ば太陽は吾人々類に温と熱とを與へて吾人の生活に資助するより之れを惠の神と觀じ、その風雨雷霆の人畜を震害するや、此に之れを怒りの神と觀じ、斯くして斯かる自然力と吾人々類との間に或はその惠を請ひ、或はその怒を恐るゝ等、一種の關係を附與せんとするより此に宗教なる一種の崇拜生ずるものなりと説けり。然り而てマックス、ミュラーの無限なる語を用るしに就いては世間の學者は之れに向ひて諸種の批難を與ふるもの少なからずと雖も、要するに氏の所謂無限なる語は彼れ印度のアールヤ人種が自然現象を神化し人視しをるの間にその自然現象に於て無限を憧憬しつゝありしとの意なるを以て、從來世間の學者が批難せしが如くマックス、ミュ

ラー氏は哲學者の用うるが如き意味に於て無限てふ語を用いしに非ずして、彼の印度のアーリヤ人種が自然現象を崇拜するは則ちその自然現象に於て哲學者の所謂無限なるものを憧憬しつゝありとの意に外かならざるものとす。佛のレヴィーユ氏亦自然現象なるものを二分して、大自然と小自然と爲し、中、その小自然崇拜は一切宗教の最古の原始的形式なりと爲し、更らに進みて彼れ原始人類なるものがその當初にありては自己と同一の活動を具有しをる外界自然を人化し神視するあり、その當時の宗教は一に自然崇拜の範圍を出づる能はざりしと雖も、その後漸く原始人類の智識經驗の増大するや、マイラーの所謂心靈崇拜やスペンサーの所謂祖靈崇拜の繼起し來たるを見ると説けり、今レヴィーユ氏が吾人々類の宗教的意識發達の順序を説明するの學說を窺ふに、原始人類は先づ第一に睡眠夢幻等の事實を實驗するや此に初めて自己に肉體と心靈との二者ありて存するを識知し、而て後ち此兩者を截分して別々に其存在を思考するや、第二にその比論を外界事物に及ぼして外界事物の活動も其萬有の形體中に存しをれる心靈の力なりと觀じ、此に於て自然界の事々物々森羅の諸象は

皆な心靈を以て充滿せられつゝあるものなりと考ふるに至り、而て之れに繼いで更らに三轉して第三に元來彼の形體と心靈との同一物に非ずして、此兩者の別在し得るを信するや、此に無數の游魂を生じ來たり、更らに轉じて第四に吾人々類の肉體中に宿どれる心靈は肉體の死後存續するものなりと信するや、此に祖靈崇拜を惹起し來るものなりと云ふに在り、然れば氏の學說は一切他の事物の宗教的崇拜に先ちて自然崇拜先づ起これりと説けるものとす。然れど氏は何にが故にその所謂小自然崇拜のみを以て一切宗教の起原と爲し、が氏は之に答へて小自然崇拜、例之ば樹木崇拜の如きもの、先づ最初に彼れ原始人類の宗教的崇拜の對象と爲りしは、樹木が果實を吾人々類に寄與して人生の生活を資助するが爲めに、原始人類は之れを恩惠の神と觀じ、原始人類の物質的必要上より先づ彼の小自然崇拜なるものは惹起せられたるなりと。然れど太陽の如き雷霆の如き又直接に吾人々類の利害得失に至大なる影響を及ぼし、甚しきに至りては一轉瞬の中に彼等は人類の生命其もの、安危をも左右する所のものに非ずや、此點に關しては太陽や雷霆の如き大自然なるものもその吾人人生に

直接に關係せる、啻に樹木の果實を吾人々類に供してその生命を資助するど何等の相異あらんや、否な寧ろ之れより太甚しきものありて存するなり、然ればレギュー氏の説の如くんば大自然崇拜も亦小自然崇拜と等く最古の原始的宗教たるを得可きものとす、是れハートマン氏の既に大自然崇拜を以て最古の原始的宗教と爲し、所以なる乎、次にレギュー氏が氏の自然崇拜より彼の『トテム』崇拜の由りて來たる所以を説明して、彼れ原始人類は一日偶々天上の雲影浮動の形狀を目撃し、それが或種の動物の形狀に酷似しを見るや、その天上の浮雲たる自然現象を不知不識の間に、之れと同一形狀を有せる地上の動物そのものと、觀念聯合上より次第に混同し來り、遂に天上現象の崇拜は地上動物の崇拜と化し去るに至る、斯くして原始人類が動物と人との正確なる區別を知らざる、彼等思想の混亂は、同一神にして半人半獸の形狀を有する者をも生じ來り、之れよりして彼れ原始人類は又人と獸との祖先を混同合一して、遂に『トテム』崇拜を生ずるに至ると説きしは、又吾人の全部首肯し能はざる説明なりとす、則ち吾人が氏の説に左袒する能はざるは、氏は何か故に原始人類が地上の動物を神視するに

至る迄に、その形狀を先づ天上の諸原象に認めざるを得ざる乎、今若しレギュー氏の説明法を以てするも、彼の原始人類はその肉を與へて彼等をして饑餓より免れしむる所の動物を見て、直ちに之れを神化すると、彼等に果實を寄與してその饑餓を救へるの樹木を神化して以て之れを崇拜したると同一なる能はざるか、又諸多の動物中には或はその性能の詭巧なる、或はその暴力の抵抗し難き、之等は彼れ原始人類に取りては自己以上に數等超出しをるものなるを明かに認め得可きもの夥多是れあるに非ずや、彼れ等原始人類は之等の點より直ちに彼れ地上の動物を神化して崇拜するに至らざらんや、然るに何にを苦みて原始人類の頭腦は天上の諸現象より對比的に地上の動物を崇拜するに至るの迂路を取りし乎、是れ氏の説の穩當ならざる所以なりとす、要之その詳細なるものに至りてはレギュー氏の自然崇拜説も幾多批評す可きの個所も夥多是有る可しと雖ども、之れを概観するときには自然現象の崇拜を以て最古の原始的宗教なりと爲せる、氏を初めハートマン、ブライデラー諸氏の學説は極はめて穩當にして過疵少なきものとす。彼の風雨雷霆日月星辰山嶽河海飛禽走獸深林亭樹の如き

自然現象が幾多吾人の精神を刺撃觸發してレヴィエヤマックスミュラーやハー
トマンの謂へるが如き、諸種の方面より、彼の我他彼此の辨識力未だ充分ならざ
る、原始人類の意識を衝動し、原始人類をしてその活動に於てもその勢力に於て
も、吾人々類より數層卓越しをれると思惟せしめたる、自然現象は常に人心を刺
撃して、以て此外界自然を神化し神視するに至らしむるものとす、然れば原始人
類は斯かる外界自然その儘を目して以て神と觀じ、自己より優等の勢力者なり
と感ずるに至るは敢てその智識經驗の程度タイラー氏の所謂心靈を崇拜しス
ペンサー氏の所謂祖靈を崇拜しロバートソン、スミス氏の所謂「テトム」を崇拜し
フライデラー等の定義せし咒物を崇拜するより低劣なるも尙能く容易に之れ
を成遂し得可き所のものとす、何んとなれば前者に在りては原始人類の目前に
横はりて出沒變幻窮はまり無き活動と、強大なる優勝なる勢力とを以て我れに
臨み我れを壓し來たれる自然現象その儘を取りて、直に之れを神化し神視する
ものなれば、後者の如く或は肉體を離れたる心靈を識知し、或は物體と呪力とを
差別し、或は分拆湊合の心意作用を比較的に多く豫想し、之れに加ふるに諸多複

雜なる血族關係の智識を豫想せるを要せざればなり、然れば吾人精神の發達上
に於ける必然上、人心の作用は簡單より複雑に進み具體的より抽象的に發達し
ゆくものたるを知る以上は、自然崇拜は縱令そが最古の原始的宗教ならざりし
にもせよ、少くとも之等心靈崇拜教、祖靈崇拜教、マックス、ミュラー、フライデラー
の定義せし咒物崇拜教「テトム」崇拜教より一層原始的宗教たるや明かなりとす、
然れどシュルツェの所謂咒物崇拜に至りては、若し斯かる意味に於て咒物を崇
拜するの人類ありとせば、それは自然崇拜と同一心的作用の下に生成し來たりた
るものと見るを得可きなり、何んとなれば彼の外物の裏面に潜在せる勢力に非
ずして、外物夫れ自身が原始人類の精神を直接に刺撃觸發して、その咒物崇拜た
る宗教の生成を促がすの點に至りては、該咒物は全然自然力の刺撃と同一にし
て、唯咒物崇拜に在りては其刺撃物が比較的に些少なると、時に人工を交えて製
作せられたる物體なるとの差異あるのみとす、然れば此點より之れを云へば自
然崇拜はその形や大にして全然天然的なる咒物崇拜なりと謂ふを得可く、之れ
に反して彼の咒物崇拜はその形や小にして時に人工を加へて製作せられたる

1100

物躰の自然崇拜と稱するを得可きものとす。果たして然らば自然崇拜とシュルツェの所謂咒物崇拜とは、其發達同一程度に在る心意作用の下に成遂され得可きもの、從て斯かる咒物崇拜と自然崇拜とは時を同くして人心發達の同一歷程上に表現し來りたる原始的宗教なりと稱するを得可きなり、然ればシュルツェの意義に於ける咒物崇拜は自然崇拜と同一時に表現し來りたるものと見る可く、從て其兩者に於てはその表現に時間上の先後を設くる能はざるものとす、然れど現今比較宗教學の智識を以てしてはシュルツェの意味に於ける咒物崇拜なるものは吾人實に實際上その存在を疑はざるを得ず、若し果たしてシュルツェの謂ふが如き咒物崇拜なるもの、現今世に存在せざるものとなし、而てブライデラーやマックス、ミュラーの定義せし如き意味に於ける咒物崇拜を探りて之れを考ふれば、斯かる咒物崇拜は自然現象の崇拜以後に表現し來りたるの宗教たるや論を待たず、從て今日吾人の知り得る限りの宗教に在りては自然崇拜を以てその最も古るき原始的宗教なりと斷言するに憚らず、是れ或はチャーレ博士の想像せし最古の原始的宗教なる多活物神的宗教 (Polyzoische Religion) なる

もの、面影を存しをるものならんか。

此に至りて余は余の嚮者に論明せる、宗教の起原を以て新石器時代に在りて存すと爲し、而て新石器時代に於ては明かに彼れ等原始人類の宗教心を有しをりし所以を證明するに足る、墳墓土塔偶像咒符有孔の頭蓋等の遺物ありて存し、而てこれ等の遺物は新石器時代より舊石器時代に漸々廻回するに從て、次第に減少し行き、而て舊石器時代に入れば全然その跡を斷つに至るが故に、宗教の起原は恐らく新石器時代に在りて存するならんと推斷せし所論を回顧し來るに、今斯かる土塔偶像咒符有孔の頭蓋等を有しをれる彼れ等原始人類の宗教的意識を探りて、仔細に之れを檢するに、斯かる發達の程度に在る宗教も又原始的宗教心としては稍複雑なるものにして、未だ之れを以て全然最古の原始的宗教心と稱する能はざるものとす、何んとせば元來斯かる有孔の頭蓋咒符等に對して奉祀祈禱するに至りし、彼等原始人類の宗教的意識は即ち咒物崇拜、心靈崇拜の行はれをりし時代を表はすものにして、而て斯かる心靈崇拜や咒物崇拜は未だ必ずしも最古の原始的宗教なりと稱するを得ず、却て彼の自然崇拜の如き原始

宗教は之れより尙一層古るき宗教の表現なるや余の嚮者に屢々論明せし所の如くなれば、彼の新石器時代に於ける宗教は今日その遺物に徴して之れを考ふるに、新石器時代は彼の呪物崇拜や心靈崇拜の普ねく行はれをりし時代にして、而て斯かる呪物崇拜や心靈崇拜の跡全く無きに至りたる舊石器時代に於ても、彼の呪物崇拜や心靈崇拜の如きに比較して、一層簡單なる自然崇拜の如きは、尙能く容易に行はれ得可く、又自然崇拜にして尙しくも心靈崇拜や呪物崇拜に先ちて存在しをりし宗教なりとせば、自然崇拜は心靈崇拜や呪物崇拜の行はれ居たる證據尙不充分なる舊石器時代に於ても、早く既に行はれ居たりと稱するも強いて不當の推斷には非る可し、否な寧ろ至當の推論なりと謂ふ可きなり、少くとも彼のチーレ博士の所謂多活物神的宗教の如きは彼の心靈崇拜や呪物崇拜の行はれ來たりたる新石器時代に先ちて、既に舊石器時代の太古遼遠の昔時に於て早く行はれをりしや明かなりとす、果して然らば今日現に存在しをる原始時代の宗教的遺物の上のみより單に之れを考察し來るときは、宗教の起原は或は之れを以て新石器時代に在りて存すと稱するの極はめて至當なる推斷

なりと雖も、今斯かる新石器時代に存在しをる宗教的遺物に徴して之れを考へ、その結果當代の宗教を以て呪物崇拜若くは心靈崇拜なりと斷定し、而て彼の自然崇拜少くともチーレ博士の謂ふ如き多活物神的宗教の如きは、心靈崇拜や呪物崇拜に先ちて存在し得可き心理的必然の數に出づるものなりとせば、吾人々類の宗教的意識の起因は極めて茫漠たる太古の舊石器時代に濫觴しをると稱するも又全然根底無き學者の空想たるに非ざるを知る可きなり、果して然らば今日確乎たる宗教的遺物の證據に徴して、宗教の起原に關する客觀的證左を求めれば、宗教の起原は新石器時代に始まると稱せざる可からずと雖も、若し更らに之れを吾人の心理的必然の理由に訴へて之れを考察するときは、宗教の起因は尙ほ一層幽遠なる舊石器時代の昔時に在りて存すと謂ふ可く、尙廣く之れを言へば宗教は人類と共にその始を成しと稱するも敢て過言に非ざるものとす。

以上論じ去り論じ來たりたるが如く、原始時代に在りて吾人の心意を外部より刺撃觸發して宗教なる現象を惹起したるものは、其數諸多あり、則ち自然現象や

二〇四

心霊や咒物や『トテム』等是れなり、而て此中最も早く吾人の精神を刺撃して、宗教なる現象を惹起したるものを自然現象となす、斯くの如く是等諸多の外界客観は能く吾人々類の精神を刺衝し觸發して宗教なるものをして以て此に生成せしむるに至ると雖も、宗教は單に斯かる外的客観の勢力のみ是れあるも、吾人々心の内部より之れに應動作用するものあるに非ずんば到底宗教なる現象の成形を見ること能はざるものとす、是れ彼の微少動物に在りては吾人と同一の境遇や環象の中に在りと雖も、吾人と同一の心意作用を具備しをらざるが故に、彼れ等の中には一も宗教なる現象の存在を見ること能はざる所以なり、之れと同く吾人々類も何かに以上列舉せし如き外界周囲の諸勢力の刺撃觸發に逢ふと雖も、能く内より之れに應動作用するの心意作用無くんば到底宗教なる現象を生成するに至らざるものとす、果たして然らば宗教なる一現象を生成するに必要なる吾人の心意作用とは果たして何かなるものなる乎、智乎情乎將た意乎但しは之等三者中の二者若くは全般の共働作用なる乎、是れ將さに吾人か更らに節を改めて論究解明せんとするの問題なりとす。

第五節 宗教生成の内的要因

吾人は前節に於て既に宗教の外的要因の何にたるを論明し措きたるを以て、今や將さに進んで宗教生成の内的要因の何邊に在るやを説明せんと欲するなり、然れど宗教生成の内的要因を説明するに先ち、一言彼の宗教を以て我々の人心中に既成的形狀を具備して既存しをれるものなりと説く宗教の先天觀念説を茲に論評し措かん、蓋し此の説は宗教を以て吾人の先天的觀念 (Angeborene Idee) と爲し内部主観の上に既存しをるものなりと説くを以て宗教の生成を説明するに吾人の内部主観の側より之れを嘗試みんと企つるものなればなり、今宗教を以て先天觀念として既成的に吾人の精神中に存在しをるものなりと主張する學説は、之れを宗教の生成を説明するの唯理論 (Rationalismus) にして、彼の宗教が神に由りて吾人に與へられたる天與の神賚なりとせる、宗教の超自然主義に反對して宗教なるものを唯理的に吾人々類の精神中に既成既存しをるものなりと主張するものとす。然れど十八世紀の昔時は兎も角も十九世紀末の今日、科學的心理學が漸く實驗的に吾人の心理作用を論究するに至りたるより、斯か

る先天觀念なるものが吾人の精神中に既存しをるとの説は全然否認せらるゝに至れり、加ふるに宗教の先天觀念説たる彼の唯理論にありては、今日に於ける吾人の智識に照して眞理なりと認め得らるゝ宗教上の事項をのみ獨り能くその先天觀念として採用するもの、然れば吾人現今の智識に照して否眞理空想と認むる所のものは一切之れを否定し、それは眞正なる宗教に非らずして僧侶爲政治家の偽作に出で、以て人心を狂惑せんが爲めの方便に過ぎずと説かざる可からざるに至るものとす、然れど宗教的事實の生成に關する斯くの如き學說の到底維持すべからざるものたるは本章第三節に於て詳論せしを以て今更に此に之れを贅せざるべし、然れど吾人の宗教を解するは彼れ唯理論者と異にして、一宗教に於てその如何に今日吾人の智識を以てしては荒唐不稽の妄信と化し去り、吾人現今の智識に照らして不合理なりと認めらるゝ所説も、それは吾人より數百年の昔時にありては荒唐ならず不稽ならざる眞面目の宗教的信念なりしものたるを主張せんとするものなり、前代に於る人文發達の進度は今日の吾人の如く尙そを以て荒唐不稽と看破するの眼識を具有しをらず、從て前代智識の全幅

を捧げて眞面目にそを眞實正確なりとして承認しをりし所のものたるを以てなり、然れば斯かる意味に於て今日吾人の眼光を以てしては眞に荒唐不稽取るに足らざるの妄説も、人文開展の某歷程上に在りては、夫れ相應に眞理を具有しをりし所のものとす、然れば斯かる見解の下に宗教を解釋する時は敢て一宗教にして今日現に吾人の智識に契合しをらざる部分夥多あればとて、そを以て全然爲政者僧侶輩の故造偽作に販し去るの必要なく、又強て宗教を吾人今日の智識に合はして附會するの必要をも見ず、宗教の解釋は頗る自然的となり能く容易に幾多の難關を通過し得るに至るものとす、是れ吾人の宗教を論明するに當り彼れ唯理論者の見解に左袒せざるの一因由なりとす。要之彼の十八世紀に於ける宗教の唯理論的解釋は、先天觀念の既成的存在説の實驗心理學上全然其論礎を失ひしより、最早や到底維持し得可からざる非科學的の獨斷論と化し去るに至りしものとす。

斯くの如く宗教の生成を以て單に吾人々心の内部にのみ在りて存すと説き、而かもその宗教なるものは既成的觀念として存在しをるものなりと主張せる十

宗 教 新 論

八世紀に行はれたる唯理論的解釋は到底今日に維持し得可からざるの僻論たるを發見するに至れり。此に於て平學者各吾人の精神作用上に宗教の生成を考察し、智情意の三方面より之を攻究するに至れり、その中宗教の生成を以て吾人の智性上に在りて存すと説ける學者は彼のヘッシエル、ラッツェル、シュルツ諸氏の如き是れなり、則ち是等三氏は宗教の起原を以て理論的智性にあるものとなし、之れを以て人心の某結果に對してその原因を求むるの自然的傾向の結果なりと論ぜり、その中ヘッツシエル氏は其著人種學(Völkerkunde)に於て宗教を論じて、一切の人類は皆其の文化の程度々々に應じて内部より起る宗教的感覺なるものありて存し、此の内部より來たれる必要の衝動に迫られて此に宗教なるものゝ發生を見るに至るものなり、則ち宗教は人間が各種の現象出來事を見るに當りて、その原因を求めんとするの動機より起りたるものにして、古代人文の尙幼稚なる時代に在りては、此の原因を探ぐりて、之れを人化し神視するに至り、此に諸種の神話を胚胎せしものなり、然れば宗教の起原は吾人人類が諸般の現象出來事を目撃するに當りて、之れが因果の關係を了知せんとする智性に基づけ

本 論

論

るものなりと説けり。之れに反して宗教の起原は主として感情に基づくものなりと説ける學者あり、古代に在りてはペトロニウス(或は曰くルクレンテウスなりと)の謂へる如く、人は恐怖の情ありて而して後ち初めて世に神ある(Primum in orbe deos fecit timor)ものにして、則ち宗教は恐怖の感情に衝動せられて生起し來たるものなりとの説なり、之説は近世に於ては彼のハッパスが成立宗教の現出以前に於ける宗教なるものゝ生成を説明せんとて、熾んに主張したる所のものなり、彼のフイエル、バハ氏又宗教を以て人心の利己より出づる願望(Wunsch)とその願望を妨ぐる、人力を以て抗し難き自然力の強大なるを畏懼するの恐怖心なりと論じ、英のフーム氏亦恐怖(Fear)と希望(Hope)との情は宗教の真因なりと説き、聖書は神を畏怖す(Deo has ros) (Deo)てふ語を以て宗教の義に用ゐたり、之れに反して喜悅の情は宗教の起因を爲すと主張せる者はロバートソン、スミス氏なりとす。斯く以上の諸氏は或は恐怖或は喜悅等の感情を以て宗教の生成を説明せんと企つるものなりと雖ども、又他に意志を以て宗教の生成を説明せんと企つるものありアルフレッド、エーバー氏の如き是れなり、勿論ウエバー氏は前

諸氏と同じく宗教の起原を以て人が死を恐るゝ恐怖の情に在りと説き、而して更に死を懼るゝ恐怖の情の因りて基いする淵源を尋究して、吾人の意志、殊に主として生存を欲するの意志に在りて存すと説けり、故に氏は宗教生成の依りて以て基いする所の淵源は吾人の意志に在りて存すと爲し、宗教生成の本源を意志作用に歸せんと欲するものなり、固より氏が生きんと欲するの意志は、頓がて其生を害し死を致すの原因を恐怖畏懼するの感情と成り來るや疑ふべからざるものにして、氏も生きんと欲するの意志とは死滅に抗するの謂ひなり、故に其の結果吾人に對して生殺の權力を有せるものは、何にもものに限らず、之れを恐怖畏懼するものなり、故に余は宗教を主觀的に觀察して、宗教は吾人に對して生死を與ふるの全權者が、その眞實の實在者たる空想上に畫がかれたる存在者たるに論なく、そのものが吾人の精神を震懼するの恐怖なりと謂はんとす、然れど宗教の基因は眞に吾人人性の奥底にその根柢を有しをるものにして、尙之れを詳言すれば、吾人の意志、殊に吾人の意識發達の程度が、未だ善の思想を以てその至高絶對の理想なりと認め得ざる以前に在りては、主として生きんと欲す

宗 教 新 論

本

論

るの意志に在りて存するものなりと説けり、(Vouloir être, c'est répugner au néant, c'est redouter par conséquent tout ce qui est supposé pouvoir anéantir et faire vivre. . . . On peut donc définir la religion en disant quelle est, subjectivement, la crainte que nous inspirent les dispensateurs, réels ou imaginaires, de la vie et de la mort; . . . Elle est l'expression primordiale et permanente de ce qui est le fond même de votre nature, la volonté et se résume dans le vouloir être, en attendant que la développement de la conscience lui fasse entrevoir sans fin suprême et absolue le bien. Alfred Weber: Histoire de la Philosophie Européenne, ps. 11, 12, 10.]

以上論明したる所之を要するに、宗教の起原を攻究して之れを吾人の内的精神界に求めんとするの學者は、吾人の智情意三作用中主としてその一にのみ偏着して、以て宗教を説明解釋せんと試みるもの、如くなり、雖も吾人を以て之れを見れば、斯くの如きは尙未完全に宗教の生成を説明し得たる所論なりと謂ふを得ず、何んとなれば吾人の精神作用は、時の古今を論せず、世の文野を問はず、或は智、或は情、或は意と様に各個別々に單獨の活動作用を營爲し得るものにあらずして、此の三作用は必ず共動的に活動せるものとす、是れ今日の科學的心理學

がカント以來吾人の精神の三大區分法たる智情意三分法の到底適當なる分類法に非ずして、理論上には最早や此の三分法に由りて心理學を敘述するを廢止したる所以なり、蓋し吾人の精神作用は斯くの如き全然三部に區別して何等の關係もなく、その一作用は單に夫れだけにて吾人の精神作用を完成し得るものに非ずして、必ずや他の共働作用を要するものとす、今此普關的心理學上の事實は吾人の宗教的意識の生成に關しても亦適用するを得可し、世の學者にしてその意志と感情とを同一視するとせざるとに關はず、宗教の起原を以て單に吾人の感情作用のみに在りて存すと説くもの多しと雖も、之れ決して妥當なる見解なりと謂ふ可らず、吾人の精神作用は必ずや智情意全體の共働作用ならざる可からず、固より吾人の心海に心的波瀾ありて生起し來たるや、智情意三作用中その一の何れかを表面として發現し來ると有る可く、而てその智或は情或は意の三者中、その表面となりて表はれ來たるものは、智情意ともその場合々々に從て、大に異なるものあらんが、此の三作用中單にその一のみ作用して、他は全然何等の活動をも營爲せざるが如く、考ふるは昔時に於ける心理學上の能力説

はいざ知らず、今日の科學的心理學に於ては到底維持す可からざるの誤見と謂はざる可からず、故にチーヒラー氏は氏が信仰と智識 (Glauben und Wissen) と題する論文中に於て、吾人の精神作用を分類して、比較的に感情の影響を蒙らざる思考 (Das relativ gefühlstfreie Denken) と感情の指導に由りて活動するの思考 (Das gefühlsmässige Denken) との二に分ちて吾人の精神作用を考察せしが如きは、智識 (思考) と感情との兩者が到底截分峻別し得可からざるを以て、この兩者を其儘兼用して、敢て之れを二分せんとせず、却て此兩者の交互關係上に吾人の精神作用の分類を試みられたるものとす。(因に謂ふチーヒラー氏は吾人の精神作用たる智情意の三者中、情と意とは畢竟同一なるものとなし、以て吾人の精神作用を分類せられしが故に、上に擧げたる如き吾人精神上の分類を見るに至りしものとす) 而して氏は尙吾人の精神作用が有機的統一を有して共働的に活動す可きものたるを論じて、左の如く謂へり。曰はく、吾人は吾人精神の心理學的研究の結果、眞に吾人精神の基本眞髓とも成る可き心意作用は、寫象に非らずして感情に在りて存するを了知認信すると同時に、吾人は又感情が吾人の他の精神作

用と極めて密接不離の關係に在りて存するの深きを認容し、感情は之れを銘鏤陶冶して一定の形式を得せしむる時は、必然的に思想を寫象とに變形改造せられ得可きを領得す可きなり (Je mehr man psychologisch zu der Ueberzeugung kommt, dass der Intellektualismus Unrecht habe und nicht das Vorstellen, sondern das Fühlen die eigentliche Grundfunktion des seelischen sei, desto mehr wird man seinem Zusammenhang mit allen nebrigen psychischen Funktionen anerkennen und zugeben müssen dass das Gefühl sich notwendig auch umsetzt und verdichtet in Vorstellungen und Gedanken) 〆。故に吾人人類の精神にはその人類が何かに開化し居るも何かに野蠻なるも、必ずや智情意三作用の共働ありて存するもの、唯人類智識の文野優劣に由りて智情意三作用の依りて表はれ來たる可き強度分量を異にし、蠻人小兒に在りては感情表現の強度他の精神作用に比して比較的はその多きを見る、故に彼原始的蠻人の今日に遺こせる思想には感情的表現の産物多きの事實あるが故に、彼の宗教の起原を論じて宗教は吾人の感情に在りて存すと説くの學者多き所以なりとす。然れど何かなる蠻人と雖も毫も自己の知らざるとや意志せざるとを恐怖するの感

宗 教 新 論

本

論

情ありて存すると能はざるが如く、その宗教的意識の依りて成れる要素は必ずや又智情意三作用を包有しをらざる可からざるものとす。矧んや吾人の智識尙未だ發達分化せざる以前に遡りて之れを考ふるときは、吾人の精神作用は之れを智とも情とも意とも得て以て命名す可からざるツントの所謂衝動 (Trieb) のみ在りて存するものにして、吾人之れを心原 (Psychosis) と稱す、吾人の精神作用なるものは一度は何れも斯かる智情意の何れとも命名し得可からざる、冲漠無朕の混沌たる不分化的状態に於て存せし所のものにして、而て吾人の心意は此未發達の状態より次第に開展分化し來たりたるものなれば、今日吾人の所謂智情意三作用も畢竟その心原に於ては同一に歸す可きものたるの理得て明瞭たるの今日に於ては、智情意三作用を各特別の能力として考へ、此等三者は各直接の關係ありて存するものに非らずと思考しをれる立脚地よりして、吾人の精神作用を論究するの學說とは大にその見を異にするものあるに於てをや。故にナイト氏曰く、人間の各心的能力なるものは何かなる時に於ても常に決して單獨に存し單獨に作用し得るものにあらずして、人間の各心的能力は即ち人間の

有する意識的生活の一表現に外ならず、換言すれば人間の全意識的生活が、單に活動の特種なる系脈となりて表現し來たりたるより、爰に復た特種の心的能力と成りて表現し來たるものとす (It must be remembered that no power or faculty of human nature ever stands alone, or can at any time act alone. Each is but a manifestation of conscious life working along a particular channel of activity. Knight: The philosophy of the Beautiful, Vol. II, p. 12.)⁵⁰ 實に今日吾人の精神作用が既に發達せる後ちに於ても、有機的統一の下に活動しつゝあるの事實明白となりたる今日にありては、原始人類間に於ける宗教の生成を以て吾人の智情意三作用中、單にその一にのみ歸して之れを考察せんとするが如きは到底學理の正鵠を得たるものと謂ふを得可からざるものとす、然れば吾人は宗教なるもの、生成は縱令吾人の智情意中其一が表面となり至大なる強度を以て表現し來たり、而て他の諸作用の之れを補助する有りて爰に初めて生成し得るものなりとするも、之れを概言すれば必ずや吾人の智情意全作用に在りて存すと斷言するに躊躇せざるものとす、成る程前節に於て吾人の論明し措きたるが如く、彼の外物と自己との區別も未だ判知し得

ず、肉躰と心靈との差別も亦充分ならざる原始民族にして、一朝風雷雨霆天災地妖の自然力の襲撃に逢はんか、忽ちにして倉皇驚愕措く所を知らず、恟々として唯そを恐怖し畏懼するに止りて、何等の他に爲すべき事をも悟らず、遂に斯かる天然力を人化し神視して此に自然崇拜なる最古の原始的宗教は生成し來るものなるとは眞個に事實なるべしと雖も、吾人の見る所を以てせば斯かる原始人類の場合に在りても、吾人は彼等の天然力を恐怖畏懼して遂にそを人力を以て抗す可からざる優勢の活動者なりと觀じ、遂に茲に之れを神化し崇拜するに至るや、固より其の恐怖畏懼の感情に基くものなりと雖も、此の感情に伴ふに必ずや智意兩作用の共働伴隨しをるものありて爰に自然崇拜教を生起するに至りしものなり、抑、彼の所謂天然力を恐怖畏懼するとは何ぞや、是れ實に吾人の感情作用なるべきも、その天然力を恐怖畏懼するには兎に角彼等原始人類も、先づ其の天然力の強烈優勢なる、到底人力を以て抵抗し難きものなることを認知し居らざる可からず、而かもそれを認知せんとせば吾人は先づそれを認知せんと欲する意志活動を要するものなり、何んとなれば縱令其の外來の刺撃は何かに強大激烈

なるにもせよ、兎に角斯かる勢力に遭遇してその勢力に内部より應動自發するの心的作用即ち意志作用在りて存するに非らざれば、恐怖の情そのもの又生起し來らざる可ければなり、故にヴァント氏はその生理的心理學に於いて、苟も意志活動にして無からんか、吾人の意識なるもの毫も存するとあるとなし (Kein Bewusstsein ohne Willensfähigkeit) と斷言せり、即ち内に先づ吾れより應動すべき意志活動無からんか、何かに外來の刺戟は強大なるも之れを視て視ず之れを聞いて聞かざるに終らん、果して然らば彼の風雨雷霆の激動や天災地妖の震撼や、その勢力何かに強大激烈にして吾人々類をして恐怖畏懼の情に堪へざらしむるものありと雖も、吾人々類の斯かる自然の大活劇に遭遇するに當りて、それを恐怖畏懼するの情を惹起するに至らんには、必ずや之れと共にその天然力の果して恐怖畏懼すべきものたるを認知し居らざる可からず、而かもそれを認知せんが爲めには吾人々類の意志活動は多少之れを認知するに足るの注意作用となりて表現し來たらざる可からず、斯くして畢竟吾人の天然力を恐怖畏懼するに至るは、それを恐怖畏懼するの感情に伴隨して智意の二作用ありて吾人の感情と俱に共

働しをるを見ずんばある可からず、既に吾人は單に彼の天然力を恐怖畏懼するのみにても斯かる複雑なる智情意三作用の共働活動ありて存するを認むるものなり、矧んや其天然力の恐る可きを見て、それを人化し神視して所謂自然崇拜教なるものを表現するに至りては、其原始人類の意識活動を分拆し來らば、明かに其内には幾多の智情意三作用の共働俱存し居るの事實を發見せずんばあらざるをや、果して然らば彼の原始宗教の生成を論ずるに當りて、それを單に吾人の智情意の三作用中、その一にのみその起原を歸して止むが如きは、未完全なる宗教生成の事實を吾人の心意作用上に探り得て満足なる説明を與へたるものなりと謂ふを得可からざるものとす、勿論彼の原始的宗教の生成には、主として恐怖畏懼の如き感情が表面となりて、吾人々類の意識内に活動し來たるや事實なる可し、然れど此の感情作用の表現の強大なるが故に之れを以て直ちに智意兩作用を看過し、此二作用を全然没却し去るが如きは頗る皮相膚淺の見解たるを免かれざるものとす、然れば宗教の生成には吾人の心的活動として、知情意三作用の共働俱存しをるものなりと稱するの正確妥當なるを見るものとす、尙又此に

注意すべきは、吾人は原始宗教の生成には知情意三作用を要すと説くと雖も、彼の原始人類自らに在りては、その三作用の現に自家意識内に活動しつゝあるの事實を、此時既に自識し居らざる可からざるの必要は毫も是れあらざるなり、否、な蠻人は斯かる事實は全然之れを自識しをらずして、無意識なるも毫も差支へ無きものとす、之れ宛も音響の物理的法則を知らずして、尙能く物を聞くを得べく、認識論を學ばずして、尙能く事物を識知し得んに差支へ無きが如きなり、然れば原始時代に於ける宗教の生成には、吾人人類の知情意全作用を要するものたるや疑ふ可からざる事實なり、然れどそれを彼等原始人類が自から意識しをるの必要ありと稱するには非らざと是れなり。果して然らば以上論じ去り論じ來たりたる所、結局之れを要するに、宗教の生成に於ける吾人々類の内的要因としては、吾人々類の全精神即ち知情意三作用の共働作用を要するものたる所以を明かにするに在りて存するものとす。

第六節 原始的宗教と宗教の發達歷程とに於ける内外の兩要因

以上節を重ねて次第に論明し來たりたるが如く、宗教の生成には必ずや外部現象の觸發感化と内部人心の應働作用とありて、此に初めて宗教なる一現象を生成し來たりたるものとす。然れば、宗教なる現象は、決して天降地湧なる神寶にも非らず、又僧侶政治家の偽作にも非ず、又人心の疾患にも非らず、又既成的の先天觀念にも非らずして、吾人の精神と外界の刺撃との兩者相待ち相合して此に初めて宗教なる現象を生成し來たりたるものとす、然れば宗教なる現象の生成を以て單に外部的勢力の刺撃にのみ歸し去るか、又は内部的精神作用の一にのみ歸し去らんとするが如きは到底充分なる宗教生成の解釋たるの資格無きもの、宗教は必ずや之れを内にしては、知情意全作用より成る内的精神の活動と、之れを外かにしては或は自然現象或は心霊或は呪物の如き外界の諸現象の觸發とありて此に初めて生成し來たれるの一現象なりと云はざる可からず、然れば宗教の生成には吾人は其の要因として實に内外の二要素ありて存する所以を承認せざんばある可からざるなり。故にマックス、ミュラー氏も亦宗教の外部的原因たる自然現象の外に、内部的に一種の心的能力在りて存し、之の能力あるに由

りて、この内外兩能力の下に初めて能く宗教は生成せらるゝに到るものなりと説き、氏は尙誤解を避けんが爲めに、この能力を呼びて彼の宗教の對象たる無限を感知するの潜勢力なりと謂へり。其他ソーサー、フエアベアン、ツェラーの如き皆この見解を持するもの、トルストイ曰く、吾人の神を知るは精神にあらざして吾人の全生活なり (It is not the mind that understands God, It is life makes us understand God) と。其意蓋し吾人が吾人の宗教的對象たる神を把持するに至るは、單に吾人の智的作用のみに止まらずして、智情意全作用即ち吾人の精神全作用を以てす可きは勿論、吾人の内界外界に關する一切の智識經驗即ち人生の全幅を以てす可きものなりとの意に在りて存するものとす、知る可し宗教の生成には内外兩要素の相待つの必須缺く可からざるの條件なることを。

以上論明し來たりたるが如く、宗教の生成には内外の兩要因ありて存するを要し、而して其の内的要因としては、吾人の智情意全作用の共働作用を待たざる可からざるとを説明したり、然り而して吾人は又單に吾人人類の原始的宗教の生成にのみ内外兩要因の具備せるを要するのみならず、其後斯かる宗教の朴素的

意識より漸々發達開展して高等なる宗教思想に到達するに及びても、愈々益々宗教には内外兩要因の必要ありて存するを認めずんばならず、何んとなればベッセル氏の所謂原因結果を識知せんと欲するの智識は益々發達して世界の最高實在究竟原理を求めんとするに至るや、之れと同時に意志的方面に在りては其の表現は最早や生きんと欲すてふ簡單なる意志に止らずして、命令禁止の如き内部良心の聲として發現し、善理想の追求を胚胎し來り、之れと同時にその感情は益々發達進化を來たし、自然の妙趣を感得し宇宙の美妙に擊動せられ、吾人をして嚮者に空想的に諸神を想像せしめをりし空想作用は、合理的に科學上の憶説を構成する合理的想像と變じ來たり、哲學を考ふるにも宗教を説定するにも、道德を講ずるにも、此等智情意の三作用は愈々益々近接密着して此三者は不可分離的關係を保有するに至るものなればなり、斯くの如く吾人の内的原因として、智情意三作用の在りて存するを要するは勿論なりと雖ども、吾人は之れと同時に外的要素の附加するありて此に始めて宗教なる現象の生成し來たる所以を決して忘却す可からざるなり。例之ば印度は印度てふ外部現象の影響

感化ありて此に初めて婆羅門教や佛教をその原始的天然崇拜教より發達し開展し來たり、猶太は猶太てふ外界刺撃の下にそのヤエーの天然崇拜より各預言者の倫理的宗教や基督の世界宗教を發達開展し來りしものとす。若し又之を内部の精神作用上に考察せんか、印度人の智的冥想に耽けるを好める、元來宗教の事たる吾人人類の精神全作用の活動に待つものなりと雖も、印度に在りは特に其智的思辨の方面は著るしく表現し來り、先づ此にその太古の天然崇拜より優婆尼婆土や佛教の認識論的唯心主義の哲學宗教を分化し來たり、猶太に於ては其人民が元來智的美的思想に乏き、彼のヤエーの天然崇拜が漸く痕を匿くすや、之れに代りて國家的生存の必要上より國民的唯神教(Nationaler Monotheismus)の表現し來り、再轉して預言者の倫理的唯神教(Ethischer Monotheismus)と成り、更に進みて基督の世界的宗教を醗酵し來たるに至れり、然り而して元來セム民族の思辨的空想を嗜まざる、その宗教的意識の發達や唯一眞神の攝理と救濟とを信ぜる唯一神教的倫理的方面に開展進化しゆけり、斯くの如く印度猶太の兩思想とも一方は智的一方は情的若しくは意的方面に各自著るしく發達開展し

來たりしと雖も、若し仔細に之れを分拆し來れば、印度思想中にも情意の因子著るしく含有せられざるあり、猶太思想中にも智的要素を全然闕如しざるに非らずして、印度猶太の兩思想は共に全然吾人々心の智情意全作用より成立しざるものたるを能く容易に了知し得可きなり、吾人は實に彼の宗教の生成に、その内的要因として吾人人心の全作用の必要なるを主張せるが如く、宗教は其發達開展の何かなる歷程進途に於ても、必ずや吾人の智情意全作用の活動より成るものたるを認容せずんばならず、今吾人は此の事情を聊か詳細に説明せんが爲めに、更に章を改めて現今に於てその發達開展の高級度に進達しをれる諸種の宗教的意識を分拆解剖して、高等なる宗教的意識も亦彼の劣等なる原始的宗教的意識と同しく、吾人人類の智情意全作用より成るを要し、而してその發達の最高級に位する吾人の所謂宗教そのもの、概念は果たして何かなるものなるか、換言すれば若し吾人にして歴史的心理的に宗教の本性を考察し來れば果たして何かなるものなるかを考覈闡明する所あらんとす。

第二章 宗教の本質

第一節 高等なる宗教の意識を分拆するの必要

宗教とは何んぞやとの問題に向ひて、幾分か完全なる解答を與へ、其語の表明せる内容をして明瞭ならしめんとするには、單に宗教の原始的状態をのみ考究し、發達史的研究のみを以て満足し得可からざるものなり、何んぞなれば是れ既にソーサー氏の云へるが如く、斯かる研究法に由りては宗教の原始的たるの性質は或は之れを知悉し得可しと雖も、之れを發達進化の最高點に迄到達しをれる宗教の分析的比較對照し來りて宗教的意識の内容を明かにするに非ざらんば、宗教の切實至要なる特性に至りては得て窺ひ知る可からざればなり、是故に吾人は孤憑を研究し、咒術を考査し、南洋亞非利加に於ける蠻人の宗教を研究すると同時に、釋迦基督の宗教的信念を精査分拆し、佛教基督教に説く所の教理を考査して、その宗教的内容の何にたるやを闡明せざる可からず、斯くの如くにして吾人は初めて今日發達の最高頂點に到達しをれる宗教的意識の本質 (essence) を

宗 教 新 論

本

論

essence) を明知し得可く、斯くの如くにして初めて宗教研究の完きを期するを得可きなり。故に宗教成立の一切の要素を知悉して、完全なる宗教の概念に到達せんと欲せば、吾人は現今その發達の頂點に到達しをれる宗教の本質に鑒みて、其至切重要な因子要素を分拆し、以て現今その發達進化の頂點に到達しをれる宗教的意識の内容を精査考査せざる可からざるものとす、彼の單に宗教の原始的劣等の形式をのみ發生學的方法に由りて研究し、而て之れを以て宗教研究の能事了はれりと成すものゝ如きは、恰も吾人の知覺概念意志感情等の生成を發達史的に研究して其心理學的基础を究明したるの故を以て、直に吾人認識の原理を領得したるが如く速断すると一般にして、何かに吾人は吾人の心的作用の發生を究明するも、今日吾人の成遂しつゝあるが如き認識の原理に到達したるものと謂ふ能はざるなり、勿論吾人は吾人の精神作用を發達史的に研究するは大に吾人認識論の研鑽に資するものあるや明かなりと雖も、その發達史的研究のみにては未だ充分なる認識の研究を盡くし得たるものなりと謂ふ可からず、認識論は認識論として自ら發生的に吾人の心的作用を研究するの心理學と異

なる所のものありて存するが如く、宗教の原始的發生の有様を研究すれば、之れに由りて大に宗教なる概念に到達するに資するものありて存すと雖も、單に之れのみを以て宗教なる概念の内容を悉皆領解し得たるものなりとは思惟するを得ざるものなり、然れば吾人は智者に前章に於て宗教の原始的生成の有様を研究し、その主觀客觀内外の兩要素より成立しをる所以を論明し置きたるを以て、今や本章に於ては宗教なる概念を諸學者の說に徴して替查攻究し、その何かなる本性を具有しをるかを究明せんと欲するなり。

第二節 宗教即ち Religion なる語原を論ず

宗教なる概念を明瞭ならしめんが爲めに、吾人は先づ宗教なる語原上の意義を探討す可し、則ち宗教とは英佛獨等の國語に所謂 Religion にして拉丁語の Religio なり、然るに拉丁語に所謂 Religio とは果して何かなる意味なるかと云ふに、是れには古來より主として二様の解釋ありて存し、ラクタンテウス氏の說に由れば、Religio は religare 即ちものを結約するてふ意味の動詞より來たりしものにして、吾人は生れながらにして神に事ふるの義務を有し、吾人は敬虔の紐條を以て

神に結約せられをるものなり、然れば宗教即ち Religio とは religare 即ちものを結約するてふ動詞より來りて、神人の結合關係を現はすに宗教即ち Religio なる名詞を以てするに至りたるものなりと謂ふに在り。然れど此ラクタンテウス氏の說は、純粹なる言語學者の說明に非ずして、寧ろ神學者の見解たるを免れず、殊にラクタンテウス氏の說に向て至大なる障礙となれるものは、彼の religare なる拉丁の動詞は元來純粹なる拉丁語に於ては結約の意義に使用されをらざりしと是れなり、故にラクタンテウス氏の說は宗教即ち拉丁の Religio なる語原を説明して未だその緊背に衷するの解釋なりと稱するを得ざるものなり、然るにキケロー氏に由れば宗教即ち拉丁語の Religio なる名詞は、拉丁語の negligere 又は negligere 即ち英語の neglect なる注意せずてふ動詞の反對なる注意する (to care) 尊敬する (to regard) 崇敬する (to revere) の意義を有せる religere なる拉丁語の動詞より來りしものなりとす、聖アウグスチヌスの如きはラクタンテウス及びキケローの兩說中その一を時宜に應じて採用しをりしが、近世の神學者等は宗教なる名詞はラクタンテウスの所謂神人の結合關係を表明する religare なる

る動詞と、キタローの所謂 *telegero* 即ち崇敬するてふ動詞とより來れる兩種の意義を合して、宗教即ち *Religio* なる名詞は、此兩種の動詞より由來せるものなりと主張する者多しと雖も、マックス、ミユラー氏の如きはキタローの説に左袒して宗教即ち *Religio* なる名詞は畏敬尊崇の意義より來れるものなりと結論せられたり。其他 *Religio* なる語原に關してはマスリウス、サピヌス氏等の説無きに非れども、聲音學上到底維持す可からざる憶説なるを以て今一々茲に之れを枚舉せず、然れど要之余は宗教なる語原はキタローの説を以て言語學上その正鵠を得たるものと信ずるものなり。

第三節 宗教は外形の儀式にありて存するか

宗教を以て人生の病的現象に外かならずとなすものは、古代既にヘーラクライトス、エピクローロス等の希臘哲學者に由りて稱道せられたるの説にして、ヘーラクライトス氏は宗教は縱令神聖なる疾患なるにもせよ、一種の疾病なり (*ἡν τε οἰν-οῦν ἰσθάν νόσον εἴη*) と主張せり。雖然斯くの如き極端論は、當時民間に流布しをれる宗教たる希臘の腐敗せる多神教を破壊して、人民一般に向ひ神聖なる真宗

教を鼓吹せんとするには與りて力あるものなりと雖も、之れを一種の學説として考ふるときはその不健全なる彼の唯心論又は唯物論が不健全なる僻説にして到底吾人の精神全般の需要を充す能はざると一般なるものなり、然れば宗教を以て病的現象と爲すの所論は、猶ほ宗教の起原を以て人心の病的現象に出づと傲せるの所論と共に到底維持す可からざるの僻論たるや勿論にして、結局宗教を説明するの健全なる學説に非るものなり、故に余は今深く此種見解の批評に立ち入るを止め、更らに宗教を以て吾人の外形に表はれたる行爲行動に在りて存すと爲せる學者の所説に對して之れが論評を試みんと欲するものなり。先づ宗教を以て人類が神を崇拜する行爲行動に在りて存すと爲せる見解を持せるものは彼のキタロー氏は是れなり。氏は宗教を定義して、宗教は諸神の儀禮 (*Cultus deorum*) なりと云ひ、或は宗教は敬虔なる諸神の禮拜に存す (*Quae deorum cultu pio continentur*) と説けり、其他希臘古代の宗教が或は「アルフォイ」の神殿にアポロン神を祀つり「オリュムピヤ」の祭禮に諸有儀式を盡して諸神を供養せるが如き、埃及巴比倫等に於ける犧牲奉獻式の如き、パプア人種の宗教がカルヴァール神

の禮拜祭祀に於て存するが如き「ミズリ」河畔のクロスエンター印度人の日月星辰山河草木等一切の事物を神視し之れに神事するが如き、我國の神道家佛教僧侶の職として祭祀葬禮の儀式をのみ是れ掌どるが如き、羅馬舊教の禮拜儀式を是れ易め、新教の祈禱式を行ふが如き、宗教なるものは皆なその僧侶教徒の外形的行爲行動に在りて存するものゝ如し、彼の聖書に於ける聖シェームス氏の書簡第一章第廿七節に、神なる父の前に潔くして穢れなく事ふるとは孤子と寡婦を其患難の中に眷顧ひ、又自ら守りて世に汚れざる是れなりと云へるが如き、皆な宗教を以て吾人の行爲の外形上に表はれたるものに在りて存すと爲せるものなり。然れど余を以て之れを見るに、今日の宗教には勿論祭祀禮拜等の所謂宗教的儀式なるものありて存すと雖も、宗教の要素本質は必ずしも斯かる外形的行爲にのみ在りて存するものに非ず、否な寧ろ斯かる外形的行爲は歴史的には宗教の切要なる部分を形成せしものなりと雖も、今日に在りては現今行はるゝが如き煩瑣なる儀式禮拜等の外形的行爲は宗教に切實至要なるを見ざるものなり、彼の基督の天父の愛を説きて至純至粹なる精神的宗教を鼓吹し、以て猶

太の律法的に儀式上に成立せる宗教を排斥し、爰に真正なる精神上に救世の福音を説き、釋迦の婆羅門僧侶の虚式的禮拜や苦行的外道宗教に反對して、精神的解脱涅槃の正化を宣流したるが如き、ストラウスの宇宙秩序の整然たるを觀じてその所謂 *Kókos* たる所以の理を讚美するを以て真正の宗教なりと爲し、諸有儀禮虚式を用るざるが如き、カントが宗教は道德なりとの觀察點よりして、教徒の神意を迎ふるの意を以て、或は寺に詣で或は聖地を巡拜し、題目を稱へて祈禱するが如き儀式虚禮は一に皆な宗教的價値を有せざるものなりと論ぜしが如き、基督教の一派たるクエーカー宗徒の一切の外形的儀式を排黜せるが如き、其他婆羅門教の僧侶がその生活の四期 (*Asramas*) 中、その第一第二の兩期に在りては、或は日出に際して火を點じて其祭壇に太陽を祈り、太陽に向て古讃歌を謳ひ、或犧牲を神に供獻するが如き、外形的行動を以て宗教なりと思惟しをりしも、その第三第四の兩期に至れば斯かる外形的儀式禮拜を單に無用となせるのみならず、却りて斯かる外形的儀式を以て真正なる宗教に有害なるものと爲し、獨り山林に退きて靜かに道を修め宇宙の大精神 (*Paramatman*) に還没して、我は梵天なり

本義に背むくものなりと爲せるものなり。斯の如く宗教上に儀式を重んぜざるは單に高等なる發達の程度に在る宗教なるのみならず、現にモンシニョル、サルヴドなる舊教僧侶の報告に由れば、西濠洲の「ニュー、ナーション」の蠻民等はモトゴンなる天地創造の神を信仰すと雖も、彼等は之れに對して何等の外形的儀式をも有せず、皆に外形的禮拜を有せざるのみならず、何等の精神的内部の禮拜をも有するの痕を發見する能はざるものなりと謂へり、斯の如く一方に於ては宗教が儀式禮拜より成り、儀式禮拜を外にしては宗教無きが如くなると同時に、他方に於ては宗教には一切の儀式禮拜を有せざるものあり、然れば宗教を以て宗教とは單に外部の禮拜なりと主張するが如きは、大なる謬見なりとす、故にキクローの如きも、宗教を定義して宗教は禮拜なりと謂ひしにも關らず、其禮拜には外部的内部的の禮拜なるものあるを説けり、而て内部の禮拜とは即ち神を崇敬するの意なり、宗教とは吾人より一層高き神と稱する一種の勢力を崇敬し禮拜するものを謂ふ (*Religio est quae superioris cuiusdam naturae quam divinum vocant curam*

cerimoniarumque affectu) と謂へり、然れど此に所謂崇敬とは則ち外形的儀式に非ずして内部の精神的儀式たるものなり、然れば宗教の要素を單に外形的儀禮にのみ重きを措きて思惟しをりしキクロー氏に在りても、自然に宗教には虚式儀禮の外に心的要素ありて存する所以を否定するを得ざるに至れり、其他聖ジョームス氏の書簡に謂へるが如く、宗教の要は孤兒寡婦を訪ひてそを困苦より救ひ出だすに在りて存すとすも、吾人をして斯かる行動云爲を外部に發せしむるに至る内部的吾人の意識状態は何かん、又吾人をして斯かる宗教的行爲を惹起せしむるの素質は如何ん、此等は吾人實に之れを吾人の内部的思想觀念の上に求めざる可らず、然れど斯かる宗教的思想觀念は果して之れを宗教そのものを形成する要素と見做すを得ざるものなるか、余を以て之れを見るに彼の孤兒寡婦の困苦を救ひてそを慰問するが如き行爲も、内に先づ一種の宗教的意識の存するありて、此宗教的意識に感動刺衝せられて發表し來たれる外部の行動たるに非ずんば、吾人は何が故に之れを宗教的行動否と宗教なりと稱するを得可きか。其他所稱禮拜の如き一切の宗教的儀式が一種内部の宗教的意識の衝動に

由りて發現し來たれる外部的行爲なるとは更らに論ずるを要せざるなり。果して然らば或一種の行爲は所謂宗教的なるものにして、其宗教的行爲は吾人の宗教的意識の發動之れが原因となりて惹起せられたるものにして、宗教には斯る行爲行動の常に伴隨しつゝあるものたるは事實なりと雖も、斯る行爲其もののみが宗教なるに非ず、吾人は必ずや宗教には斯る行爲行動をして外部に表現せしむるの原因を成せる心的要素の存在しをるを認めずんばあらざるなり。

第四節 宗教は智性に在りて存するか

斯くの如く宗教は單に外形上の儀式禮拜のみを以て成立するものに非ずして、却りて内的要素の之れに先ちて内に活動するあり、以て初めて此に生成し來たれるの結果なるを見るものなり、果して然らば此内的要素とは何ぞや、曰く吾人の宗教的意識是れなり、然り而して吾人の意識は知情意の三作用の由りて以て表現する所の舞臺に外かならざるを以て、學者各々此吾人の心的舞臺に於ける、智性の作用に注目して宗教を論ずるものあり、情的方面を觀察して宗教を説明するものあり、意志活動に留意して宗教を考察するものあり、從て宗教に關する

學者の諸説亦一樣ならずとす、然れば吾人は左に少しく智情意三作用中その一方面より宗教を觀察したる學者の諸説を列擧して之れが論評を試みる。

先づ吾人々類の智性の側より宗教を觀察して、宗教の要因は智性に在りて存すとせざるものは、カント以前の哲學者に在りてはスピノーツに於て、カント以後の哲學者に在りてはヘーゲルに由りて熾んに稱道せられたる所のものなり、スピノーツ氏はその抽象的一元論(Abstracter Monismus)の立脚地よりして宗教の對象たる神を説明して、神は絶對無限の實在なり、自立自存の本體なり、換言すれば氏の哲學の根本原理たる本質(Substanz)の謂ひなり、吾人々類は素と是れ本質の變態(Modi)にして、神の本質海裏に浮沈出沒し生滅起伏するの波瀾に過ぎず、而して吾人は今哲學的思辨に依りて、智性上より本體と現象との關係即ち神と人との關係を知りて、初めて吾人々類の斯く蠢爾として蜉蝣の生涯に浮世の夢を貪ぼりをるも、亦是れ恒久不變の絶對的本質たる神の假現に過ぎざる所以を證悟し、時間の規定を離れ空間の羈約を脱したる神の無限恒久なる至上的實在の側面より、智性的に世界と自己との真相を達觀し、以て眇たる人身の一粟も亦本

宗 教 新 論

幹海裏の波浪たるを了知するに至れば、吾人此に神人融合の上より生ぜる一種の平和的心狀に到達し、恰も印度の婆羅門が梵天の本體に冥合して踊躍大觀喜(Wonne)の狀態に達するが如く、吾人は神に對する一種の愛を生ずるに至るものなり、然れど此愛や單に感情上の愛に非ずして智性の側面より得來りたるものなれば、氏は之の神に對する愛を呼びて、神に對する智性上の愛(Amor Dei intellectualis)と名けたり。斯くの如く、スピノーツ氏は宗教を智性上より觀察し、氏の自ら信奉せる宗教は即ち氏一家の哲學と同一に歸着するに至れり、而して其哲學上の本質即ち氏の所謂神なるものは吾人が智性上の思辨によりて到達したる理論的歸結なり、然ればスピノーツ氏に依れば宗教の要因は吾人の智性に在りて存するものと謂はざる可からざるなり。

ヘーゲル又その全理論(Panlogismus)の立脚地より宗教を定義して、宗教とは主觀即主觀的意識と靈なる神との關係なり、則ち有限の靈が自己の本質の絶對的靈たるを知るの意識是れなり。(Religion ist die Beziehung Subjects, des subjektiven Bewusstseins auf Gott, der Geist ist; sie ist das Wissen des endlichen Geistes von seinem Wesen als ab-

本 論

論

soluter Geist: Pfeiderer: Geschichte der Religionsphilosophie. Bd. II. St. 414.) と謂へり、而て氏は尙歩を進めて眞正なる宗教と哲學とは實質上何等の差異あると無く唯その異なる所はその形式に於て存するのみなりと斷言せり、之を要するにヘーゲルの所謂神は氏の自ら公言せるが如く絶對的精神(Absoluter Geist)なり、即ち氏の哲學の根本原理たる *Nous* たるに外ならざるものなり。果して然らばヘーゲル哲學が思考(Denken)と實在(Sein)とを同一視し從てその論理學は即ち形而上學となり、一切の實在を論理思想の法則に由りて説明論下し去らんとする唯理的智性の一方に偏せるが如く、氏の宗教も亦唯理的智性の一方にのみ偏して、氏の宗教上に所謂神は純粹に理性の法則に由りて思辨し、想定せられたる哲學原理たるに外ならず、然れば氏もスピノーツ氏と同く宗教の本質を吾人の智性上に措かんとするものと謂ふ可きなり。

スピノーツ、ヘーゲル等の如きは宗教を以て吾人の智性のみによりて成立するもの、如く考ふると雖も、是れ大なる謬見たるを免れず、余は嚮者に既に論明しをきたるが如く、吾人の精神は有機的統一(Organische Einheit)を有しをるものに

て智情意の三者は縦令その表現の有様と強度とは之れを異にするものあるも、必ずや常に相伴ひ互に相共働して其作用を營みつゝあるものなり、然れば全然情意を離れて智性作用のみ獨り能く活動し得可きものに非るなり、故に健全なる宗教の構成には必ずや此智情意の三作用の共働作用を要するものとす、然ればスピノーザ氏の如く智性の側面より宗教を論ぜんとするも、結局充分に吾人精神の需要を満足せしむるを得ざる僻説と化し去りて、氏自からも智性のみにては一切の宗教的事實を説明し悉くす能はざるを以て、其極神に對する智性的愛情の如き一種の秘的感情を輸入し來るの止むを得ざるに至れり。又ヘーゲルに在りても氏はシュライエルマッヘル氏が宗教は絶對的憑依の感情 (Schlechthinigehängigkeitsgefühl) に在りて存すと説きしを冷罵して、若し宗教にして果してシュライエルマッヘル氏の言へるが如く、憑依從屬の感情に在りて存せんか、たと其主人との關係は宗教的關係の最大なるものならんと絶叫して憚らざりしと雖も、氏の全理主義は到底充分なる宗教の説明たるに足らざるを以て、氏自らも宗教には智性の外に感情の必要なるを説き、尙進みて常に感情のみならず又

意志作用の切要なるをも論じて左の如く云へり、若し吾人にして宗教を感情の側より觀察せんか、そは吾人の福德と呼ぶ所のものの享受なり、若し之れを活動として考へんか、神を崇むるの行動たるに外かならざるなり(中略)靈即ち精神の此地方や則ち是れ「レエテ」の河の灌漑せる所に於て、心靈即ち「フシハー」の一たび此河水に掬して其渴せる唇を濕すや、一切の苦痛辛酸は立ちどころに洗滌し去られ、時間上に表現し來れる万難千苦は一夕の妄夢と化し、以て永久の靈光と變ずるに至るものなり (Als Empfindung bestimmt, sie der Genuss den wir Seligkeit nennen; als Thätigkeit thut sie nichts anderes als die Ehre Gottes zu manifestiren, seine Herrlichkeit zu offenbaren, In dieser Region des Geistes strömen die Lethe-Fluthen, aus denen Psyche trinkt, worin, sie allen Schmerz versenkt, alle Härten, Dunkelheiten der Zeit zu einem Traumbild gestaltet und zum Lichtglanze des Erygen vorführt. Pfleiderer: Geschichte der Religionsphilosophie. Bd. II. St. 410.) 由是觀之ヘーゲルの全理的主義を以てしては到底充分に宗教なる事實を説明し去る能はざるものなり、實に吾人々類はラッド氏も既にその著認識論に於て謂へるが如く、論理的機械に非ず、論理の法則智性の作用

以外に尙他の心的活動を併有しをるものなり、然れば宗教の要素を吾人の精神上内部の活動上に求むるに於ては、必ずや情意を外かにしたる智性のみによりては、充分なる解釋を得る能はざるや明かなりとす。

抑、宗教を智性の側面より觀察して、理論上に宗教の教理を論明せんと企てしは、彼の猶太の宗教が希臘の哲學と會合せし時代に於て早く既に此徵候を現はししものなり、彼の猶太の思想なるものはその本來は理論的哲學的に非ざりしなり、然れど彼の基督教が一たび希臘人の思想界に必要欠く可からざる要素と成るに至りては、彼れ希臘人が元來哲學的思辨に富める、基督教に奉ぜる人格的天父の觀念は漸く理論的哲學的旨趣を得來り、アテナシウスの三位一體説は、純乎たる哲學思辨の結果を表明し、爾來中世の所謂教父 (Patres ecclesiae) 教士 (Doctors ecclesiae) なる者は、本來猶太思想の非論理的なる宗教思想に、理論一偏の解釋哲學一途の説明を與へんと試みたるを以て、その議論たるや往々形式の末に走りて内容の本を忘れ、言語上の議論に止りて實質の何んを顧みざるに至れり、故に其議論は頗る巧妙なるものあり、その證明や形式論理の法則に照らして嘆

稱す可きもの甚だ多しと雖も、如何んせん其内容上事實の證左に乏しきもの有りて存するを、然れば中世のスコラ哲學が煩瑣的の一方にのみ偏せる、到底吾人々性の宗教的意識を満足するに足る充分なるもの無かりしを以て、一方には理論的形式的に走れるスコッス、エリゲナ、アンセルムス、アレキサンダー、オプ、ヘールスト、トーマス、アクイナス等の煩瑣哲學の行はるゝと共に、他方にはベルナルズ、フーゴ、リカルズ、ボナエンツィラ、ライムンズ、ル、ス、エックハルトの如き宗教の情的側面に重きを置ける神秘論者を輩出するに至り、吾人々類は唯理的の神學のみを以て満足するを得ず、直ちに吾人感情の靈火に訴へて宗教的意識を満足せしめんと企つるに至れり、實に中世紀に於ける神秘論者は煩瑣的理論哲學の學壘を陥落するに與りて力ある所のもの、是れ明かに彼の智性一方に偏せる煩瑣學者の宗教が何かに吾人の宗教的意識を満足するに足らざりしかを證明して餘りあるものとす。降りて近世に至るに及びても、中世紀基督教の教權は千有餘年の久しき人心に浸染しをりて、その勢力や頗る強大牢として、援く可からざるものあり、獨のデーカールト英のベーコン出づるに及びて、一は唯理

論 (Rationalismus) を以てし、一は經驗論 (Empirismus) を以てして、大に自由討究の精神を鼓吹したりと雖も、時運の未だ會せざる、デューカルトの一切を懷疑せしにも拘はらず、神なる觀念は何人も先天的に有する至明なる觀念なりと獨斷的に神の存在を假定して、基督教に教ふる神そのものゝ存在には全然疑を挿まざりし、然れど智識と信仰との衝突は中世紀以來學者の頭腦を悩ましめたる問題にして、糾紛錯綜容易く解く可くも非ず、スピノーツは智性の側より宗教を觀察して感情意志の方面を忽にせしより、氏の宗教は自己の哲學としての抽象的一元論の弊竇に陥るり、歴史的に存在せる宗教の旨趣を明かにする能はざりし。ライプニッツはホスピノーツの說に一步を進めて神の秘的愛を許すと同時に、又宗教を智性の一方より觀察して、成立宗教は吾人の理性とは決して相乖離悞背す可きものに非る所以を主張し、信仰と理性との調和 (Die Uebereinstimmung von Glauben und Vernunft.) なる一書を著はして、寺院の信仰と吾人と理性とは全然相容る可きものなるを論じ、宗教に理性を拒絶するが如きは寧ろ狂なりと説き、若し宗教にして全然吾人の智性上にその基礎を有せずとせば、若し人あり我

れは基督教に代ふるに婆羅門教を以てし、聖書を捨て、訶蘭を取らんと主張するあるも、基督教徒は何の辭以てその謬まれる所以を訂だし、彼れの惑を解くを得んやと絶叫せり。ナルフ亦ライプニッツに繼いでその哲學体系を大成し、煩瑣哲學を再興して形式的理論的に宗教の對象を取扱ひ、デューカルト以來の唯理論を大成して、吾人の宗教的意識を理論一偏無味乾燥の虚形中に化石し去れり。此に於てか斯かる理論的形式の末に奔れる宗教思想に對して、吾人の智性の頼むに足らざるを主張せるペールの懷疑的盲從的宗教妄信説起、これに對するライプニッツの一層極端なる理性偏重説となり、氏は理性と天啓とは到底調和し得可き性質のものに非ずして、互に矛盾す可き性質を有するものなり、去り乍ら此に至れば吾人はペールの云へるが如く天啓に盲從妄信す可きものに非ずして、一に理性の命ずる所に由りて宗教を取捨す可きなり、否な吾人理性の教ふる所は則ち真正なる宗教なるものなりと説き、極端なる偏智主義を主張するに至れり。

然るに今眼を轉じて歐洲大陸と一帯帶水を隔ちたる英國に於ける思想界の光

景を觀察するに、當時英の宗教思想は英國自然神教學派 (English deism) と稱する一派の思想家に由りて代表せられたり、彼等は所謂自由思想家 (Free thinker) なる者、人間理性の指導に由りて一意宗教の解釋を試みんと擬するものなり、彼等は基督教の教理を感情の分子を容れず、意志の作用を顧みず、歴史的發達の痕を釋ぬるを須るずして、一向自己の理性に照らして解釋し、自己の理性が認めて以て眞理なりと許容する所のものは之れを信じ、自己の理性が認めて以て非眞理なりとする所のものは一切之れを拒否するものなり、斯かる立脚地よりして、ロ、ン氏は基督教信仰の有理を論ず (Reasonableness of Christianity) して、書を著して、先づ基督教々理の吾人の理性上信ず可き理由あるを辯護し、ヘーコンの經驗主義を繼いで、氏の感覺的經驗論より神の存在を證明せり。ジョン、トランド氏亦非神秘的基督教 (Christianity not mysterious) なる一書を著して、基督教は吾人の理性に背反する超自然的宗教に非ずして、理性的自然的宗教なる所以を稱道せり。その他シャフツベリー、トーマス、チャップ、コリンズ等の如き皆吾人々類の理性一方より宗教を解釋せんと擬せし所の者、然れど英國自然神教學派は斯く吾

人の智性一方に重きを置きて宗教を解釋せんと企てしと雖も、到底斯る見地を以てしては、智識と信仰とを調和して智情意を有する吾人々類の精神全軀を満足さするとを得ず、左枝右梧十八世紀英國の信念界は上下前後に振撼動搖を來たし、未だ容易にその平衡を得ざるものあり、且つ彼れ自由神教學派の學者は、デ、イカルトが冒頭第一に、何人も神の觀念を有んをるとは明瞭判然なる事實なりと、獨斷的に許容したると同く、彼れ英國自然神教學派は基督教に説ける神の存在靈魂の不滅意志の自由の三命題は全然疑ふ可からざる自明的公理なるが如くに當初より假定しをりしものなり、然れど神の存在や靈魂の不滅や意志の自由や、彼れ自然神教學派の思惟せるが如く、更らに證明を要せざる、幾何學に於ける公理の如く、論理學に所謂思考の三法則の如く、自明的原理なるものなる乎、彼等或は千有餘年間基督教々理に由りて齟染せられをりしを以て、斯かる問題は自明的原理の如く思惟しをりしものならんと雖も、神の存在や靈魂の不滅や意志の自由や、實際彼等の思惟せるが如く、自明的原理なるに非るなり。深刻犀利なるフームの眼光は早く既に此點に向ひ集注し行けり、氏は宗教史家の所

謂自然神教學派と稱せらるゝものゝ中に在りて、早く既に斯かる立脚地よりして、從來の自然神教學者の一般に認めて以て自明的公理と爲せる、以上の諸問題に向ひて批評的論究の吟味を企つるに至りしとは、恰も獨逸に於てカントがライプニッツ、チルプの唯理的神學 (Theologia rationalis) や唯理的心理學 (Psychologia rationalis) や唯理的宇宙論 (Cosmologia rationalis) の理論上到底證明し得可からざる所以を喝破したるが如きなり、フームは宗教を以て吾人の理性上確固不拔の基礎は到底之を得可からざるものとなし、全然之れを公言し去るに至れり、然れどカントは宗教に對する從來の吾人の純乎たる智性一方に偏せる見解が、到底宗教の健全なる説明に非るを領得して、更に宗教の新立脚地を吾人の意志の側面たる道德の上に置き、以て宗教を擁護したりと雖も、フームに在りては唯懷疑的に從來宗教の據りて立てる立脚地を破壊せしに止りて、何等の新基礎をも宗教に與ふると無く、宗教を以て却りて吾人の利己的私情より起る、寧ろ病的現象なりと論斷するに至れり。之れを要す英國に在りては自然神教學派の宗教を觀察するに、之等の學者は皆吾人智性の一方に僻したると、獨逸に在りてはテ

カルト以來の唯理論が漸々其極端に迄到達して、宗教を説明するに同く、吾人の智性的側面をのみ偏重するに至りたるとの結果は、到底吾人全精神の需要を満足せしむると能はずして、十八世紀の理性宗教は、共にフーム、カント等の疑懐論的批評的鐵槌一環の下に脆ろくも破碎し了らるゝに至れり。爾來神學者は宗教を到底吾人の智性的方面より辯護するの不可能なるを斷念し、寧ろ斯くの如きは哲學の爲めに、時々宗教的信念の動搖を來たし、宗教そのもの爲めに不利益なるを悟り、彼等は左顧右眎何等か他に宗教を辯護する安全なる新基礎を得んと、存りに熱望期待しつゝあるに至れり。

第五節 宗教は意志に在りて存するか

宗教が吾人の智性にのみ由りて辯護せんとするも、その辯護や不充分にして徒らに論理の形式にのみ走りて其内容を忘れ、其極宗教は吾人々心の正態に非ずして、その病的症狀なりとの結論を惹起し、宗教そのものに確固たる基礎を與へんと欲して、その結果宗教をして却て顛覆の危禍を買はしむるに至れり。此に於てカントは其著純粹理性批判 (Kritik der reinen Vernunft) に於て純粹理性即

ち吾人の智性上に宗教の成立し得可らざる所以を道破すると同時に、實際理性即意志の側より、氏が嚮者既に峻刻鋭犀なる論鋒を以て、その証明を破砕し去りたる宗教上の諸問題をして、再び蘇生復活し來らしむるに至たり、換言すれば、カントは吾人の智性上到底論證し得可からざる宗教上の問題たる、神の存在や靈魂の不滅意志の自由等を、吾人々類の道德實行の意志的方面より觀察して、神の存在や靈魂の不滅等は、吾人道德上の公準 (Moralische Postulate) なりとして、之れが確實なる所以を認察するに至れり。即ちカントはナルフ等の唱導せる神の存在に關する實証論上の證明 (Ologischer Beweis) 宇宙論上の證明 (Kosmologischer Beweis) 目的論上の證明 (Teleologischer oder physisch-theologischer Beweis) を擧げ、之れに更ふるに倫理道德上の公準として、吾人が神の存在を信憑す可き、氏が獨創の道德上の證明 (Moralischer oder ethisch-theologischer Beweis) なるものを以てせり。又氏は英國自然神教學派が靈魂の不滅を、冒頭より寸毫も疑を容るゝ餘地無き、自明の公理なるが如くに假定しをりし見解に反對して、徳と幸福との終極の一致平準上より靈魂の不滅を論定し來たり、之れを要するにカントに在りては

宗教は即ち道德たるに外かならず、故に氏は氏の宗教を論ぜし所の一書 (Religion innerhalb der Grenzen der blossen Vernunft, Paed. U. B. St. 164.) に於て宗教を定義して、宗教は吾人の一切の本務を神命として認識するを謂ふと説けり、即ちカントに依れば、其無上命令 (Kategorischer Imperativ) なるものは即ち良心の聲にして、其道德實行を促がす所のものは實際理性の命令なり、善意識の活動なり、吾人々類に向ひて道德倫理の實行を洵まれる道德的意志の發現なり、今カントは此道德的意志の上に宗教の逃匿所を設けんとせり、然ればカントに由りて宗教は道德上に新基礎を得て、最早や哲學の理論に由りて震撼動搖せらるゝと無く、安全なる立脚地を得たるものの如く、一時僧侶神學者をして愁眉を開かしめしものありしと雖も、宗教はカントの思惟する如く果して吾人の意志的道德方面にしみ樹立せられ得可ものなるか、氏は氏の道德論上の證明によりて神の存在を認定し來たりしが、氏の意に惟へらく、徳と幸福とは現在に於ては到底完全なる終極の一致平準を得可からず、故に來世永遠の後に於て初めて其平準を期す可きなり、故に吾人の靈魂は亦現世のみならず、來世に至る迄永遠に存続するものなりと

考定せざる可からず、而て又徳と幸福とをして終極の一致平準を得せしむるには、此兩者をして然か有らしむる所の主宰者無かる可らず、斯かる主宰者は即ち神なりと、然れど氏は一切の幸福を倫理道德の上より排斥して、幸福の思想の加入したる倫理道德は真正なる道德的行爲たるの資格無きもの、真正なる道德的行爲は無上命令の聲に應じて道德律の崇敬 (Achtung des Moralgesetzes) に起因せざる可からずと論ぜるにも關はらず、宗教上神の存在や靈魂の不滅を論明せんとするに當りては、忽ち前説を一變して幸福なる思想を其倫理道德の上に引入し來り、彼れに於て排斥する所を其儘之れに於て借用するが如きは、大なる自家撞着と謂はざる可からず、嘗に自家撞着たるのみならず、斯くの如くせばカントの所謂道德説は忽ち本來の特色を豹變して、幸福主義の道德と化し、其嚴肅主義は快樂説と化し去らざる可からず、果たして然からば斯かる道德は最早や人生の第一義たる能はざるものとなり、是れ全然カント自家の眞意を去る天淵管ならざるに終はらずんば非ず、矧んや現今に至るに及びては、偏狹固陋憐む可き神學者の一派、若くは此輩反抗の蛙鳴蟬噪を畏怖して、強いて自家の所信を枉げ、以

て流俗に媚びんとするの俗學者輩を除くの外は、何人も彼個体的人格的靈魂の死後存續を信ずれ者有らざる可し、果して然らばカントの道德上より靈魂不滅を辯護せんとする學説は到底成立し得可からざるものなり、又その徳と幸福とを一致平準せしめんが爲めにその主宰者を想定し、之れを神と命けたるが如きも畢竟充分なる論據に立てるの學説なりと謂ふ可からず、縱令カントの思惟せるが如く未來永遠の後に於て、結局徳と幸福とは一致平準を得可きものなりとするも、そは何が故に之れをして一致平準せしむ可き主宰者を要す可きか、寧ろ斯かる主宰者に更ふるに徳と幸福との一致平準を因果理法の觀念を以てするも又差支へ無きに非ずや、果して斯かる主宰者たる神に更ふるに因果理法の觀念を以てするを得るものとせば、吾人何ぞ人格的主宰者たる神を想定するの要あらんや、矧んやカントの謂へるが如き吾人の徳と幸福との一致平準を得しむるを主眼として想定したる神の如きは、畢竟彼の目的論上の證明に由りて設定せられたる神に等しく、無上の實在者たるに非ずして一個の園丁的神格たるに過ぎざるに至らん。故に基督教に所謂神の存在を論證せんが爲めに、道德上の

二五四

證明を用うるが如きは、結局論理上に所謂不法結論の虚偽 (Ignoratio elenchii) の過謬に陥るものと謂はざる可からざるなり、是れ豈に彼の靈魂の不滅と神の存在の如きは、之れを倫理道德の上より吾人の意志的方面に於て論定せんとするも、到底不可能なる所以を反證して餘りあるものたらざらんや、是れ特にタ イェーミラー氏がその著宗教哲學に於いてカントを評して、カントはその右眼を以てしては實際的に一切の事物を公準し、確かに之れを認めざるにも拘はらず、理論的にその左眼を以てしては此等一切の事物を見るを得ざるは抑、何事ぞや (Dass er mit dem rechten Auge praktisch postulierend all die Gegenstände erblickt, die er angeblich mit dem linken Auge theoretisch nicht sehen kann. Feichmiller. Religionsphilosophie. St. XII.) と謂へるが如く、カントは同一の全人性を截然兩分して、理論的と實際的とに別ち、現象上の人と本身上の人との兩者を岐ちて、此兩部は互に相容る可からざる相反的範圍なるが如く、少くとも二個別々なる何等の交渉無き精神内の異邦土の如くに考へざるが如きは、實に氏の至大なる謬見にして、人性が本來有機的統一の全體を形成せるものにして、吾人の精神作用は之れを學

問研究上の便宜より假りに分ちて智情意の三部となして、其各部門に就いて考察研究すると有り、雖も斯くの如きは畢竟彼の物の左右を分ち、色の黑白を別つが如く截然たる區別あるものに非ずして、吾人精神の自家本來の特色は到底斯かる機械的説明を以て解釋し盡くし得可きに非ざるの理を看過したるの僻見に基いせるものとす、果して然らばカントが斯かる根本的心理學上の誤謬よりして、吾人の精神を純粹理性と實際理性との兩者に峻別し、其一方に於て否定せるものを他方に於て肯定し、單に宗教を以て實際理性の基礎に置きて成立宗教の避難所に當てんとし、而て結局其企圖の失敗に歸して了はるに至り、氏の宗教は吾人の本務を神命として認識するに在りと謂へる、其宗教の對象たる神の存在は、氏の道徳論上の證明を以てするも到底了知し得可からざるものとなり、氏の宗教もその基礎や畢竟不確實にして所謂空中の樓閣沙上の輪奐たるに過ぎざるの觀ありとす、然ればカントの倫理道德を主眼として吾人の意志的方面より宗教を觀察し、宗教の要素を意志の一作用に需めたるが如きは、尙未充分宗教なるものを解釋し得るの仕格無き學說と謂はざる可からざるなり。

フ、ヒテに至りてはカントの哲學思想を繼いで起これるもの、而かも宗教を以て
 道德と一に歸せしめんとするの傾向は、氏が哲學の初期を代表しをるものなり、
 即ち氏は道德的世界の秩序(Moralische Weltordnung)を以て直ちに之れを神とな
 し、世界に於ける整然たる道德的秩序の外には一も神なる實在有ると無しと説
 けり、故に氏の言に曰く、道德と宗教とは絶對的に同一なるものなり(Moralität und
 Religion sind absolut Eins. Pfeiderer: Geschichte der Religionsphilosophie: Bd. I. St. 274.)
 と。斯かる見解よりして氏は氏の學説を目して無神論なりと難ぜる輩に向ひ
 て、彼等反對論者の所謂神なるものは世の賞罰殃慶を掌どり、吾人の吉凶禍福を
 左右する所の人格的實在なるを以て真正なる神たるを得ざるもの、そは畢竟一
 種の偶像たるに過ぎざるものなり、然れば反對論者は余を以て無神論を主張せ
 る者となすと雖も、那ぞ知らん彼等こそ真正に神を信する者に非ざるを以て、却
 りて無神論者たる者ならんとは、大聲疾呼して大に敵論者の蒙を啓けり、然れ
 ばフ、ヒテはその哲學思想の初期に於ては、世界に於ける道德的秩序たる理法定
 律を以て直ちに之れを神なりと主張し、他に何等の人格的實在の神をも想定せ

ざりし所は、明かにカントに一步を進めたるものなりと雖も、嚮者にカントが道
 徳を以て宗教全躰なりと見做すに至りたるの誤謬は、氏に至りて愈、其明晰を致
 すに至れり。ローテも亦此思想の趨向を受け、之れにヘーゲル哲學の旨趣を加
 味して論じて曰く、彼の造物主なる神の目的は一に物質の靈化に在りて存する
 ものなるが、そは又被造物たる吾人々類の道德的行動云爲たるものなり、故に人
 類の道德的行動は即ち是れ神の目的行動の繼續たるに外ならず、然れば吾人の
 道德的行動は直ちに又宗教的行動と爲り得る所のものとす、故に宗教の現實は
 道德の現實に於て存するものと謂はざる可からずと。故にローテの説に従へ
 ば全然道德を缺ける宗教上の敬虔とは何等の内容をも有せざる非現實の宗教
 心に過ぎざるものとす。カリエル氏亦、世界史の吾人に教ふる所を以てすれば
 宗教の核實は一に道德的秩序の信仰に於て存すと説けり。その他フランシフ
 ロシヤム、諸氏の如き亦た基督教の眞髓は道德にありて存するものなりと爲
 し、將來真正の宗教となる可き、基督の基督教は道德的行動の外に存す可きもの
 に非るを稱道して、宗教と道德とを一視するに至れり。然れど宗教を以て全然

二五八

道德なりと説き去るが如きは、既にカントの宗教説が極はめて矛盾撞着の多きが如く、到底完全なる説明法に非ず、人或はカントが宗教を道德と同一視する見解に誤謬多きは、一に氏が認識論的立脚地と心理學的研究との不健全なるが致す所にして、他に何等か健全なる認識論的立脚地を以てすれば、縱令宗教と道德とを同一視するも矛盾無き完全なる説明法を得可しと説くものある可しと雖も、是れ決して然らず、余を以て是れを見るに、宗教を以て單に道德と同一視する學者は、輒近西洋哲學思想の潮流が、近世の經驗的科學特に物的科學の進歩と共に頻りに動搖を來たし、一時宗教が四面楚歌孤城落日朝は夕を頼む可からざるの悲運に遭遇せしより、形而上學の學說の動搖に連れて一々宗教信念の變動影響を蒙むるが如きとあらば、そは宗教の神聖を保持せんが爲めに由々しき大事なりと速断し、遂に宗教擁護の避難所を道德界に求むるに至りたると、彼のカント思想の影響が一時全歐を風靡し、ゲーテ・ヒンメルスの哲學者に繼いで、後學或は其認識論の痛快なりしを以て、純粹理性の一面をのみ取りて、その一方を開展發達せしめたるものありしに對して、一方にては又カントが宗教を吾人の

二五九

意志的側面に就いて觀察し、遂に宗教と道德とを合一するに至りし方面を鼓吹して、宗教の此方面の發達を圖かりたる學者輩出したるとの諸種の原因事情よりして、今日宗教を以て吾人の道德と同一視せんとする學者尙少からずと雖も、宗教は單に道德のみに由りて成立し得るものに非ず、縱令吾人の多くの道德的意識は宗教的意識によりて著大なる影響を蒙り、又宗教的意識は吾人の道德理想の爲めに顯著なる感化影響を蒙るものたるや疑ふ可からざる事實なりと雖も、道德即ち宗教たるに非ず、宗教は獨り倫理のみを以て説明し得可からざるの方面を有しをるものなり、宗教は獨り道德實行の意志的方面のみを以て説明し得可からず、必ずや宗教には智的情的の他方面ありて存するものなり、苟も此方面を不問に措くが如きとあらば、完全なる宗教の説明得て期す可からざるなり、何んとなれば人性は是れ智情意全軀の有機的統一より成り、而して健全なる宗教は此智情意全軀の有機的統一の活動に依りて成遂せられたる吾人々類の意識たるに外かならざればなり、故に前に絶大の思想家カントあり、之れに繼ぐに活眼達識なるフヒテ氏の哲學的頭腦を以てして、以て宗教を意志の側面より説

明し去らんとするも、その結果遂に失敗に歸して止み、フヒテの如きはその後期の哲學思想に在りては、著るしくその宗教に對する立脚地を變更して、宗教に智性感情の要素の至切重要缺く可からざる所以を唱道するに至れり、矧んや最近後ヘーゲル學派の群少に於てをや、彼等が宗教と道德とを一に歸し之れに由りて人心の安慰を圖らんと擬せしも、到底満足なる宗教の説明解釋を得る能はずして、忽ち他方に於ては有力なる諸學者の、宗教には意志の外に情的分子の必要なる所以を主唱するあり、則ち既にカントと時代を同うせるヤコビーを初めとして、シライエ、エルマン、ヘル氏よりアルメイト、ランゲ、リッテ、ル等の諸學者是れなり、請ふ吾人は左に之等諸學者の説く所を一瞥せん。

第六節 宗教は感情に在りて存するか

彼の十七八世紀の頃に於て、獨乙に在ては、アールカルト以來の獨斷的唯理論と、英國に在ては、ベークン以來の獨斷的經驗主義とは、共に理論の一方に偏して感情や意志の側面を忘却し、人性を論理的機械視するの弊風ありしに由り、此弊風に反對してカントの批判哲學と相前後して勃興し來たれる思潮を、彼の神韻縹緲

たる信仰哲學 (Glaubensphilosophie) の一派となす。彼等は皆宗教の要素は吾人の感情にありて存する所以を觀破して、宗教は吾人の信仰に基くもの、哲學は吾人の智性に依れるもの、然れば智識と信仰、哲學と宗教とは全然根本的に相異せる所のものなり、故に宗教に教ふる所のものは、一々皆吾人の理性に依りて證明論辨し得可きものに非ず、宗教の信仰は吾人の理性を離れて優にその存在の餘地を有す、然れば吾人の理性に契合せざればとて、直に之れを以て宗教の眞否を推斷せんとするが如きは、吾人未だその可なるを見ず、何んとなれば理性に由りて信仰を忖度せんとするが如きは、寒暖計に由りて物の長短大小を測量せんと企つるもの、如く、此二者は全然その節圍標準を異にせるものなればなり、然るに此重要なる相異差別あるにも拘はらず、此兩者を混同し其一を以て他を律せんと擬する者は、實に唯智性主義を主張する論者の流弊なりと云ふにあり。故に彼徒は曰く、彼の宗教の信仰なるものが、吾人智識の計度に齟齬する所あるも、吾人何ぞ之れを愛ふるを須るんや、此兩者は本來斯くあらざる可からざるものなればなり、果して然らば宗教は哲學の理論のみを以て全然律し能はざ

二六二

るは固より其所にして、宗教が哲學の理論を以て律し能はざるは偶、以て宗教の真正なる所以を反證するものに非ずして何ぞやと。此の見解や主としてハーマン、ヤコビー等の主張せる所のものなり、ハーダー、レッシング等に至りては進化の理法に照らして歴史的事實を觀察するの端緒を開始するに至りしを以て、各國民に於ける宗教思想の發達を追蹤するの創見は頗る優俊卓抜なるものありと雖も、宗教を以て單に吾人の感情上のものと爲し、理論に由りて論明す可きものに非ず、宗教は天啓的に吾人の意識に直覺す可きものと倣すや、前諸氏と異なる所無きものなり、故にハーダー氏の言に曰く宗教は文字言論の證明を要せず、愍いなる教理の説明は宗教を葬り去るの墳墓なり (Willkürliche Lehrmeinungen, welche mit Religion als einer Sache des Gemüths sind das Grab der Religion.) と。ケーテ、又智識と信仰とを論じて吾人の智識を以て了知し能はざる所のものは、信仰心を以て之を信知す可しとなし、智識以上の冠位を吾人の感情上に於ける信仰に附與して、有名なるフュウストの口を藉りて宗教の畢竟純粹なる吾人の感情全部なる所以を説けり、曰く嗚呼この万有をその中に總べ、宇宙を其手に理さむる

所のもの、彼れは余汝及び彼れ自らをもその中に總べ、その手の下に攝理せざる乎、人は假りに之れを呼びて、福祉と謂ひ、心情と稱し、愛と命じ、又神と名く、我れ名字の以て呼ぶ可きを知らず、一切是れ情、情是れ一切、その名の如き畢竟空蟬の如く、又淨雲の如きなり (Der Allumfasser der Allerhalter, fasst und erhärt er nicht dich, mich, sich selbst?..... Nenn's Glück, Herz, Liebe, Gott: Ich habe keinen Namen dafür! Gefühl ist alles, Name ist Schall und Rauch.) と。斯くの如くヤコビー以來唯理論と相對峙して發達開展し來たれる宗教を吾人の感情より説明し、宗教の要因は一に吾人の感情に在りて存すと爲せるの説は、有名なる神學者、シュライエルマッヘル氏に至りて全く大成せられたり。氏惟へらく宗教は吾人の智性にも非ず、意志にも非ず、從て哲學にも非ず、道德にも非ず、又此兩者の混交にも非ずして、全然吾人の感情に在て存するものなり、宗教の敬虔は知ることにも非ず、行ふことにも非ずして吾人の直接に意識する所のもの、即ち感情の規定に在りて存するものとす、尙他語以て之れを云へば、宗教は吾人有限が無限に對して之れを味ふの感なり、宗教は彼れの我れを規定するも、我れの彼れを規定する能はざる對象に

向て吾人の絶對的に憑依皈托するの感情に在りて存するものなり、宗教は有限が無限中に存在し、一時的なるものが恒久中に存在するを直接に意識するに在りて存す (Religion ist weder Metaphysik noch Moral, noch eine Mischung beider; Die Trümmigkeit ist weder ein Wissen noch ein Thun, sondern ein Bestimmtheit des Gefühls oder des unmittelbaren Selbstbewusstseins. Wahre Religion ist Sinn und Geschmack für das Uendliche, sie ist das Gefühl schlechthiniger Abhängigkeit. Sie ist das unmittelbare Bewusstsein vom allgemeinen Sein alles Endlichen im Uendlichen und alles Zeitlichen im Ewigen. Schleiermacher: Der Christliche Glaube und neber die Religion.) 斯くの如くシュライマール氏は宗教を以て主として、吾人の感情上に在りと爲し、大に宗教の哲學道德と異なる所以を明かにせんと努めたり、故に氏は宗教の智識に非る所以を説明して、宗教は智識に非ず、何んとなれば智識の尺度は敬虔の尺度に非ずと道破すると同時に、宗教の道德に非る所以を説きて、道德上の行爲は自由の意識を伴ふと雖も、敬虔は斯かる能動的自由を要せざるものにして全然受動的憑依に在りて存すと公言せり、斯くの如くシュライマール氏は感情を以

て宗教の重大なる要素と見做し、宗教を吾人の感情の側より説明して、宗教をして哲學又は倫理學の學說の動搖より離れて、一種獨特の感情上に之れを置き、以てその安全なる地位を保たしめんと圖かれり。
シュライマール氏が宗教に感情上の逃匿所を與へたるは、實に爾來神學者輩の宗教辯護の有力なる武器となりて、氏の學風を續いで起これる神學者哲學者等の一派は、宗教は一に吾人の感情に訴へて直覺するものにして、その本來の眞面目を云へば、シュライマール氏の云へるが如く絶對恒久の本體に熔融冥合する直覺的感情に在りて存するものとす、故に智性を主とせる彼の哲學者の攻撃や倫理學者の批難は我等宗教家に在りては何にかあらん、何んとなれば信仰の尺度と智識の繩墨とは根本的に相異せるものなればなり、是れ今日世間には聖書の本文批評や科學哲學の研究は駁々として其歩を進め來り、從來神聖視せられたる聖書も、神子として尊崇せられし耶蘇基督も次第に人間的に觀察せられ、アイヒホルン氏が聖書を目して、聖書も亦人間的に讀まれ人間的に吟味さるゝを欲するならん (Bibel volle menschlich gelesen, und menschlich geprüft sein) と謂ふる

二六六

が如く、十九世紀の末葉に當りて彼れ神學者僧侶等の宗教的感情に富む者は、學術の研究上より從來の宗教神聖主義の到底維持せらる可からざるものたるを知るも、而かも從來の感情上一切是等の宗教的口碑傳説を見捨てんとするの勇氣を缺ける輩に在りては、頗る恰好なる説明にして、媒介神學 (Vermittlungstheologie) の旺んなる蓋し今日より太甚しきはあらざる可し、是れ今日歐米諸國に在りて、舊信仰を辯護せんが爲めに、宗教と哲學、信仰と智識とを峻別して、宗教は感情に基き哲學は智性に依る、然れば智性上に成れる哲學を以て之れと全然類を異にせる感情上に基いせる宗教の價值眞偽を論評上下せんとするが如きは抑、誤まれるの甚しきものにして、智性の批評は宗教の關與する所に非ずと説き、智性以外に宗教を超然卓立せしめんと企つる所の見解を持せる學者の尙ほ多き所以なりとす、輒近に於ける此輩の代表者と見る可きものはランゲ、ヒールソン、リッテナル、ヘルマン、カフタン、ゼーレン、キートルケガード、ニールセン、パウルセンの如き是れなり。則ちアルバート、ランゲはフイエルベッハ等と同しく宗教の基礎を吾人の感情上に置き、宗教は到底理論を以て説明し得可からざるものにして、

二七七

全然主觀的なる吾人の精神状態に屬するものなり、然れば宗教に教ふる所が寸毫も客觀的効驗性を有しをらざるとは、彼の詩歌が詩人の想像に由りて構成せられたる詩人腦裏の産物なるが如きなり、換言すれば宗教は單に吾人の主觀的感情の産物たるに外かならざれば、客觀的には何等の効驗性をも有せざるものなりと説き、リッテナル、ヘルマン等此の説を受けて宗教を以て吾人の智性には何等の關係をも有せざるものと爲し、宗教を以て詩的空想と同一視し。ヒールソン氏は又宗教を以て哲學にも非ず道德にも非ずして天啓に出づると説き、キールケガード氏亦宗教の單に吾人の感情上にのみ成立するものたるを主張し、従て宗教は單に吾人の或智識と矛盾撞着するものたるのみならず、又一切の智識と矛盾撞着す可き所のものなり、宗教は一切の合理的意識を拒否せるものなりと絶叫せり。此に於てか吾人は千七百年の昔時に於けるテルツリアヌスの所謂、不合理なるが故に余は信ず不可能なるが故に確實なり (Credo, quia absurdum; certum, quia impossibile) との妄論を想起せずんば非ず、然れどブライデラーも云へるが如く、宗教を感情の一方より考察して全然智性の要素を排拒するの所

論を齊合的に演繹し去れば勢ひ斯かる結論に到着するは自然の結果たるものにして、吾人は寧ろキールケガードの結論の眞に論理的齊合たるを認容せずんばあらざるなり。唯吾人が前諸氏と其見解を同うする能はざる所のものは、斯く宗教を全然吾人の感情上にのみ説定するは、果して健全なる學説なるや否やとの點に在りて存す、若し苟も宗教にして其基礎を單に吾人の感情にのみ有するものならざらんか、前諸氏の如く宗教を吾人の感情一方より説明し去らんとするの偏頗なる鑿見たるを知らざる可からず、吾人の精神は感情の外に智性意志の二方面を併せ有するを以て、苟も健全なる宗教觀たる以上は吾人の感情を忽諸に附せざると同時に、吾人の智性意志をも併せ満足せしめ得可きものたらざる可からざるなり、故にシュライエルマッヘルは宗教を絶對的憑依の情に在りと爲すにも關はらず、氏自らも暗に吾人の智性意志の要素をも宗教に認容しつゝ、あるを見るものなり、然れば氏は宗教に感情的要素の頗る重要至切なるを説くも、智性意志を全然宗教に拒絶するときは、その宗教觀や偏頗なる僻見に陥らざる可からざるを以て、氏の宗教觀は感情を表面として之れを補ふに暗に智性

意志の要素を以てし、氏自らも宗教の吾人精神の全作用なる所以を不知不識の間に黙認しをるものゝ如し、故に氏は斯かる精神の状態を云ひ表はさんが爲めに宗教的心調 (Religiöse Stimmung) とか宇宙の直觀 (Anschauung des Universums) の如き語を以てしたり、是れ實にシュライエルマッヘル氏の識見超邁なる所以にして、其媒介神學は感情の一方にのみ宗教を説定するの至便なるものあるにも關はらず、健全なる宗教觀は吾人智情意の全作用の上に樹立せられざる可からざる所以を觀破せしに職由せるものなり、然るにランゲリッテル、キールケガード等の諸氏に至りては宗教辯護の一方をのみ是れ睨め、遂に宗教を以て詩人の空想と同一視し、宗教は單に主觀的價値を有するの外、何等の客觀的効驗性無きものと斷じ、遂に中世紀に於ける不可思議論者たるテルツリアヌスの過ちを十九世紀の今日に再びするに至れり、彼等は宗教を哲學科學の攻撃より安全ならしめんと欲して、却て宗教をして一種空虚なる主觀的想像と化し、宗教に其成立の基礎を與へんと欲して、却てその覆滅の禍を速かならしむるに至れり、然れば宗教を以て單に吾人の感情一方より成立せるものなりとの所論は、宗教を以て單に吾

人の智性又は意志の一方面にのみ成立せしめんとしたる所論と同一くその議論の一方に偏せるものたるや明かなり蓋し健全なる宗教は吾人完全の神の平衡上に成る所の吾人の智情意全作用の上に構成せられたるものならざる可からず何んぞなれば吾人の精神は曾てカントの感懐したるが如き一つ一つに個々別立のものに非ずして有機的統統を成せるものなればなり果して然らば宗教を以て單に吾人の智情意三作用中其一若くは二作用の上に構成せんとするは到底圓滿なる宗教の解釋に非るを知る可きなり。然るに現今我國に於ける基督教社會の一派の有力なる人士間には旺んに彼の感情一方の極端に走れるリッテル主義の宗教説を採用して之を金科玉條の如く尊崇し之れに由りて科學哲學の批評に當り基督教の命脈を維持する唯一武器なるが如く思惟せらるる者あるは吾人の實に怪訝否な寧ろ慙笑に勝へざるの現象なりとす勿論歐と云はず米と云はず日東の孤島に至るまで十九世紀文明の潮流は洶湧として衝進し來り科學的批評の呼聲は次第にその調子を高めつゝあるの今日に於ては舊信仰既に亡びて新信仰未だ健全なる樹立を見るに至らず學教の衝突信念界動

搖の危期は今日より太甚しきは無し斯かる智識上の過渡期に際し苟も躬自ら宗教家の位置に在りて基督の福音を一切衆生に弘布宣流せんとするの天職を有し昨日迄斯教の神聖を夢みをりし人々に在りては彼等が斯く迄神聖なりと確信しをりし宗教が一朝科學的精神の無遠慮なる研究的批判に遭遇してその不神聖にして極めて誤謬多き所以を滿天下に露白せらるゝや衷心竊かに忍び難きものあり彼等に實に是等科學的批評は其結果や眞に公明正大寸毫の私心ありて存するに非るとを其實深く敬服しをると雖も而も尙彼等の尙古的愛舊の感情は全然是等陳腐の舊説を捨て去るの勇氣を障ふるものあり此精神や化して一種の媒介的神學を醸生し來たりたるものなり然れば今日に在りてはリッテル一派の神學學風が這般人士の間に歡迎せらるゝは敢て怪しむに足らざるものなりと雖も是れ實に基督教と科學との争鬭を鎮壓せんとする一時間に合はせの姑息手段たるに過ぎずして決して基督教其ものゝ爲めに慶す可き事に非ず何んぞなれば吾人々心は一時宗教の科學哲學より蒙むれる難詰批評を避けんが爲めに斯かる感情一方に偏せる學説を歡迎するの傾向無きに非ずと

雖も畢竟是れ一時の窮策たるに過ぎざるもの、吾人々心は必ずや早晚他に何等か一層健全なる宗教觀を求め去らんとするに至るものなればなり、若し夫れ和蘭の碩學キールケガードの既に實際齊合的に演繹し去りたるが如く、リッテルの宗教說を其極點に迄推論するとき、テルツリアヌスの一切排智性主義に到達するか、然らずんばリッテル學風の始祖たるランゲの唯物論に陥る、其極宗教そのものをして覆亡殄滅せしむるに了はらずんば止まざるなり、危険も亦甚しからずや、若し果して斯くの如くんば斯かる神學々風は基督教其ものを殘害する獅子身中の毒虫なりと謂はざる可からず。又之れを中世紀神學の覆滅に徴するも自から明かなりとす、即ち中世にありては彼の煩瑣哲學者に由りて主張せられたる神學の一敗地に塗みるゝに至りしは、主として彼のオッカム氏の唯名論や、ローシャ、ベーコン等の實驗的科學主義の旺盛するに至りしに由ると雖も、彼の神秘論者の一派が宗教を哲學科學の攻撃より救はんが爲めに、こを感情一方の上に説定し、その極神學の覆滅を招ねき、宗教そのものも之れを他人に説明教示するを得ざる、單に一種の神秘的感情を有する二三人士の玩弄物に過

ざるものと化し一切衆生を對機とせんとする彼等宗教家の眼日本旨と相距る遠きに了はらしむるに至れり、然れば何かなる點より觀察するも到底宗教を以て吾人の感情一方に説定せんとするが如きリッテル派の學風は到底之れを健全なる所論と見做す能はざるものなり、故に有名なる神學者ユリウス・ミューラー氏曰く人性が智識より受けたる創傷は特り智識のみ能く之を癒治し得可し (Wounds which have been inflicted on humanity by knowledge, can be healed only by knowledge.) と故に吾人の我國に於けるリッテル氏の學風を崇拜し、之に心酔しをれる基督教一派の人士に向ひて、彼等が基督教そのものゝ爲めに斯かる立脚地を全然見捨て去るの便益なるを忠告する所以なり。然るに之れと同時に尙一層吾人の感笑に勝へざるものは、現今我國に於ける基督教一派の人士間に、彼の宗教は吾人の感情に在りて存し、智性に由るものに非ず、智性と感情とは全然別物なるを以て、宗教は智性の計度に由りて輕重軒輊せらる可きものに非ずとの所論が、外觀甚だ宗教の辯護に都合好きを見て、這般一切排智性主義の基督教徒の口吻を眞爲して佛教と科學哲學との衝突を避けんと努むる一派の論者は、是れなり、彼れ佛

二七四

教家は現今我國に行はるゝ一切排智性主義の基督教徒が主張する宗教感情説は、その本源を探ぐればリッテールの學説に基いし、而かもそれはランゲの唯物主義に出づるものなれば、彼等の所謂宗教とは全然矛盾しをるものなるを知るや知らずや、一向佛教を以て感情的信仰の一方にのみ歸結し去らんと努むるものなり、彼等は十有餘年の昔時に於て井上圓了博士の佛教活論一たび世に出づるや、その現今の科學哲學の學理に照らして佛教を説明し、以て佛教の最高殊勝なる哲理的宗教なる所以を論明せられ、基督教の學理上信仰す可からざる妄説なるを辨せらるゝや、彼等は歡喜踊躍して隨喜の泣に咽び佛日尙地に落ちずと悦びたるに、未だ幾くならずして佛教が漸く世間の學者間に研究せらるゝこととなり、世間學者の冷靜にして無遠慮なる佛教の長所短所を擧げて科學的批評眼に照らし、その眞否を甄別鑑識するや、佛教と雖も亦必しも長所のみを有するものに非ず、眞理のみを含くめるものに非ず、その長所あると同時に短所をも併はせて之れを具有し、眞理を含くむと同時に非眞理なる部分ありて存す、その擧者きに井上博士に依りて提供鼓吹せられたる所のものゝ如きは、偶々是れ佛

二七五

教の長所とする所、眞理を有するの部分なるのみ、その裏面には又幾多の短所や幾多の非眞理的部分在りて存するものなり、然れば身苟も一宗一派の羈約を受けず、眞理の探求を以て唯一目的とする學者にして、單に佛教の辯護を以てその職とせず、佛教を科學的に研究せんとするの士に在りては、その佛教研究の結果として佛教の長所や短所や眞理や非眞理や一々皆な之れを指點して之れが辨明判釋を試みざるは無し、然れど斯かる研究的學風は佛教の長所を發揮すると同時にその短所をも併はせて之れを表白するに至るものなり、然れば斯かる學風は佛教を以て唯一眞理の宗教なりと爲し、眞宗教は獨り佛教のみ是れあり、他は皆な偽宗教なりと排し去るの精神を以て、佛教を信奉せし從來佛教徒の信念界には實に青天の霹靂、寢耳に水の有様なるを以て、舊佛教徒たるものは斯かる批評的學説の出づるに際しては、倉皇として狼狽措く所を知らず、豈にその法塵の陥落且夕に薄まり來たるの感を懷き、嚴護法城の任は一に此等世間學者の批評的邪網を搦裂するに在りと信じ、一向守舊的辯護にのみ日夜その身心を勞せざらんや、雖然世間學者の普通佛教徒の有するが如き僻性を離れて、眞理是れ期

するの眞摯なる討究は日夜駢々としてその歩を進め、歲月の経過と共に愈々事實の確證は表はれ來り、次第に彼等の所説を是定するに至らんとす。此に於てか彼等學者の佛教を科學的に研究せし結果は彼等が或は眞理なりと斷じ、或は非眞理なりと論じたる所は、確乎動かす可からざる確定説となるに至り、愚夫愚婦は姑く措き、苟も志ある者の彼等奮佛教徒の謂へるが如き妄説迷見は更らにそを一顧する者さへ無きに至り、而て斯かる風潮は今や漸く方々に時代精神の眞髓を形成するに至れり、現今の時代精神や夫れ斯くの如し、嗚呼此に至りて佛教徒中その信念界に豈に多少の動搖無きを得んや、果して佛教徒の信念界にその旗色の動搖を來たすものありとせば、佛教は唯一眞理宗教なりとの觀念は到底維持す可からざるに至る。此に於てか舊來の信仰と智識とは平衡均準を失ひ、舊信仰既に亡びて新信仰は尙未だ其完全なる基礎を得るに至らず、而かも科學的佛教の研究は日に月に益々その歩を進め、法城は落日の悲運を呈出するに至れり。此秋に當りて嬰守持久の法策を講せんとする者は豈に宗教を以て科學に非ず哲學に非ずして、斯かる智性的理論とは全然その類を異にせる感情的信仰な

りと主張せるリッチナル氏一派の宗教説を繼承せる我邦の基督教徒の法策が、佛教徒の藉りて以て佛教辯護の武器に應用し、以てその玉を磨ぐ可き恰好なる他山の石と爲さざらんと欲するも得んや、此に於てか佛教徒は斯かる基督教徒を以て他山の石と仰ぎ、一に其舉措に摸せんとせり、故に此主義を奉ぜる佛教徒中には現今の學識あり泰西の教育に養成せられたるの人物に乏しからざるものゝ如しと雖も、その太甚しきに至りては宗教を單に吾人の感情に在りて存すと爲し、他に何等の智性的要素をも認めざるものなれば、從て佛教僧侶の教育の如きも一向宗乘餘乘を教へ宗教的感情の涵養をのみ是れ努むれば則ち足る。僧侶豈に普通の教育、世界の學術を顧みるを要せんやと主張する者さへ出づるに至れりと云ふ、何んとなれば彼等の立脚地を以てすれば、宗教の生命は畢竟一種の感情たる信仰なるものに在りて存し、此等の感情的信仰には科學哲學の如きは結局何等の關係をも有せざるものなればなり、然れば斯かる立脚地より觀察するときは、僧侶を養成せんとて學林にて普通の學術を教へ、哲學科學の講義を聞かしむるが如きは僧侶たるに於て畢竟何等の效能をも有せざるもの、然れど斯く

の如き見解は吾人を導きて彼のテルツリアヌスの一切排理性的の懷疑論に終はらしめんとする所のものにして、その極佛教自家をも泯滅せざんば止まざるの恐る可き毒刃なりとす、是れ豈に佛教そのものに於ける獅子身中の害虫に非ずして何ぞや、今日實に學識あり文明の教育を受けたる新進の有力なる僧侶間に於て、彼のリッヂェル一輩より得來たれる一派の基督教徒の口吻に擬せんとするが如き風潮あるは、何かに瀕死の舊佛教を辯護せんとすの赤賊より出づればとて、吾人は寧ろ彼等の痴愚なるを懲笑せざんばあらざるなり、嗟彼等は今を去る十有餘年前に當りて、雙手を舉げて井上博士の佛教活論の科學哲學の理論上より佛教の長所を舉げ佛教辯護の勞を執られたるに贊同し、佛教之れに由りて眞に再生するの活論なりと、隨喜の涙に嗚咽せしを忘失したるか、何ぞ夫れ彼等立脚地の豹變するの太甚しきや、然れど吾人は今や彼等佛教徒を譴むるにその變説の太甚しきを以てするものに非ずして、彼等がそを以て佛教辯護の唯一なる完全の手段なりと爲せるの妄を辨じて、彼等の自ら反省せんとを冀ひ、その獨斷の夢より彼等を喚覺醒起せんと欲するなり、洵に彼等が目して以て嚴護法城の武

器と頼める所のものは、其實佛教自家を刺殺するの刀劍なる所以を警戒忠告せんと欲するものなり、吾人は確認す、嚴護法城開闢法門の眞面目は、斯る姑息的一時逃がれの窮手段に出づ可きものに非ず、單に盲從聲動の感情的信仰に由る可きものに非ずして、健全なる智性や健全なる感情や健全なる意志の三作用上に樹立せられたる宗教に於て存すると、斯かる感情一方に僻せる宗教の見解は、彼基督教徒に在りては歴史的に或は猶恕す可きの理有ありて存するものある可しと雖も、文明の學識あり、由來哲學と宗教と同一不離の關係の下に發達進化した來たれる佛教を信奉すと自ら公言しをれる我國現時の佛教徒が、斯かる排智性的基督教徒の口吻を摸するが如き、吾人眞にその意の何たるを解するに苦むものなり、何んとなれば基督教に在りては、輒近基督に復れとの呼聲の漸く高まり來たると共に、二千年以前の基督が猶太の律法的宗教に反對して、神の愛を鼓吹して興これる基督教なれば、そは勢ひ或は感情の側面を過重するが如き趨勢を呈し來たるが如き又強ち尤む可からざるの事情ありて存すと雖も、佛教の開祖たる釋迦に在りては印度特有の一種の認識論的哲學思辨の結果、その宗教を

建設したる所のものなれば、強て力を感情一方の鼓吹に盡くして、興これる宗教に非らざるを以て、その教祖立教の主意より謂ふも、今日文明の智識を有せる佛教徒が、佛教辯護の最要手段として、感情的信仰の一方のみを偏重して、健全なる宗教の吾人の智情意全躰の礎上に樹立せられざる可からざる所以を悟らず、甚しきに至りては、リッテニル、テルツリアヌス等の宗教に對する空想的極端の感情主義を歡迎し、之れを以て佛教辯護の唯一武器なりと信認しをるに至りては、吾人は轉た無縁衆生難濟度の歎無き能はざるなり。

第七節 宗教は吾人の智情意全作用より成るを要す

以上數節に亘りて論明したるが如く、宗教を吾人の智性若くは意志若くは感情の一方にのみ樹立せしめんとするが如きは、到底健全なる立場たるに非ずして、偏頗なる僻説たるを免れざるものなり。試みに思へ、今人性の罪障深重なる、到底神の救済に與づかると能はざるを念ひて、荐りに煩悶懊惱する者に向ひて、天國は近けり、悔いめよ(馬太傳第三章第二節)或は凡て勞かれたる者また重きを負

へる者は我れに來れ我れ汝等を息すません(馬太傳第十一章第廿八節)と教へば、其人は如何に神の恵みの厚きかを燃ゆるが如き感謝の熱情を以て迎へざらん。若し人臨終今はの夕に當り、獨り自ら過去の行爲を顧みて、悔懼交々するの時、西岸上有人、喚言汝一心正念直來、我能護汝(七祖聖經中觀經散善義)との佛陀大悲の誓願を宣説し、一向專修の他力廻向を誨えば、誰れか眼前に西方十萬億里の淨土の莊嚴を想見し、彌陀招喚の救命に渴仰し、信心歸命の熱涙に咽ばざらん。斯くの如きは是れ皆な感情的方面より宗教を説明せんとする者の認めて以て切要なりと爲せる所のもの、然れども人一人たび平靜無事快濶恬澹の生涯を送りつゝあるの日に當りて、冷かに未來天國樂土の有無や、吾人に斯かる恵みを賜ふ所の天父の實在を考想するときは、幾百の疑團は油然として雲の如く蜂起し紛然として蟬集し來たるものあらん、此に於てか切角點じ得たる信仰の情火も、思辨的智性の水に燼滅せられんとするに至る、是れ智識の根底無くして、單に一時感情の満足を活はんが爲めに盲信せる信仰が、一旦其感情の靈火の冷却と共にその基礎を失ひ、一個の詩的空想と化し去りたるが致す所にして、斯かる結果は彼れ

宗教家が毫も智性と意志とを顧慮すると無くして、感情の一方を偏重したるの結果なりとす。是れリッチェル主義の感情一方をのみ偏重する神學が一時信者の宗教的熱情を鼓吹し得るも、斯かる狂熱なる感情は又忽ち冷却し易きものにして、さめての後は恰も大風の吹き過ぎし後ちと同く、唯その遺せる所のものは信者の茫然たる自失あるのみ、然れば斯かる智識の根底無き感情一方の信仰は却て他日の不信仰を喚び起こすの誘因を爲すの危険あるを免れざる所以なり。吉田の兼好法師曾て徒然草の中に於て斯かる消息を傳へて、彼の感情的信仰の一方を重んずる淨土教の智識の根底に缺如するの故を以て、その信者の信念は平生頗る不定疑團の中に浮沈動搖しつゝある所以を叙して左の如く謂へり。

ある人法念上人に念佛の時、ねぶりにをかされて行をおこたり侍べる事いかにして此さはりをやめ侍べらんと申ければ、目のさめたらんほど念佛したまへど、こたへられたりける。いとたふどかりけり。又往生は一定とあもへば一定不定とあもへば不定なりといはれけり。是れもたふとし、又うたがひながらも念佛すれば往生すともいはれけり。是も又たふとし。

此に所謂往生は一定と思へば一定不定と思へば不定とは是れ明かに淨土教の安心立命には感情的要素の獨りその勢力を肆にしをりて、智的分子の基礎足らざるが故に、一旦或機會より狂熱なる感情に由りて未來往生の一定せざるを確信するも、又忽ちその感情の火氣冷却するときは、その嚮者に一定と思ひし往生の疑はしくなるに至る所以を表明しをりて餘りあるものとす。是れ感情一方の上に樹立せられたる宗教的信仰は、其勢力一時何かにも強盛なるものありて存するが如く見ゆるも、又忽ち冷却し去りて疑團百出、其の結果却りて懷疑論に陥るるの危険ある所以なりとす。彼の感情一方の上に成立せる宗教的信仰は、之れを喩ふれば恰も陽春三月櫻花の爛熳たるが如く、一時何かにもその狂熱の熾んなる、鳥謳ひ蝶舞ふの盛況を見ると雖も、一朝智識的省察の疾風妬雨沛然として襲ひ來たるに逢はんか、昨日迄は熾盛なる信仰の花咲きにほひし艶態嬌態も、忽ち一變して撩亂狼籍、今の懷疑的泥土と化し去らんとするに至るものなり、是れ實に宗教的信仰が吾人全精神の平衡を逸脱して感情一途に成立せられし偏僻の結果なりとす。故にクラウゼは曰く諸種の形式に於ける神に對する感情、

特に其憑依歸托の感情の如きは、亦必然的に神に關する智識を豫想す、蓋し吾人は我が了知領得せざる所のものに憑依歸托せんとするが如きは、到底不可能なればなり、蓋し宗教を以て主として吾人の感情上のみ置かんとするが如きは、吾人の全意識を以てその一要素たる感情と同一視するものにして、誤まれるの甚しきものなり、然れど又た吾人の感情一方のみにより宗教の原始を説明するの非なるが如く、吾人は宗教を以て吾人の意志又は智性の一方のみより之れを解釋し去らんとするの、結局又一方に偏せるの僻論たるを知らざる可からざるなり (So setzt denn auch das Gottgefühl in seinen verschiedenen Formen, besonders als Gottvertrauen, nothwendig Gotteskenntniss voraus, da es unmöglich wäre, einen Unerkannten zu vertrauen. Der Satz, dass die Religion allein oder doch vornehmlich Sache des Gefühls sei, beruht auf einer Verwechslung des ganzen Selbstsinnes mit dem Gefühl, Welches doch nur ein Moment desselben ist. Ebensovienig aber, wie das Gefühl, darf das Erkennen oder Wollen für das Ursprüngliche der Religion gehalten werden. Pfleiderer: Geschichte der Religionsphilosophie. Bd. II. St. 395.) 既に宗教には感情の一方を過重するの不可なる

が如く意志又は智性の一方のみを偏重するの到底吾人精神の全軀を満足するに足る充分なる結果を得る能はざる僻論たるに了はるを知る可し、此に於てカント、ライエル、マッヘル氏は宗教に感情の切要なるを認むると同時に、智性意志の側面をも併はせて之を考ふるの止むを得ざるに至り、カール、ハルゼは心情 (Gemüth) を以て、ニール、チエは感情 (Gefühle) を以て他の智性意志をも併はせ統一する所の圓融的原理なりと説き、宗教を感情の上に説定せんとするにも拘はらず、宗教に智情意三作用の必要なる所以を認容し、フヒテ氏の如きも氏の初期の哲學に在りては宗教と道德とを全然同一視せしも到底是れのみにては満足なる宗教観を得る能はざるを以て、その次期哲學に於ては宗教を以て全然形而上學と同一視し、最後に亦宗教は神の愛に在りて存すとのスピノヅァの思想を採用し來りて、遂に宗教の到底倫理的道德實行の意志的側面のみにては満足なる解釋を形成する能はず、必ずや智性感情の要素をも參酌併考せざる可からざるの必要を感ずるに至れり。

然れば、タイ、ヒ、ミラー氏の如きは宗教は智情意全軀の作用より成れる神に對す

る吾人の意識的狀態を指すものたるを論じて左の如く謂へり曰く、宗教は吾人の智識や感情や行爲の全作用に從屬せる神の意識を記號的に表白する所の心狀なり (Religion ist diejenige Gesinnung, welche sich dem Gottesbewusstsein zugeordnet in zusammengesetzter Function von Erkenntnis, Gefühl und Handlung symbolisirt. Teilhardier: Religionsphilosophie, St. 91.)。以て知る可し宗教は吾人の智情意全軀を満足せしむ可きものに非ずんば到底健全なる宗教たると能はざるを。

以上論明せし所を回顧し來りて之を總覽約結するに、宗教は其生成上より其性質を考察するも、既に大成せる宗教なる意識を分拆して之れを論究するも、健全なる宗教は必ずや吾人の智情意三作用の活動に待たざる可からざる所以を略ぼ明瞭ならしむるを得たり、然れば此に於てか吾人は知る、宗教も亦彼の哲學と同く、苟もその健全なるものに在りては、必ずや吾人の智情意全作用の上に成立せられざる可からざるものたるを、然れば健全なる宗教は之れを吾人の主観上より觀察すれば吾人の精神全軀の作用より成るものなりと斷言し得可きなり。

第三章 宗教と哲學

第一節 希臘の古代に於ける哲學宗教の兩思想を論ず

彼の氣候和暄風光和暢山紫水明の天然の樂土に生れたる希臘人の思想は、徹頭徹尾樂天的なり、美的觀想に富めるの人民なりき、斯かる融和なる風土自然の樂園に生長せる人民に在りては、自ら美的觀想を以て自然現象を把持し、自然現象の美を謳歌し、万有の妙調を讃歌し、上は日月星辰より下は山岳河海に至る迄、此等天地間に流布せる森羅の諸象を美的觀想の下に人化し、神視するに至るは自然の數なりとす。ツォイス、パテール (Zöiss-Pater) は諸神中最高等の神にして天の主なり、父なり、吾人に雨露の恩恵を與へ、地上に豊饒を播くの神なり、天地の支配者たると同時に一切神人の主宰者なりとす、彼のパラス、アテーナ (Hellas Athena) は雷霆を神化せるものにして、アポローン (Apollon) は光明の神なり、ヘルマイアス (Hermias) は天の牧牛に見立てたる雨雲を起すの風神たり、是れ吠陔のサラメヤス

(Saramyas) より來たりしものにして、希臘に入りて原野の豊饒や家畜を養ふの神となれり、デオニオンヌス (Deionnos) はマックス、ミラー氏の説に由れば梵語の Dyu-Niso 又は Dyu-Nisya なる晝夜を意味せる語源より來たりたるものにして、天を父とし、地を母として生れたる男兒なりと考へられたり、その他ヘーラ (Hera) は天の女王にして、デーメーテール (Demeter) は地の母なり、又プロメーテウス (Prometheus) に関する最近學者の研究に由れば、印度アールヤの火神たる阿姑尼 (Agni) と同様の位置を占む可きものたるを發見せられたり、彼の日々遙かに西方廣淵に沈まんとするの太陽を見送りては日神ヘーリオス (Hios) が羽翼を張れる金舟に乗じてその晨の空なる東方の故園に還り去るものなりと想像し、每晚東天の紅を潮するを見ては女神エーオース (Eos) の金車に乗じて有り明けの空に白馬を驅るものなりと觀ぜり、其他アイオロス (Aiolos) は風神にして、ボサイドーン (Poseidon) は海神なり、山にニームフエー (Nymph) あり、川にアイナイアス (Aivias) あり、森にパン (Pan) あり、希臘人の思想は實に一切の自然現象環界の万有を神化し人視し以て之れを神祀して崇拜祭事せしものとす。斯くの如く古代希臘人の

天の詩的觀想は自然現象森羅の万有を一切神化して一々之れに神事せり、此に於てか希臘に在りてはその古代の神話を醗酵しつゝありしは則ち其宗教の多神教たりし時代を代表しつゝありしなり、然れどエーペー氏及びチーレ氏の説けるが如く、ホメーロスの時代に至りても既業に彼のツォイス神の一切神人の首長として尊崇せられ、一切他の諸神は各自有する権力の範圍内に於いてツォイスに依りて與へられたる権力の代表者たるに過ぎざりし、然れば此のツォイスの首長主義は殆んど唯一神教に近かきものにして、漸くツォイスの一元的根本主義を以て幾多の諸神の降生し來れる所以と、天地開闢の大原とを説明し去らんとするに至れり、換言すればツォイス神の一元より漸く之れに従屬せる諸神の降生を論ずる神統説 (Theogonie) と、天地開闢説 (Kosmogonie) とを考定せんと擬するに至りしものなり、然れば此時に當りてや希臘の宗教思想は多神教より漸く單一神教 (Henotheismus) に推遷移轉し去らんとしつゝありし所のものにして、而て今若しツォイス神の人格的實在の思想に更ふるに非人格的原理を以てせば、此に神話は一變して哲學となるに至るものなり、而て此一轉機を現實に成果したるもの

はタレースその人なりとす。蓋し紀元前第五六世紀の頃に當りて希臘人の殖民地は各所にその數を増加し來り、フェニケ人との通商貿易も漸く頻繁を致し來りたるを以て希臘人の文化は急劇にも長足の進歩を爲せり、此に於てか智識經驗は舊に倍して頼みにその範圍を擴大し、最早や從來の自然崇拜的神話的人世の解釋を以てしては彼等の意識を満足せしむるに足らず、彼等智識の新需要は何等か一層高等なる精神上の『アマプロシヤ』を要求するに至れり、此に於てか紀元前第六世紀に至りタレース先づ起りて從來の神話的宗教的世界觀を否定して、哲學上より世界を解釋せんと企て、世界の本躰を認めて水なりと説きしより、エレア學派のクセノファテリスは之れに繼いで起り、痛く人民の多神の宗教思想を排撃して唯一神教(Monothelism)を主張し、斯かる唯一神は最高實在にして決して人間と比較し得可きものに非ず、故に斯かる唯一神は自ら吾人々類の如き人格を有するものに非ざるを説破せり。エフェソスのヘーラクライトス氏も亦彼の希臘古代の詩人(Διοδοτος)ヘメーロス、ヘーシオドス等の教へし神は決して真正なる神に非ざる所以を説明して、ツォイス(Zeus)、ヘーラ(Hera)、ヘルメ

ス(Επιμυς)アプロヂテ(Αποδοτις)等の多神を拜す可からざるを誨えて、神の唯一なる所以を説けり。此に於てか紀元前第五世紀の頃に至りては科學の進歩と共に、デルファイに於けるアポローン神の禮拜儀式は爰に廢たれ、遂に一般人民の信念界は支離滅裂の悲境に沈倫し、物質主義や感覺主義は思想界に横行するに至り、其極端辯論者の懷疑論を惹起するに終はれり。ソークラテス氏の知徳合一論は、今や是等時勢の急需に應じて、人民道德の頹敗を既倒に回へし、屹然彼等詭辯論者が熾んに主張せし感覺的幸福主義を排斥して、一般民俗の墮落を救濟せんと欲して興起せし所のもの、然れば氏が哲學上の問題は主として倫理道德の説に向て傾注せられたり、然れば氏自らは哲學上唯一の眞神を信仰しをりしと雖も、氏は人民をして強いて從來の多神教を捨て、唯一眞神を信仰せよと勸むるが如きとは之れを爲さざりし、是れソークラテス氏は斯くの如き行爲は徒らに人民の信念界を攪亂するに止りて、幾んど有害無益に了はり、氏が經營慘怛一意改良せんと企圖せる人民廢徳の挽回に効少なきものなりとして暫らく之れを不問に附せしなり、然れど氏自らは固く唯一神の存在を信憑しをかしは、氏の

反對論者が氏を陥るゝの口實として、氏を以て國神を信ぜざるものなりとの口實を以て讒誣せしに由りても自ら明瞭なりとす、ソークラテース氏に尋いで氏の知徳合一論に基き而て更らに自家獨特の偉大なる哲學的思辨の下に、茫然たる一大哲學の体系を組織し、自家創見の唯心論を首唱せし者はプラトーンその人なりとす、氏が唯心論的に理念界(Ideenvelt)を想定して理念界を以て完全の世界と爲し、哲學者のこの世界に還沒皈入せんことを愛求願望せしより、漸く過境的に神を想定するの學風を醗酵し來り、アリストテレース氏に至りてはその所謂第一原動者(πρώτων κινήσων οὐ κινήσμενον)は自然神教(Deismus)に所謂神に等しきもの而かも此神は即ち氏の哲學原理たるに外かならざれば凡俗の容易く解し得可き所に非ざるや勿論なりとす、換言すれば氏の所謂神は哲學者の根本原理たる神にして人民の宗教的意識に於ける神としては頗る入り難きものありしや明かなり。故にその後ちストア學派新プラトーン學派等に至りてはその説凡神的接神的哲學々風を醸成し、人生の解脱や救済やの實際問題の解釋にのみ傾注し來りたるを以て、アリストテレース以後希臘の思想界はその理論上たる

と實際上たるとを問はず共に哲學宗教の兩者は次第に混同密着し來るに至れり。以上陳べたるが如く希臘に在りては太古その人民の思想幼稚なるや、自然を崇拜し自然を人化し神視して所謂自然崇拜の宗教思想は民間に流布し、人民の思想信念を支配しをりしと雖も、其後ち希臘人と東方諸國との交通漸く頻繁となり來り、異邦人に接觸するに當りては希臘人の經驗智識の範圍益々増大し、遂に從來の人格的多神的宗教思想を以てしては到底彼等が思想信念を満足せしむること能はず、此に於てか從來の世界人生を説明解釋する不可思議的原因(Οὐκ εἰσακούσια)なる人格的の神を以てせしに不満足を感じ、頻りに懊惱しつゝある彼等の思想は、泰西哲學の鼻祖たるタレース氏に由りて世界の本体は水なりとの科學的解答を得て纔かにその鬱勃の生氣を泄らせり、爾來哲學は宗教に代はりて稍々學識ある者の信念界に覇權を稱するに至れり、換言すれば希臘に在りてはタレース以後哲學は學識ある者の宗教となり、唯智識劣等なる庸人凡俗者の間に於てのみ從來の多神的宗教思想は彼等が朴素的哲學的思想の需要を満

足せしめをりしなり、故に希臘の哲學は希臘人の古代の神話的宗教思想を繼いで起これるもの、換言すれば希臘人士が紀元前第六世紀の頃に至りて初めてその哲學を創説したりしは、彼等の哲學は此時期に至りて突如として天より降り地より湧き出でたるものに非ずして、之れに先きだてる彼等の宗教的宇宙論や人生論は本期に於ける哲學思想の準備となりしものなり、尙之れを極言すれば彼のタレースの哲學をして生成せしめたる所のものは之れに先き立てる彼等の神話的宗教的思想に在りて存するものなり、否、その神話的宗教的思想はタレース以前に於ける希臘人士の哲學なりしなり、シローペンハワー氏の云へる人民哲學 (Volkmetaphysik) たりしなり、何んとなれば彼等の自然を崇拜し自然を人化し神視して、之れに由りて森羅の諸象人事界の諸出來事を説明し、人民の吉凶禍福より一切の原因を神に歸して考察し、斯かる説明解釋に由りて彼等の精神は満足されをりしものなればなり、是れ豈に不完全不充分ながらも一種の哲學に非ずして何ぞや、若し夫れ斯かる不可思議原因を以て物理界人事界の諸出來事を説明して満足せし神話時代に於ける希臘人士の思想を捉へ來りて、之れをタレ

ースか萬有の本體は水なりとの科學的説明に比すれば、それは唯その觀察の超自然的たる自然の然るると、詩的たると科學的たるとの相違ありて存するのみにして、その思想の内容に至りては何等の徑庭相違あるを見る能はざるものなり、換言すれば此兩者は畢竟論述の方法形式上の差異たるに止るものにして、その思想の根本的本質の相違に非るや明かなりとす、是れヘーゲルが宗教は吾人の寫象の形式に由り哲學はその概念の形式に基けるものなりと稱せし所以にして、其の形式の上に於ては斯かる差異ありと雖もその内容に到りては兩者元來是れ一なりと論明せし所以なり、若し夫れ今を距ること二千五百年の昔時に當りて、タレースが万有の本體は水なりと思惟せしものを取り來りて、之れを近世の諸哲學者の思想に比較し來れば、一は獨斷的にして他は科學的なり、到底是等兩思想はその詳細精密なる程度の差に至りては、天淵霄壤も啻ならざるは勿論なることは、三尺の童子と雖も、又是れを知る、然れど斯くその學說に高下優劣の差こそあれ、吾人は等しく之れを同一哲學と見做すに躊躇せざるものなり、果して然らばタレースとタレース以前に於ける希臘思想とは豈に之れを同一思想

の繼續なりと見做すの不可なるの理由あらんや、然ればタレース以前に於ける思想信念も亦是れ一種の宇宙觀人生觀にして、一種の哲學なりと見做すも何んの不可か是れ有らん、矧んや吾人を以て之れを見るにタレースと現今の哲學とは、之れをタレースとタレースに先きだてる希臘の神話的宗教思想とに比するに、その懸隔の差は果してその何れに多きやは未遽かに斷言し易すからざるものありて存するを見るをや、果して然らば前者を認めて以て同一哲學の範圍中に入る可きものなりと容るさば、後者は亦是れ一種の幼稚なる哲學思想として許容せられざるの理あるを見出だす能はざるなり、然れど泰西の哲學史家或はタレースに至りて突如として希臘哲學の創起されたるが如く説けるは、實に彼れタレースは曠世の卓識を以て宇宙人生の説明解釋を非科學的詩的空想を離れて科學的に闡明せんとする癡思特見の下に當期に於ける希臘の思想界に一大時期を劃せしの點を鼓吹せんが爲めに出づるものなり、何かにタレースの卓識英邁にして超凡の資ありとするも、豈に突如として斯かる一大新思想を考出し來るを得んや、必ずやタレースの思想をしてタレースたらしめたる所以のも

のはその前代思想の之れが先驅を成したるに職由せずんばある可からざるなり、然れば吾人はタレースの思想の先驅を成し、希臘の思想をも併はせて之れを一種の哲學的思想と稱するも毫も不可なきものなりと主張せんと欲するものなり、固より斯かる神話的宇宙觀人世觀は今日の哲學を目して哲學と呼べると同一の意味を以てしては到底之れを哲學と稱すること能はざる可しと雖も、シューベンハワー氏の云へる人民哲學の意味を以てしては矢張り之れを一種の哲學と稱し得可しと信ずるものなり、蓋し吾人々類の精神發達は有機的發達を成せるものにして、その何れの點迄は神話的非哲學的思想の時代にして、その何れの時期よりは哲學的時代なりとの嚴正なる分割線の截然たるものは、吾人到底之れを劃すること能はざる所以を知らば、彼の神話的時代なりと稱する中に既に哲學的思想の萌芽を有しをるものもある可く、又哲學的時代と稱しをるもの、中にも、尙前代の神話的思想の痕跡を印しをるもの有るを察知す可きなり、見ずや彼れタレースが世界の本躰を目して水と稱せしは希臘古代の神話たるオーケアノス(Okeanos)の思想の變形に外かならずと主張せる哲學史家さへ

あるに非ずや、エバール教授の如き即ち是れなり、尙その後エムペドクレースに至りても氏の所謂地水火風の四元素を呼ぶにその古代神話上の神名たる、ツォイス、(Zeus) ハーラ ('Hpa) オルコス (Orkos) キースチス (Nyx) を以てせしは、何に氏が神話上の思想より影響せられをりしかを推知し得可し、果して然らば古代希臘の神話とタレースの哲學思想とは大牙交錯互に相出入しをりて、氏の哲學はその古代の神話と密接の關係ありて存する所以を知る可きなり、然れば何れの時代は神話的思想の時代にして何れの時代は哲學思想の時代なりとの判明なる區分を劃せんとするが如きは到底不可能の事に屬するものと謂はざる可からず、唯後世學者の泰西哲學はタレースに拘まると成せるものは、氏が前代思想の繼續上從來の思想に比して一大變遷の機期に立ちしを以て、此點を鼓吹せしが爲めに氏を以て泰西哲學者の鼻祖なりと稱すと雖も、氏以前には寸毫も希臘の思想界には哲學的思想無しと云ふには非らざるなり、何んとなれば彼の神話的宇宙觀、人生觀の如きも畢竟一種の哲學的思想に外かならざればなり、是れ今日學者の吾人の哲學的需要 (Metaphysisches Bedürfnis) は古代神話の中に在りて發見し

得可しと爲す所以なりとす、故に吾人は此點を鼓吹してタレースに先きだちて希臘の思想界には幼稚ながらも一種の哲學思想の實質在りて存し、そは神話の形式に於て之れを發見し得可しと爲すに躊躇せざるものなり、從て又タレース以後に於ける各哲學者の哲學体系は是等のタレース以前の宗教思想を繼續して起り來り、從前の神話的朴素的哲學思想に代はりて學者の思想信念の需要に應ぜんが爲めに勃興し來りし所のものに外かならず、故に吾人はショーペンハワー氏を模して謂はんとす、曰く、哲學は學者の宗教なり、少くとも以上論ずる所を以てせば希臘に於ける古代哲學者の宗教なりと、果して然らば哲學は古代の神話宗教思想の連鎖上に成れる思想發展の繼續的結果なりと稱し得可きなり、故に世の所謂宗教や哲學や共に其時代々々に於て其人々に從て夫れ相應にその精神的需要を満足せしめんが爲めに惹起せられたる所の思想信念にして、宗教と哲學とは共に一種の究竟的證信に外かならず、故に吾人は再び謂はんとす、曰く、宗教は人民哲學にして哲學は學者の宗教なりと。

第二節 印度の古代に於ける哲學宗教の兩思想を論ず

吾人は今顧みて上節に於て吾人の辨明せし所論を取りて之れを印度の宗教的
 信念と哲學思想との發達に徴して考へ來るも、吾人は既に希臘に於ける宗教哲
 學の開展發達と、同く古代印度のアーリヤ族の宗教的哲學思想の進化發達も全
 然その歷程の序次を共にするものたるを認むるを得可し、否々寧ろ印度アーリ
 ヤ族の宗教哲學は希臘に於ける宗教哲學思想の發達開展より尙一層宗教と哲
 學との密接に關涉しをるの痕を追蹤するを得可きなり、蓋し印度に在りては宗教
 と哲學との兩者は始終首尾を貫徹して互に相接觸緊着しをるとは、希臘の哲學
 が之に先きだてる宗教的神話的思想より開展發達し來たりたるにも關はらず、
 タレースに由りて哲學の研究方法は一大新生面の開かるゝありて、その方法や
 次第に分拆的科學的となりしかば希臘の哲學は淺薄にも近視眼的に觀察を下
 だすときは、一見宗教と全く異なれるものゝ如く見ゆるものとは大に雲泥の相
 違ありて存するものなり、抑々印度人の特徴としてその哲學の研究は希臘に於
 けるが如く科學的分拆的ならずして、その理論的哲理攻究の裏面には必ずや明
 かに實際的修行の實踐の伴ひ來りをるものとす、然るに彼れ泰西の學者は最近

に至るまでは歐洲の哲學のみを以て單に哲學なりと思惟し、彼の希臘風の研究
 方法に由れる哲學のみを目して唯一哲學なりと偏信せるの極、遂に古代哲學と
 し云へばそれは單に希臘哲學のみなりと思惟し、印度の哲學は宗教と密着し支那
 の哲學は道德と混同しをるの故を以て、斯くの如きは畢竟宗教にして哲學に非
 ずとさへ想像するに至りたるとは、恰もスピントナやフリーマン等一派の歴史
 家が、世界史とさへ云へば單に歐洲人民の歴史なりと速断して、印度や支那や日
 本の歴史の如きは全くその圈套以外に放擲し去りたると同一の誤謬に陥ちる
 れるものとす、然れど吾人は今斯かる見解の何故に誤謬なるかを一々辨解しを
 るの餘裕無きを以て、強いて是等の問題に容喙せずと雖も、之れを要するに彼れ
 歐米の學者が印度の哲學を以て全然宗教なりと見做して、寧ろ之れを哲學の範
 圍内より驅逐し去らんとするの僻見に坐するに至りしが如きは、其何かに印度
 の哲學が宗教と密接不離否な寧ろ一味同躰の關係に於て在るかを見るに足る
 可く、又宗教と哲學とがその名を異にしてその實を一にし、その形を相異にして
 その本質を一にしをるかを證するに餘りあるものとす。

印度の思想は希臘に於けるが如く、又その淵源を自然現象の崇拜に起こし、土地氣候人種等各般の諸因諸縁に迫まられて漸次發達開展し來り、その源遠く美的宇宙の觀想に創まり、延いて諸派の哲學思潮を大成し來り、遂に澎湃注渺たる宗教哲學の大海の『パノラマ』的の壯觀を現出するに至れり、則ち印度の宗教はその源を自然現象の崇拜に發せしを以て、彼の燦爛煌として空間に瀾漫せるの光明を人格視し、以て之れを崇拜して輝けるもの即ち提婆(Deva)と名けたり、彼の鵬翼低垂沖漠茫洋たる天空の無限を神視しては之れをアチーチー(Aditi)と稱し、又は希臘人のツォイス、パテール(Zeus-pater)と同一の語原たるヅヤールウス、ピタール(Dyaus-pitar)と呼びたり、其他夜の天空たる婆樓那(Varna)あり、晝の長天たる密多羅(Mitra)あり、太陽即ち蘇利耶(Surya)の炎々たる一團の火鉢は密多羅阿姑尼婆樓那の炯々たる眼光なりと想定せられ、東天紅を潮し旭日の影瞳々たるの光景を神化して烏舍師(Dakṣ)と爲し、其茜ねさす朝天風色の美を歎稱して烏舍師を美少婦と觀せしことは希臘のヘーオーニス(Hés)と同一なり、其他驟雨の神たる因隨羅(Indra)あり、風の神たる婆由(Vayu)樓隨羅(Indra)あり、火の神たる阿姑尼

(Agni)あり、河水の神たるアパス(Apas)あり、斯くの如く印度の宗教は自然崇拜に始まり、マックス、ミュラー氏の謂へる宇宙万有の非觸知的及び半觸知的の對象を以て之れを神化し神視して崇拜せしに始まるなり、後ち時世の推移と共に彼れ印度アールヤの思想信念は漸次發達進化し來りて、マックス、ミュラー氏の所謂單一神教(Henotheismus)若くは交替神教(Kathenotheismus)より唯一神教(Monotheismus)万有神教(Pantheismus)の域に迄發達進化するに至りしものなり、則ち彼のプラガパチー(Pragapati)を以て宇宙唯一の主と爲し、天地は此一神に依りて創造せられ主宰せられたるものなりと考へたるが如きは、その思想に唯一神教の痕跡を印し、その万有神教的思想は梨俱吠隨の神我章(Purushasukta)に於て宇宙の開發大原は神我(Purusha)に在りと爲せるの思想に照らして之れを知り得可きなり、特に驚く可きは既に吠隨の時代に在りて、早く既に後世の哲學的無宇宙論(Acosmism)の分子と認識論的唯心論の萌芽とを具有するを表はせるものにして、非有非無の沖漠無朕の根本原理よりして宇宙の生成世界の開發を説き、而かも此宇宙の生成や世界の開發やは精神的欲望(Kāma)に基けるものなりと説けるが如き

是れなり、則ち前者の宇宙論に於て若し太初靜止(Synthe)の非有非無たるTat(此の思想は後世に發達して梵天となりしなり)又は庵(Am)又はOe)の實在を鼓吹して、その欲望に由りて成れる宇宙世界を否定せば吠檀多學派の無宇宙論と成る可く、その精神的欲望の開發的思想を鼓吹せば一切印度の哲學思想に固有なる認識論的唯心論と成る可きなり、矧や彼所謂吠陀の神話的宗教的時代に在りて早く既に懷疑的思辨の風潮盛んなるものあり、當時既に因陀羅の存在をさへ疑ふ者あるに至れり、今是等の哲學的思潮を蒐集大成して一家の哲學的組織を成せるものと優波尼沙土の哲學となす、然れば印度に在りては、宗教哲學の二者はその當初より、極はめて密接不離の關係を有しをるものにして、既に太古吠陀の神話時代より、その所謂宗教的觀想なるもの、中に、早く既に哲學の分子を含有しをりて、不完全にも彼等の宗教思想は一種の哲學的思想なりと見做すを得可し、故に今特にマックス、ミュラー氏は這般の消息を傳へて、印度人が何かに哲學的人民なりしかを説明せんが爲めに論じて曰く、彼の印度の最古の宗教思想たる自然現象の崇拜もその自然現象そのものを崇拜するの中に於て早く既にその裏

面には何等か一種の洋渺茫漠の無限的觀想ありて存し、而かも太古人民の其智識の程度幼稚なるが爲めに、その無限の觀想を適切なる抽象的論理思辨に由りて把持し來たるの方便を缺如し、又斯かる無限の思想を適確に表白するの言辞にも窮せるものなるが故に、彼等印度のアーリヤ族は或は空中に炫曜瀰漫せる光明無量之美を觀じては、隨ろげに是等無限の思想を表明して、人格的にアブラハムと爲し、或はその象を天空地上の諸現象に假りて、以てアチチ、婆樓那、因陀羅等の神格としてその無限を崇拜せりと。果して然らば斯かる一種無限の思想を有し、不完全ながらも斯かる無限の觀想を表明しをる以上は、之れを彼のタレイスが世界の本體を獨斷的に考察して水なりと主張せしものと、果して幾何の差異がある、唯希臘思想と印度思想との間に於て其異なる所は印度に在りては無限の觀想を表明するに記號的形象的比喩的文字を以てしたるの差違あるのみ、換言すれば之れと彼れとの殊なる所は思想表白の形式上の差なり、その實質上内容の點に至りては、タレイスの世界の本體は水なりと説きしも、印度アーリヤ族のアラガバチーなりと謂ひしも、差して異なりたる思想には非るなり、矧ん

三〇六
 や彼の梨俱吠隨中に散見する一元論的唯心的宇宙開發論の如きは、明かに彼の單純なる神話とはその趣を異にし、吾人をして神話以外に何等か一種の哲學的風尚に髣髴せしむるもの有りて存するを見るをや、然れば印度に在りては吾人の嚮者に之れを希臘に於て瞥見したるものより、層一層哲學と神話的宗教思想との兩者が交互密接せる關係に於て立ちをる所以を認むるを得可し、否な寧ろ此兩思想は吾人の嚮者に既に一言せるが如く、其差は唯思想の敘述上外部形式の差異たるに止りて、内容上事實の殊別を爲すものに非ず、何んとなれば吾人々類の思想の發達進化や實に漸進的にして、前期思想と後期思想の兩分子は交互相緊着して所謂有機的の發達開展を爲しつゝあるものなれば、何れ迄は神話時代、何れよりは哲學時代なりとの截然たる明瞭の區別は之れを思想の發達史上到底劃するを得ざる所のもの、唯吾人が某期を神話時代と呼び某期よりは哲學時代と稱する所以のものは、前は吾人思想の發達進化の歷程に徴して、その思想の比較的幼稚なるものに名け、後者はその思想の比較的高等の階級に到達したる程度に於て之れを呼びたる迄にして、その差は形式上の差たるに過ぎざるも

のなればなり、然れば哲學宗教の兩者は之れを希臘に於て吾人の探究したるが如く、印度に於ても決して全然其類を異にせるものに非ずして、同一思想の發達進化の某の途上、某歷程に迄到達したりし所のものを哲學と稱するに外かならず、而て其後期哲學の未だ繼起せざる間は、前期の宗教的思想は一種の哲學的思想となりて、彼等人類の幼稚なる思想上に究竟的最終の證信を形成しをりしものにして、此思想は彼等の情的方面と共に智的方面の安心立命の基點を爲し、ものなり、然れば此點より云へば、彼所謂宗教たる神話的宇宙觀も一種の哲學なりと謂ふを得可きものとす、矧んや印度に在りては既に太古神話の時代と稱するの昔時より、早く既に之れを希臘初期の哲學と比して、その思想の内容に關しては毫も遜色無きの哲學思想を有しをるもの有りて存するをや、果して然らば印度に於ても宗教哲學の兩者は思想上根本的の差異に非ずして、單に形式上の差異たるに過ぎず、否な寧ろ印度に在りては哲學宗教の兩者はその發達の終始を一貫してその間には何等の截然たる區分あるを見ず、此兩者は全然同一なりしものなり、然れば印度アーリヤ族の思想にはその神話的宗教的思想は一

種低度の哲學思想、少くともシローペンハワー氏の所謂人民哲學にして彼等に取りては一種の究竟的證信たるに外かならざりしや明かなりとす。

第三節 セム民族の古代に於ける哲學宗教の思想を論ず

斯く論ずるときは人或は難じて云はん、汝が言の如きは印度若くは希臘の如きアールヤ族の宗教に在りてこそ初めて道ふとを得可けれ、セム民族の間に發達せる宗教的意識に至りては到底之れを哲學として見るを得可からざるもの非ずやと、曰く然り豈に夫れ然らんや、蓋し論者の言は吾人の所謂哲學なる語の意味を明知せざるの誤解に出づるものとす、何となれば成る程今日所謂哲學なる語を以てしては、吾人はセム民族の宗教を目して一種の哲學なりと稱し得可からざるものありて存するを認むと雖も、彼の人民哲學の意味を以てしては尙充分之れを一種の哲學と稱し得可ければなり、勿論セム民族の冥想思辨に乏しき印度アールヤに於けるが如き沈痛雄大なる哲學思想あること無く、彼等が美的觀想に乏しき希臘の神話に於けるが如き莊麗和暢なる神統紀(Theogonie)をも

有せずと雖も、希伯來人は早くより其種族の神としてヤーエー(Yahweh)なる一神を尊崇し、ヤーエーは特別に其種族に對して恩德惠福を與ふる者なりと考へられ、之れに反して他の諸神の如きは畢竟希伯來人に取りては何等の關係無き者然らば希伯來人は主としてヤーエー一神に奉事す可しとの一種の唯一神教を奉じをれる者なり。フライダラーは神に對する這般の見解を稱して實際的單一神教(Praktischer Henothelismus)と稱して、一神の外一切他の神々の存在を否定する真正の唯一神教(Monothelismus)と區別し、而かもマックス、ミュラーが印度古代の宗教を呼びて單一神教と名けしものと殊なる意義に於て之れを使用したり。抑、元來ヤーエーなる神は恐らく自然現象を神化したるものにして、シナイ山にその居住を占め、その咆哮せる聲は雷を爲し、その鼻息は暴烈なる風雨を成すと想像せられたる所のものなり、爾來希伯來人のヤーエーに關する思想は漸々發達して諸種の屬性を此神に與へ、或は怒り易くして絶大なる威力を有すと爲し、或は神聖にして犯かす可からざるものと爲し、或は正義を愛するの神と爲せり、今此思想發達の痕を追ひてその進化の歷程を叙述せるものは所謂聖書的高等批

評なるもの、輒近に至りて新たに列叙したるの舊約全書是れなり、吾人は今一々此に舊約全書に見えたるヤーヅエーの屬性を枚擧しをるの餘暇を得ずと雖も、希伯來人が斯かる過境的 (Transcendenz) 唯一の神格を想定したるが如きは明かに一種の形而上的哲學思想なりと稱するも毫も不可無きを見るものなり、但し希伯來人種の中に斯かる哲學的思想の生成興起し來るの順序は、彼の印度希臘のアーリア人種中に哲學思想の發達し來たれるものと大に徑庭せるものありて存し、後者に在りては智的及び美的宇宙の觀想より哲學思想を發揮し來り、前者は人種の争鬪の實際的急需より開展し來たりたるの相違こそあれ、それが等しく形而上的哲學的思想たりしや明晰なる事實なりとす、論者は之れをしも一種の哲學と稱せずんば將た何にものか是れ哲學と稱せんとする、是れ蓋し彼の神話若くは宗教と哲學との間には千古到底超ゆ可からざる一大鴻溝ありて存すと爲せる僻習偏見に薰染しをれる、彼れ歐米の學者に在りては到底領得するを得ざるの事實なる可きも、上來吾人の縷々論辨したるが如き意味を以て哲學宗教を解釋し、宗教も一種の哲學、少くとも人民哲學なりとの意を昧して希伯

來の宗教思想を考ふる時は、希伯來のヤーエーの觀念の如きは明かに一種の形而上的哲學思想なりと稱し得可きなり、蓋し余はヤーエーを以て希伯來人の形而上學的思想の面影を示めしをるものなりと説くも、ヤーエーなる語は元來希伯來語のハイヤー (Haja) アラマック語のハエー (Hawe) 即ち英語の To Be なる存在を意味する動詞より來たれりと做し、ヤーエーは存在者即ち實在の義にして、哲學的世界の根本原理の旨趣の下に、彼れ希伯來人は既にモーゼの昔時よりヤーエーの概念を把持しをりしものなりとの立脚地の下に、敢てヤーエーを以て哲學的意義を有すと主張するものに非ず、ヤーエーは或はカール、コルニルの謂へるが如く亞刺非亞語のハイヴァー (Hawa) 即ち英語の To Fall なる墜落を意味する動詞より來り、ヤーエーとは英語の Feller 即墜落者なりとの意義にして、畢竟自然現象たる風雨雷霆を神化して生ぜし神格なるが故に、其雷霆の墜落すてふ意義を以てヤーエーの語原を爲せるものなりと解するの寧ろ穩當適切なるを承認するものなり、雖然斯くヤーエーを墜落者の意義に解し、而も尙吾人は希臘印度の神話を以て一種の哲學的思想と見做す事を得と云へる同一の見地よりしてヤーエーを

解して一種の哲學的思想の醗酵し來りし所の結果なりと斷言するに躊躇せざるものなり、何んとなれば元來セム民族がヤーエーを以て万物の創造者なりと觀じ、吾人々類の賞罰殃慶を支配する者なりと想定せしは、之を一方より云へば神話の宗教的思想たるに相異なしと雖も、又他方より之れを見てヤーエーを以て世界人生の根本的原理と爲なせるものにして、此點より之れを云へばそれは明かに一種の哲學的形而上學的思想なりと見做すを得可きなり、唯其希伯來人の特色としてヤーエーなる思想を表白するに抽象的凡神教的ならずして、具體的人格的に之れを把持し、一神教的に之を寫象し、而て彼等の心的作用は主として感情意志の活動に由りてヤーエーの神格を認め、希臘印度のアルヤ族に於けるが如く、智的美的意識の主活動を以て其神格を憧憬せざりし迄のことにして、ヤーエーの神話的宗教思想は希臘印度の神話的宗教と同一、一種の哲學的思想なりと稱するを得可きなり、然ればこの希伯來思想に於ても吾人は亦嚮者に既に引用せる、ヘーゲルが宗教と哲學との區別は、其思想の内容上の異同に非ずして形式上の相異に在りて存すとの思想の正當なるを認めずんば非るなり、若し夫れ

希伯來人民中に繼起し幾多民間の信仰の謬まれるを慨し、人民一般に從來ヤーエーに對して有せる、概念の不正不當なるを摘示して、宗教上に偏狹主義 (Particularism) を變じて普遍主義 (Universalism) を主張し、從來ヤーエーを見來りたる民間信仰を排して、正義の觀念の下にヤーエーを寫象したる各預言者 (Zehrs) の宗教的意識に至りても、又明かに之れを一種の哲學として觀察するとを得可きなり。何んとなれば彼等預言者は吾人に倫理道德の實行を促がす良心の聲を客觀化して以て正義の神たるヤーエーの命令と見做し、其實在を想定せしものに外かならざれば、其表現の形式の差こそあれ、その思想の内容に至りてはカントが一種の哲學的色彩を帯べる、氏の倫理主義より神の存在を公準し、吾人の義務を神の命令として奉認すと謂へると何等の徑庭ありて存するを見ざるを以て、荷もカントの倫理主義にして一種の哲學なりと見るを得可くんば、希伯來の各豫言者の宗教思想も亦一種の哲學と見るを得可ければなり。是れ頓がて此希伯來思潮も、希臘の哲學思潮と、當時世界の都府と稱せられたる、アレキサンドライアに於て會合接觸し來たるや、爰に混然として希臘の哲學思想と融化し、遂に偉大

三二四

なる中世紀教學の礎地を成すに至れるものなり若し夫れ或一派の學者の思惟せるが如く、宗教と哲學とは全然其類を異にせるものにして、何等の關係も其間に保有しをらざるものならんか、希臘の哲學思潮と希伯來の宗教思潮とが相會して、此二大思想の柱流は合して一味の海水となり、以て彼の雄大魁偉なる中世紀の教學体系を構成する能はざるなり、但し希臘思潮と希伯來思潮とは共に異時異處に發達せる外國の思潮なるが故に、此異なれる二大思潮が合同調和するに至る迄は多くの歲月と激烈なる衝突とを以てしたるは眞に當さに然らざる可からざる必然の結果なりしと雖も、遂に此兩思想の合同よりして千有餘年間世道人心を支配したる中世の教學を胎胚し、其勢力近世に至りて尙旺んなるものありて存するを見る、斯く希伯來思潮と希臘思潮とが、しかく相結合調和するを得たる所以のものは、本來宗教と哲學との兩者は世人の思惟せるが如く、全然その類を異にせる内容の異同あるものに非ずして、その發現の形式を異にせるに過ぎざるものたるの所以を知るを得可く、從て希伯來の宗教思想も吾人が嚮者に希臘印度の神話的宗教思想を目して以て一種の哲學なりと稱せしと同一

の意味を以て一種の哲學的思想なりと稱するの不可なきを認むるものなり。斯くの如く吾人を以て之れを見るに世人が希臘若くは印度の哲學的思想に比して、全然相反對して非哲學的なりと爲せるセム民族の思想も、却りて之れを仔細に觀察し來りて、彼等が獨特の創見たる神の思想を熟察すれば、吾人は世人の最も非哲學的なりと稱するセム民族の思想も、又その宗教的たると同時に絶大にして痛快なる形而學上の哲學思想に富めるものたるを發見せずんば非らざるなり、固よりその思想信念の敘述的形式の上に徴して之を云へば、アールヤ族の思想は徹頭徹尾理論的にしてセム民族の思想は徹頭徹尾實際的なり、前者は不斷探究的にして後者は終始既成的なり、前者は進歩的にして後者は退守的なり、前者は常に新説の開展に努め、後者は先人の祖述に力むるの風あり、前者は科學的にして後者は非科學的なり、前者は向上的にして後者は向下的なり、前者は起點(Terminus a quo)より發進し、後者は歸點(Terminus ad quem)より出發せんとするの差ありて、存するも、其内容に至りては希伯來のヤーエーもクレースの水も共に一種の哲學的原理に外かならず、即ち形而上的思想の極致たるを失はず、唯前

三二六

者が過境的 (Transcendenz) なるに反して後者が相即的 (Immanenz) たるの差異あるのみ、若し又その哲學思想の動機より云へば一は怪訝の情に基きて起れる探求心より發し、他は主として民族の悲運に擊動せられて發達し來たりたるの實際的必要より起これるとの差あるのみ、而も前者は怪訝の情に打たれて遂に安心の途を求めんと欲し、後者は民族の悲運に催されて立命の礎を得んと期するより生ぜるもの、此兩者は共に哲學たり宗教たりと稱するに差支へ無きものとす。若し夫れ希伯來人の神なる思想が過境的宗教的なるが故に哲學なりと稱するを得ずとせば、ライプニッツ、テュルフ等の哲學は之れを哲學なりと稱するを得ざる可く、加之中世の全哲學史は其過境的神の思辨を以て充たさるゝが故に、之れを古今の哲學史上より刪削除却せざる可らざるに至らん、若し夫れタレロスの思想が相即的なるが故に之れを宗教なりと稱するを得ずとせば、ストラウスの宇宙の秩序の崇敬やユハトの人間宗 (Religion de l'humanité) は之れを宗教と稱するを得ざる可く、レッシング、ハーダーの一即多 (ein nah many) を立して凡神の宗教觀を稱道せる、即事而眞と謂へる空海の相即的眞言は之れを宗教と稱するを得ざるに

至らん、豈に斯くの如きの不理あらんや。然れば吾人を以て之れを見るに彼のセム民族が、シナイ山に雷電の激發するに愕き、暴雨沛然益を覆へすが如く、屋を懷り樹を抜き荒涼慘怛の光景を呈するを目撃して、茲に初めて此暴戾狂烈なる自然力を神化したるヤーエー神を想出するに至りたるは、彼の光耀燦爛無限の靈光煌耀瀾漫せるを觀想して、アヅ神を想出し、四圍の風色和麗暢諧なるを觀じて自然の美想よりアポローン神を想出するに至りたるも、毫も異るとなく、而して其思想漸々發達開展して一方に於てはアールヤ族の一は沈痛なる瞑想的印度哲學の宗教觀となり、一は探求的科學的なる希臘の哲學思想を醞釀すると同時に、他方に於てはセム民族の實際的單一神教の倫理的に過境的一神を想定するに至れり、而て彼等が是等哲學的宗教的考想に由りて、彼等智識の程度に應じて世界及び人生の合理的解釋を得たるものと爲し、以て自己の安心立命の立脚地を此處に求め、之れに由りて彼等は初めて精神上の安慰を收得しつゝあるものと謂はざる可らず、然れば世人の認めて以て最も非哲學的となせるセム民族の宗教も吾人を以て之れを見れば、其形式上の差こそあれ、その思想の實質に至

りては頗る内容多き哲學の眞髓を保有しをれるを見る、果して然らばセム民族の宗教を以て單に倫理道德にのみ關しをる何等の哲學的思辨をも有せざるの宗教なりと思惟するが如きは、至大なる誤解謬見と謂はざる可らず、勿論セム民族の宗教思想にはその宗教の對象たる自然の神化たるヤエーが、其後ち直に正義を護もるの神と化せしかば、此に大に人民の倫理道德と密接の關係を有し來り、特に罪深かし悔ひ悛めよとの思想は宗教上に有力なるのみならず、倫理道德の上にも鮮からざる勢力を有するものたるは疑ふ可らざる事實にして、而てセム民族の宗教は實に斯くの如き特性を有するの宗教なりしと雖も、單にセム民族の宗教は倫理道德の宗教なるが如く思惟し、何等の哲學的要素をも具有しをらずと説く者あらば、それは實に至大なる謬見なりと謂はざる可からず、吾人を以て之れを見れば何かなる宗教と雖も、其時代と方處とに應じて人民の智識發達の程度に準し、相當の合理的哲學的基礎を有し、之れに由りて世界人生の萬事を解釋し、以て初めて彼等智情意を有する人間の全精神上に不完全ながらにも満足安慰を得せしめつゝありしものと謂はざる可からず、是れ宗教の人民哲學

たる所以なり、故に知る宗教は又哲學と同一吾人々類に安心立命を與ふるものたるを、否な寧ろ宗教は既に哲學に先ちて存せるの哲學にして、換言すれば哲學以前の哲學たるものなり、是れ畢竟哲學宗教の異同の主觀上にはその之れを觀察する視點何んに由り、客觀上にはその鼓吹せらるゝの方面の變はるに從て、或は宗教と呼ばれ或は哲學と名けられたるも、その内容に至りては毫も異同なき同一實質たるを失はざるの根本原理に基因しをるものたらずんば非なるなり。

節四節 哲學と宗教との異同

以上論明せるが如く、之れをアールヤ族の思想に見るも、又之れをセム民族の思想に考ふるも、是等民族の思想は皆な其源を太古の神話的宗教に發し、而てその神話的宗教思想は彼等幼稚なる人民の由りて以て宇宙の秘を解し、人生の目的を探ぐらんと擬せるの鍵鑰となりし所のものにして、是等神話的宗教思想は皆な彼等の宇宙觀人生觀を成し、以て不完全ながらにも之れに由りて彼等自らは宇宙人生の深遠秘奧なる問題に對して合理的解答を把持しをりしものなり、彼等は之れ由りて以て心を安じ命を立するに足る一種の證信的智識と考へを

りしなり。然れば斯かる意味を以てして彼等の神話的宇宙觀人生觀はその詩的宗教たると同時に彼等の智識の究竟せる合理的哲學たりしなり。然れば斯かる意義を以てして宗教と哲學とはその範圍を一にするものなりと謂ふも毫も不可なると無きなり。然れど吾人は尙一層這般の旨趣をして明瞭ならしめんが爲めにその要旨を摘述せんに、上既に一言せるが如く希臘に於てはその古代の神話的宇宙觀人生觀を以てしては到底その當時人智の究竟せるものたる哲學として、人民の精神を満足さする能ざるに至るに及びて、茲に彼「イオーニア」の自然哲學者の一群起りて、從來と異なる一種の觀察點より宇宙人生の問題を解釋して、所謂哲學なる研究を創起し、哲學は從來の宗教に代はりて安心立命の立脚地を彼等に與へ、又は幾分か從來の宗教を改善して人心を満足慰安するの具たるを得しめたり、然り而てその後ち哲學の研究は益々その歩を進め、プラトーン・アリストテレス等に至りては、哲學と民間の宗教とは殆んどその類を異にせるやの觀を呈せる、哲學組織の一大系統を構成して自家安心の立脚地と成せり、其後ちストア學派の凡神論的傾向や解脫論や遂に轉展して新プラトーン學

派の接神的分出論救濟論となりて、希臘の思想と猶太の思想とは互に相混同密着し、遂に哲學にして宗教、宗教にして哲學なる一種の思想を醸成するに至れり、特に中世に於ては宗教と哲學とは互に分離す可からざる密接の關係を以て終始せるは今又更らに論ずるを須るものとす、世の學者常に彼の希臘思潮と猶太思潮とは互に交渉融會して初めて「フロン」氏や新プラトーン學派等が哲學にして該ねて又宗教たる所の思想を醗酵するに至りしを見て、希臘の思想は猶太の思想に遇着遭逢して初めて宗教的思想の分子を獲得したるものにして、希臘と猶太の兩思想の交渉以前に在りては、希臘の哲學には一つの宗教思想も是れ無かりしと思惟するものゝ如しと雖も、是れ大なる誤解謬見にして、吾人を以て之れを見れば前既に述べ置きたるが如く、プラトーン・アリストテレスの哲學体系に於ては、神なる思想は左のみ重要なる位置を占めをらざりしにも關はず、彼等の哲學体系は自身は合理的證信の知識たるや勿論、彼等に向ひては又安心立命の要具たりしものなり、是れ恰も古代の神話的宗教が同く彼等人民に向て一種の合理的證信にして而かも安心立命の要具たりしを以て、之れと

同様の意味の下にプラトーン、アリストテレス氏の哲學は一種の宗教なりと稱し得可きなり、既にプラトーン、アリストテレス氏の哲學にして一種の宗教たるを得るものとせば、希臘の思想は猶太の思想と相會するに及びて始めて宗教的思想を得來たりたるものなりと主張せるは充分妥當ならざるや固より明なりとす、然れども若し單に希臘の思想は猶太の思想と交渉するに及びて猶太教的宗教思想と化し去りたりと云はば、或は可、希臘の思想は猶太の思想を待ちて初めて宗教的となりたりと説くは誤りなりとす、何となれば希臘思想には既に古代に於てはその神話たる一種の宗教的思想を有し、プラトーン、アリストテレス氏の哲學夫れ自身も既に一種の宗教として認めらる可きものたるを以て、希臘の思想界は決して宗教的たるを缺きをらざればなり、然れば吾人を以て之れを見るに哲學及び宗教を以て同く吾人の全精神に安心立命を與ふる所のものにして、而かも當代人智の究竟せる所のものなりと解する以上は、兩者は全然その致を、一にする所のものと謂はざる可からず、何んとなれば、智情意全體より成れる究竟的證信は即ち是れ哲學にして、宗教も苟も完全に吾人の安心立命

の要具たるを得るに至らんには、當代人智の究竟的證信ならざる可からず、何となれば宗教にして吾人の智情意全體の平衡上に成れる究竟的證信たらざる時は、能く吾人をして安心立命せしむ可き資格を有せざるものなればなり、從て斯くの如き宗教は宗教たるの價值無きや明かなりとす、故に哲學宗教は吾人の精神全體の平衡上に成る可き究竟的證信なりとの點に於て、此兩者は全然その同一なるを領得す可きなり、否な哲學宗教の兩者は畢竟同一物の表裏兩面に名けたるもの、若くは同一物を異なれる方面より觀察して得たる同一物の異形相に名けし稱呼たるに過ぎざればなり、是れ吾人がその實質に於ては宗教と哲學とは全然同一なりとの立脚地よりして、希臘思想はその猶太思想との交渉以前に在りても早く既に一種の宗教思想なりしと説く所以なりとす。

希臘の思想界に於ける哲學と宗教とに關する吾人の見地は約上に陳へたるが如きものなり、今更らに眼を轉じて印度の思想界を回顧するに、既に前諸節に於て吾人は印度の神話的宗教思想中に早く既に哲學的思想の分子要素を含有しをりて、既にその或ものは、ミレトスの哲人タレースの思想を以て哲學なりと

稱すると同一の意味を以てして哲學なりと稱するを得可き所以を論明せり。彼の吠施の神話に尋いで起これる優婆尼婆士の哲學が、抽象的一元論と、厭世觀に基いせる智的解脱論とより成れる、印度思想に特有なる哲學的理論の方面と、宗教的實踐の方面とを合して一となし、人をして一見印度思想の果たして哲學なるか將た宗教なるかを判別するに苦ましむる所の一種の哲學にして、該ねて又宗教たるは人の能く知る所、其他彼の泰西學者の所謂印度の六大哲學派なるものも、その哲學的問題の解釋は直に之れを移して以て實行の宗教の方面に應用し來るを見る、實に印度の思想程哲學宗教の兩思想がしかく相錯綜し、交互に融會しをるものは未だ曾て他國の思想中にその比を見ざる所のもの、然れば印度の思想は吾人をしてその思想の何れの部分迄を哲學と名け、何つれの部分迄を宗教と名く可きかの判別に苦ましむるものとす、是れ畢竟哲學宗教の兩者は不可分離的の同一實質の異方面を云ひ表はすの言辭たるに外かならざるに由らざれば非ず。若し夫れ釋迦の思想に至りても吾人は實にその哲學と宗教との二者が極めて緊着密邇し、互に相包含融和しをりて、此兩者は結局同一實質

たるを表明して餘りあるものありて存するを見る、抑々釋迦の思想に關しては單に東西の學者間にその説を異にせるのみならず、泰西の學者間にも或は釋迦を以てオリゲネスに比する者あり、或は釋迦は基督と同一理論考究を専務とせずして救濟の宗教を説きしものなり、彼の佛教哲學の體系の如きは全然後世の發達なりと説ける者あり、或は釋迦の涅槃を以て或る形而上學の意味を有せしむる學者と、全然之れを佛教に所謂因果應報律と同一視する學者とありて、見解の一致せざる枚擧に遑あらずと雖も、要するに釋迦が出家の當初に於て、苦行外道たる跋伽仙人と大に解脱涅槃の哲理を論し、僧徒派の學者阿羅藍迦藍 (Alama Kalama) 憍頭藍 (Uddaka) に向ひて彼等の大にその哲學的研鑽の足らざる所あるを論破し、釋迦は遂に何人も能く己れの師事して以てその説の自己の思想を満足せしむるに足るもの無きを洞見して、尼連禪 (Niranjana) 河畔苦行林 (Uruvela) に入りて兀坐思惟すると六年遂に伽耶 (Gayā) に到り畢波羅 (Piphalā) 樹即菩提樹 (Bodhi-druma 學名 Ficus religiosa) の下に端坐して廓然として大悟し、法本無我三事生染の眞理を達觀し、彼の二元論たる僧徒派に説ける我 (Purusha) の存在を

も否定して哲學上に自己獨特の新機軸を出して涅槃解脱の道證を自得し、爰に絶對眞理の覺者即佛陀 (Buddha) 正覺の位に到達せられ、法本無我の理を明かにして三事生染の跡を泯ぼすの方法を苦集滅道の四諦 (Arya Satyāni) を以て説明し、その目的地たる涅槃に到達する方法手段を講じて八聖道 (Aṭṭaṅgiko maggo) を説かれたるは事實なりとす。吾人は今釋迦の生涯を假りに二大時期に分別して考ふれば、その各仙人訪問より菩提樹下の悟道以前の時期は即ちその哲學的考察の時期なり、菩提樹下の悟道以後の時期は即ちその宗教的活動の時代なりとす、蓋し無我の理を昧認して自ら無上菩提の大覺位に上ぼられたる佛陀は、其高座の上より一切の群生蠢爾として無明の大夜に彷徨躑躅しつゝあるを見らるゝに及びては、同情の熱涙は矜哀三界の至誠を禁ずる能はず、慈眼視衆生平等一子底の見地よりして、世俗に出興して、邪網を摑裂し正化を宣流し自ら法輪を轉じて世尊即ち薄伽梵 (Bhagavat) と教主 (Loka-nātha) とを以て自ら任じ給へり、故に前者は釋迦の哲學的思辨の時期にして後者は其宗教的活動の時代なりとす。此に於てか吾人は知る釋迦は自ら眞理を大悟徹底せる邊に於ては卓絶なる哲

學者なり、之れを實地に活用して滿腔の熱誠群萌を濟度せんと企てし邊に於ては即ち絶大なる宗教家なるを、然れば世人の一大偉人を目して宗教家と爲す所のものは、その自家の哲學を實地に應用して自己所信の眞理に由りて安心立命せると同く、他人をして自己と同一味の安心立命を得せしめんとの大慈悲心に驅られて、行動云爲するの哲學者に名けたるものに外かならず、釋迦一代の歴史は實に吾人に此事實を告白して餘りあるものとす、之れに反して世人の目して以て哲學者と稱する所の人は自家大悟の眞理を單に自家一身の安心立命の具となすに止まりて、之れを他人に傳達する方便手段を講じて活動的能動的に行動云爲するが如きと無きの人に名けたるの語なりと見る可きなり。然れば吾人を以て之れを見るに、哲學者と宗教家との差異は、その思想の内容根底より相異なりをるが爲めに然か名づけたるものに非ずして、その實際上の活動如何の點に於て然か名けたるものと謂はざる可からざるものとす、故に釋迦は絶大なる眞理の光明を證見したる點に於ては徹頭徹尾一大哲學者なり、即ち覺者なり、佛陀なりとす。然るに今此自己悟證の一大眞理を自信教人信の趣意を以て他人

三二八

に説示し、他人をして自身と同一く成等正覺の阿羅漢 (Arhats) 位を得せしめんと欲し、慈悲の大悲心に刺戟せられて説法獅子吼するものは、是れ宗教家としての釋迦なりとす。然れば現今獨逸に於て佛教信者の代表者たるスバトラ比丘はその著佛教問答の開卷第一に於て、極はめて明截劬勁の筆を揮るひて、佛教の哲學にして該ねて又宗教たるの所以を論じて極めて剴切なるものあり、曰く佛教は哲學なる乎將た宗教なる乎とは、屢々歐米學者の提供する問題なるが、余を以て之れを見るに實に彼の佛教は哲學と宗教との兩者をその中に結合包含しつゝありて、然かもこの兩者は到底截分し得可からざる有機的統一を保持しをるものとす、即ち佛教は一方に於ては最も高尚なる道德的宗教的教理を教ふるも時に、他方にては深遠幽妙なる哲學上の真理を吾人に開顯するものなり、佛教は吾人に示めず宇宙人生の大本真相を開闡明示して、高尚なる道德的靈火を以てその心底を照らし、凡夫をして遂に解脱道證を得て、涅槃常樂の至境に達せしめんと期するものなり、然れば此點に於て佛教は明らかに宗教なりと謂ふを得可きなり。然れど之れと同時に佛教は哲學なり、何んとなれば佛教は妄信盲從

を排し、人々個々の理性に訴へて研鑽攻究の結果到着したるの證信を重んずるものにして、その教義は專政君主の如く、任意に自然の法則を左右する、天地創造の主たるの天父や、不可思議的天啓の上に成立せられたるものに非ずして、自然の法則上に依據せる世界觀人生觀の上に存立せられたるものなり、佛教は悪人を誡むるに未來の神罰を以て脅迫するが如き卑屈の手段を用うることを爲さずして、先づ世界相無常の理を開説して各自の理性に訴へ、各自の智眼を磨かしめてその昏盲の暗を滅せしめ、以て彼等をして一切の悪行は無明妄想の倒見より來るを大覺せしめ、之れに由りて以てその高尚純潔なる道德を勵行せしむるに在りて存すればなり (It is a question often mooted by European scholars, whether Buddhism deserves rather the name of a religion or a philosophy. It is in fact both—in it are united, as an inseparable whole, the most lofty moral religious doctrines with the deepest philosophic truths. Buddhism enlightens its followers as to the nature of the universe and the laws and forces governing therein; unfolds to man the germ of his inner self, shows him his true, higher destiny, extending beyond this fleeting life on earth, enlightens his mind, awakens

his slumbering moral forces and faculties, kindles in him an inclination for good and noble, and enables him to attain by serious endeavour and conscientious practice of the precepts, the highest aim of every living being—peace, salvation, Nirvana. Hence Buddhism is a religion.

It is at the same time, however, a philosophy, for it does not demand blind faith from its adherents, but a conviction gained and strengthened by self-inquiry, self-examination, and serious reflection. Its dogmas are not based upon the will of an incomprehensible God-creator, or a supernatural revelation, but upon the natural constitution of the world and of life, open to all. It does not seek to intimidate the evil-doer by the threat of eternal punishment, but to brighten the eye of the erring one, dimmed by earthly delusion, enabling him to see the truth, and leads the honest struggler upon the road of spiritual development and moral self-perfection to a standpoint where all that is transitory lies behind him, as immaterial shadows and prejudice, doubt and error, disappear in the light of understanding. (Subhidri B.; A Buddhist Catechism: pp. 1, 2) 尚茲に注意す可きは、哲學者も其宗教家としての生涯に入れば則ち哲學者の理論的思想を脱却せざる可からずと謂ふには非るなり、否な

宗 教 新 論

本

論

寧ろ宗教家は既に自家の證見せし哲學上の眞理を益々研鑽磨勵して、更らに一層潤大なる眞理の圓滿完了を期す可きなり、故に宗教家の生涯は畢竟哲學者の生涯の繼續たるに過ぎざるものにして、唯前後生涯の差はその實地方面の活動何如に由りて存するものとす、是れ世人の釋迦を目して、或は哲學者と云ひ或は宗教家と呼ぶ所以なりとす、然るに人動もすれば釋迦を呼びて或は哲學者となし、或は宗教家と稱するを聞きて、忽ち疑團を起こし、釋迦にして若し哲學者たらば、宗教家に非る可く、若し宗教家たらば、哲學者に非る可し、然るに釋迦を稱して哲學者たると同時に宗教家なりと稱するは吾人その意を解するに苦しむと説き、畢竟哲學の屢々宗教上に與へたる失敗と危険とを避けしめんが爲めに、釋迦は全然宗教家にして哲學者に非ずと主張せんとするに至る、然れど斯くの如きは結局哲學と宗教との特性本質を辨せず、彼此の異同差異を解せざる所の錯誤に出づるものにして、余の以上辨明せる所を以てすれば、釋迦は絶大の哲學者たると同時に熱誠なる宗教家たりしを知る可きなり、何んとなれば、哲學者と宗教家との差は彼れ論者の思惟するが如く、根本的にその類を異にせるものに非ず

して、唯その人物の活動と不活動と、應用を主眼とするを理論研究を目的とする
と、自己を主とするを他を目的とするを、實際的なるを理論的なるとの差異に外
かならざればなり、然るに今釋迦の如きは實に此二大方面を頗る完全に具備せ
る一個の哲學者宗教家の好摸範なりと謂ふ可きなり。

然れど斯く論ずるときは、人或は更らに一難を起して謂はん、曰く、釋迦が哲學者
にして該れて又宗教家たる所以は我れ子の言に由りて之れを了す、然れど彼の
耶蘇基督に至りては吾人何等の哲學的思想の存するものあるを見ず、彼れは釋
迦の如く諸多の哲學者とその哲理上の議論を上下せしを聞かず、獨想兀坐自か
ら思惟工夫せしを聞かず、唯其説きし所は日常卑近の教誨にして、その行ひし所
は宗教的熱情の活動たるに過ぎず、吾人は何等の哲學的思想の基督の意識に上
りしを見出す能はざるなり、然れば縱令その内容上なりとも彼の哲學と宗教と
の同一なるを見るを得る所以のものは、彼れアールヤ族の思辨的人民に於て初
て發見するを得可く、未だセム民族に於ては何等這般の事實あるを見出す能は
ざるものとす、果して然らば宗教と哲學との兩者はその内容同一なりとの説は

尙未だ悉くさしる所あり、全般命題としては實際事實に矛盾する所あるに非ず
やと。曰く然り豈に夫れ然らんや、成程論者の謂へる如く、セム民族に在りては
その哲學思想は、アールヤ種族に於けるが如く、宏大雄偉卓抜痛快の痕あるを見
ずして、その思想や乾枯無味荒涼落寞、主として玄を釣り幽を闢くの高遠なる思
辨を尙ばずして、世俗普通の實際的需要を充たすを以て満足しをるもの、是れ一
にアールヤ族とセム族との思想心情の根本的差異に基くものなり、而かも斯か
る根本的差異あるの故を以て基督の思想には一も哲學的なるもの無しと謂ふ
を得ず、今彼れセム民族は如何に彼等が崇拜せる神を觀せしかは既に前節に於
て論明しをきたるが如くなるを以て、今更らに茲に之れを贅せずと雖も、彼れ等
の所謂神なるものは形而上的過境的性質の著るしき、之れを一種の哲學思想と
稱するも毫も不可なきものありて存するを見る、而て今此形而上的の觀念や
實に彼セム民族の思想を終始一貫して徹頭徹尾彼等の行動云爲を支配しをる
所のものなり、今基督教は猶太教より此神の思想を繼承して起これるもの、而かも
基督は從來以色列の豫言者がその神の神聖にして正義を愛するの唯一眞神な

りとの觀念に補ふに、愛の思想を以てし、以て彼のヤーエーが天を降すてふ從來の猶太的救主 (Messias) の觀念を變更してその現世的なるを未來的となし、當時猶太教のその國民性を帯べる律法的宗教たるの性質を革新して、世界的宗教となしたるが如き、徹頭徹尾基督の思想は唯一眞神なる形而上の根本原理より滾々として湧出し來たりたる所のものならざるは無し、唯その思想の斯かる形而上の根本原理の極致に到達するの手段方法としては、敢て尼夜耶學派の如く論理の形式に由りたるものに非ず、吠檀多學派の如く深沈痛快なる唯心論的認識論を以てしたるものに非ずして、非研究的獨斷的に神なる形而上の極致の觀念に憧憬したるものなり、然れど吾人若し斯かる思想の極致に到達するに論理的序次と認識論的方法とを以てしたるものに非ざんば、之れを哲學なりと稱し得可からずとせば、彼の支那古代の老莊二子の哲學の如きは、如何にその思想の究竟せる所は奥玄深遠なる形而上學的價值を有するものありて存しをるにも關はず、之れを哲學なりと稱するを得ざるに至らん、豈に啻に老莊二子の哲學のみならんや、若し嚴密に論理の形式と認識論の方法とを以てしたるの思想に非

ずんば、之れを哲學なりと稱し得可からずとせば、吾人は歐洲に在りてカント以前に於ては又一つの哲學無しと稱せざるを得ず、果たして然らば上下古今の哲學史の大部を擧げて之れを哲學史以外に抛擲し去り、カント以前の哲學は畢竟哲學に非ずと主張せざるを得ざるに至らん、是れ豈にその不可の太甚しきものに非ずや。矧んや吾人は藝者に屢々論明し置きたるが如く、その方法形式は兎も角もその當時に於ける一種の合理的究竟的なる證信は歴史的に之れを一個の哲學なりと稱するを得可きを以て、猶太人の神の思想の如きも明かに一種の哲學思想なりと稱するを得可からざるものなり、今基督の思想やその根本的基礎をこの神なる終極原理に有し、基督教が此の神の愛や人性の極悪深重なるをやを説き、その他幾多の倫常的道德的訓誨を教へしは皆な此神の形而上の觀念を中心として之の大源より洋々として溢れ出でたる生命の活泉たらざんば、あらず、然れば這般の思想は之れを一種の哲學的思想なりと稱せずして將た之れを何とか謂はん。矧んや基督は彼れ神の思想を体認して之れと冥合融契し、その一舉一動は使徒パウロの所謂我儕は彼れに頼りて生きまた動き存るとを得る

三三六

なり(使徒行傳第十七章第二十八節)との思想より規定され來たるもの、果して然らば神なる思想は基督がセム民族の一人として歴史的に得來たれる證信的智識なるや明かなり、而て斯かる證信的智識は畢竟是れ一種の哲學なりと稱するも毫も不可無きものとす、唯斯かる證信的智識に到達する方法としては、彼の迦比羅城(Kapilavastu)の悉達(Siddhattha)は沈思嘿想の途を辿り、ナザレの耶穌は口碑的傳來の神の觀念を直受して、その律法的たる所以を改良して道德的となし、その現世的なる所以を變じて來世的となし、その形式的なる所以を革めて精神的となし、その宗教の偏狹主義たるを更めて普遍的となしたるに止ると雖も、抑々此兩者は其思想の第一義に到達せる方法手段と、その思想の奥妙痛快なると單調無味なるとの差こそあれ、是等は等しく一種の哲學的思辨なりと稱するも毫も不可なきものとす。唯印度アールヤ族とセム民族との間に斯かる思想上に一種の差を生ずるに至りしものは、民種の特性等諸般の原因事情ありて之れをして此に至らしめたるものにして、主としてアールヤ族の理論的なる頭腦とセム民族の實際的なる精神との根本的差異に歸せざる可からざるなり、然

れば基督を以て何等の哲學的思想をも有せざるが如く、説くものは未だ基督の真相を得たるものと云ふ可からず、是れ實に彼の媒介神學者流の甚しき謬見に坐せる所のもの、矧んや斯かる謬見に坐せる基督教徒の媒介神學者流の口吻を摸して、釋迦の思想を探究せんとするに此根本的に謬れる見解の比論を須る來たらんとする現今我國に於ける一派の佛敎家ほど、その外觀の可笑にしてその心術の愍然なるは未だ曾て是れ非るなり、豈に嘗に基督の宗教が一種の哲學思想に由りて開説せられたるのみならずや、吾人を以て之れを見るに彼のムハメッドの當時、ムハメッドは實刺非亞の宗教社界に於ける弊害の百出せるものを觀破し、その偶像崇拜や一見嘔吐を催す可き宗教的儀式やは、到底當時世人の宗教心を満足するに足らざるを觀破し、アラの唯一神敎を創建して、イスラムの新宗教を開説したるが如き、實に氏がアラの唯一神たる所以を想定して、偶像敎たる從來の宗教を一掃せしは、或は氏が野に羊を牧ふの間に、或はシリア、パレスチナ等に行商せるの間に、基督敎や他のセム民族の諸宗教を觀察し、或は氏が一寡婦と結婚の後深かく宗教的事項に就いて沈思工夫したるの結果たるに外かな

らず、然ればムハメッドも亦一種の哲學思想の下に宗教を建設したるものと謂ふ可きなり。其他又波斯の宗教革新者たるゾラストラが其舊新仰の迷信多く、弊害の之れに作ふもの大なるを思へて、是等積弊舊習を洗滌一掃せんと企て、起ころや、ガータス(Gathas)讃歌の教ふる所に由れば、氏は精神と物質との二元的世界觀と善惡の二元的人生觀とを以て自己の哲學思想と爲し、之れを以て自己安心の立脚地となせると同時に、この哲學思想を以て人民一般の迷信倒見の岐路に彷徨しをる者に誨ふて、自己と同一安心立命の基礎を得しめんとの大慈悲心を以て活動するに至りたるが如き、宗教家は哲學者の實際的活動的に行動云爲するに名けたる名稱なるを見る可きなり、然れば何かなる宗教家にもその根本思想として多少の哲理思想を含有しをるものなれば、従ひて宗教家哲學者の兩者はその本質に於ては全然致を一にするものたるを知る可きなり、是れアラメンショース氏がゾラストラ氏の教理を目して、そは世界の起原を説けるの哲學なり、然れどその哲學や直ちに吾人の剛健なる行爲となりて發動せるものなり (It is a philosophy of the origin of the world, but a philosophy, the acceptance

宗 教 新 論

of which involves immediate and strenuous action. Allan Menzies: History of Religion. p. 390. & 391.) と云ひし所以なりとす。

以上論明せるが如く、アールヤ民族たるとセム民族たるとに論無く、苟くも一宗教の創説者は皆な一種の哲學思想を有しをりしものにして、此哲學思想を實地に應用して一切衆生をして自己と同じく安心立命の立脚地を得せしめんと努めしものに外かならず、然れば宗教は哲學以外にその存在の餘地を有せず、宗教家なるものは同時に一種の哲學者たるものなり、又哲學者たりし所のものは自己の發見せし真理に由りて一種の究竟的證信の智識を有し、之れに由りて安心立命しをる所のものにして、少くとも自己一身に對するの宗教家たりしを知る可きなり、果して然らば宗教とは何ぞやとの問題に對する吾人の解答は、客座之れを豫想するを得可く、宗教と哲學との關係問題も亦之れに由りて解釋し得可きものとす、然れば吾人は今や左に節を改めて是等諸問題に對する吾人の解答を歸結せんとす。

第五節 健全なる宗教の概念

上來章を追ひ節を重ねて研鑽考究し來たりたる所のものを約括總覽するに宗教そのものも亦哲學と同く吾人精神の全作用より成らざる可からざるを知れり然れば今日苟も吾人の宗教的意識を満足す可き完全なる宗教は吾人精神の全軀即ち智情意全軀の作用に由りて到達したる思想の結果ならざる可からず、然るに若し強いて此智情意三作用中その一を偏重してその一若くは二に由りて宗教を構成せんとせば必ずや諸種の困難ありて表はれ來る所以を、或は歴史的事實に徴し或は諸學者の見解に照らして論證攻明したり、而て之れに尋いで一切の宗教は其時代々々に於て合理的なりと思惟したる當代人智の究竟せるものにして、一種の哲學的證信に外かならざる所以を知れり、然るに是等の要件は吾人が嚮者に第二編第三章第六節に於て論定せる哲學の具有す可き性質を表明せるものに外かならざれば、此立脚地より觀察せば宗教は一種の哲學なりと稱するを得可く、哲學は亦一種の宗教なりと謂はざる可からず、是れ畢竟哲學と宗教との兩者は同一物を異方面より觀察したるものたるに外かならずして、要は同一本質の異形相を云ひ表はせるものたるを了知し得可きなり、然れば今

日吾人の精神的需要に應ず可き宗教には、少くとも之れを哲學として考察するときは、吾人が嚮者に哲學に向て要求せしと同一の條件を具有しをらざる可からず、換言すれば健全なる哲學が吾人智情意の全作用より成り、科學的研究の結果を湊合統一して吾人の全精神の平衡均準上に成る可き究竟的合理的の證信ならざる可からざるが如く、宗教亦今日吾人精神の全幅を擧げて眞面目に吾人の安心立命に資するを得可き性格を有せしめんとせば、それは吾人の全精神の作用より成り吾人の全精神を満足さするに足る可き究竟的合理的の證信ならざる可からざるや明かなりとす。果して然らば宗教とは何ぞやとの問題に對する吾人の解答は哲學とは何ぞやとの問題に向ひて與へたる吾人の解答と同一なるものにして、將來完全なる宗教の組織は必ずや吾人の智情意全作用の平衡上に成れる合理的究竟の證信にして、その方法や論理的にその資料の各經驗科學の提供する所に依らざる可からざるや勿論なりとす。然れど從來所謂宗教と稱しをりし所のものは、或は是等の要件を充分満足さする能はざるものあるも、尙等しく之を歴史的に一宗教なりと稱し得ることは、恰も從來の哲學は單に

吾人の所謂哲學に要する條件の充分を満足さずを得ずと雖も、それを以て尙哲學たるの歴史的價值あるものとなし、等しく之れを哲學なる同一名稱の下に攝屬せしめ得ると同一なりとす。然れば吾人は勿論斯かる歴史的に存在せる哲學宗教が、吾人の要求するが如き條件を充分満足せしめざるの故を以て、之れを哲學宗教の範圍内より驅逐し去らんとするものに非ずして、是等は皆な過去に於ては確かにその哲學宗教たるの用を充たし、所のものにして、今日吾人が吾人の精神的需要を満足さするに足る可き宗教の概念を得るには、その輿料として必要缺く可からざるものとす。故にそれは既に今日吾人の認めて以て完全なる哲學宗教と見做すことを得ざる哲學宗教も、尙歴史的には立派に哲學宗教としてその本分を相應に盡しをりし所のものにして、歴史的に一種の哲學宗教として成立し得可きものたるを承認し、而て是等哲學宗教は自ら吾人をして今日吾人の精神的需用に應ず可き完全なる哲學宗教の概念を構成するの資料となりしを感謝せずんばあらざるなり。然れば吾人は斯かる哲學宗教は歴史的には哲學宗教と稱し得可き價值ありて存するを認容す可しと雖も、苟も今日に吾人の全

精神を満足さするに足る健全なる哲學宗教とし云へば必ずや以上吾人の要求する所の諸條件を満足さずる所のものならざる可からざるものとす。既に哲學即ち宗教たる以上は、哲學と宗教との關係問題の如きは吾人殊と更らに之れを陳ぶるの必要なきものなり。何んとなれば哲學はその儘即ち宗教にして、宗教と哲學とはその實同一物たるに過ぎざればなり。然れば斯かる哲學宗教の見地よりすれば、又斯かる宗教の要求する條件を満足せしめんが爲めには、吾人は宗教の科學的研究を豫想せざる可からざるや明かなりとす。請ふ吾人は更らに節を改めて宗教の科學的研究即ち宗教學に就いて一瞥を試みん。

第六節 宗教學

哲學即ち宗教なりとの立脚地を以てせば、今日吾人の宗教的意識を満足さす可き宗教は、必ずや哲學研究と同一の方法を以て研究せられたるものならざる可からず、換言すれば彼の哲學が諸有科學の歸結を湊合統一して、その上に構成せられたる合理的究竟的證信ならざる可からざるが如く、宗教も又必ずや諸科學研究の結果に待たざる可からざるや明かなりとす。然れば宗教の構成はその心

的科學たると物的科學たるとに論無く、一切の科學に負ふ可き所以は又更らに論ずるを要せずして自ら明かなる可し。斯くの如く健全なる宗教は健全なる哲學の要求するが如く、一切の科學に負はざる可からざるや明かなりと雖も、一切の科學中殊に哲學を宗教として觀察するとき常に當りて、その宗教の構成に最も密接せる關係を有せるものを宗教學 (Religionswissenschaft) とす、即ち此宗教科學は他の科學と同じく、人間社會に現はれたる宗教なる現象に就いて、確實なる事實の上より、科學的方法を以て宗教現象を攻究闡明する所のものを指すなり、然り而て此宗教的現象なるものは吾人の疑ふ可からざる確固たる事實にして、而かも人生の普遍必然の事實なり、宗教なるものは古今を通じ東西に亘り世の文野を問はず人の智愚を論せず、何かなる社會何かなる人類と雖も等しく之れを有せざるもの無きは夙に學者の一致する所のものとす、縱令その宗教なる現象の内容は人種に由り時代に從て何かに變化しをるも、その所謂宗教なる事實そのものに至りては渾圓球上何人も之れを有せざるもの無きなり、世間よりは無神論者と呼ばるゝの人には在りても、それは唯基督教佛教の如き歴史的に存在

する成立宗教を尊信せざると云ふ迄のとはして、自己の心中には一種の證信を有しをるものなり、是れ豈に一種の宗教に非ずして何ぞや、故に吾人を以て之れを見れば、彼の一切の宗教を以て野蠻未開の遺物なりと排斥し、形而上學なるものも亦斯かる空想的宗教の變形に過ぎずと爲して擯黜し去りたる、コムトその人の如きも、一種の科學上に於ける證信を有しをりて、科學宗を創説し、ストラウス氏は舊信仰と新信仰 (Der alte und neue Glaube) と題せる一書に於て、今日吾人の到底基督教々徒たる能はずと雖も、一種の宗教的意識は確かに之れを有すと論じ、又マックス、ステルナー氏の如きはストラウス氏の如く宗教を解するさへも、一種の病的現象なりと主張し、實驗主義 (Positivismus) の極端に走りしと雖も、吾人を以て之れを見るに、氏の所謂極端なる實驗論も一種の宗教的證信なりと云ふを憚らざるものとす、吾人は懷疑論の如きも之れを究竟的證信と做せる人に向ひては、一種の宗教なりと謂ふに躊躇せざるなり、然れば原始佛教の無神論や基督教の唯一神教や南洋亞非利加の蠻族間に行はるゝ各種の崇拜や泰西の諸哲學者等の自家獨特の哲學的見地や、一切皆之れを宗教と稱し得可き所のも

のなるや疑ふ可からざるものとす、然れど若しスチルナーの如く斯かる一般普通の現象たる宗教をも尙之れを目して以て夢幻的空想なりと謂はば、人生何物か夢幻ならざるものあらんや、斯くの如きは彼の極端なる唯心論の絶對的幻妄論が客觀世界を夢幻化し去るの極、到底吾人々心の精神的需要を満足するに足らざる自家撞着の矛盾論に終はると一般、到底維持す可からざるの極端論たるを免れざるものとす、故に吾人は宗教的現象は人生社會に於ける夢幻ならざる確固たる事實なりと承認するものなり、否な宗教なる現象は彼の倫理現象なるものが、人生に於ける至切重要な事實なるが如く、又その切實至要なる事實たるを承認せざる可からず、然れば彼の倫理現象なるものを捉へて之れを科學的に研究する所のもの之れを倫理科學若くは倫理學と稱し得るが如く、這種宗教上の事實を攻究闡明する所のもの之れを宗教科學即ち宗教學と稱するも何んの不可が是れあらん、而て彼の倫理學が哲學に貢獻する所多きが如く、宗教學も亦哲學に貢獻する所、決して鮮少ならざるを見る、其中殊に宗教學が哲學と密接なる關係を有するものは、哲學を宗教として吾人の需要するの時に於て特に然

りとす。何んとなれば宗教を以て合理的究竟的證信として觀察するときには實にその宗教なるものは宗教の科學的研鑽の餘に成れる確實なる事實上の歸結に成れるものならざる可からざるや、明々白々の事實たるを以てなり、而てその宗教的現象を科學として取扱ふ所のものは即ち宗教學なるを以て、哲學としての宗教的組織を得んが爲めには、吾人は先づ宗教學の研究より着手せざる可からず、然れば吾人の所謂哲學としての宗教と宗教科學との何かに密接緊着しをるかを知り得可きなり。斯くの如く一方には宗教學と哲學としての宗教とは密着不離の關係に於て立つものなりと雖も、又他方に於ては宗教學は既に一種の科學たる以上は、それは又他の諸科學と同く若干の假定公準上に成立しをるものなれば、到底吾人の至極的最終の智識たるを得ざるものなり、換言すれば宗教を科學として研究せしのみにてはその合理的なるは則ち合理的なるを得可しと雖も、究竟的證信は則ち未だしと謂はざる可からず、果して然らば吾人の究竟的證信たる哲學としての宗教を得んと欲せば、勢ひ宗教科學を超越して、而かも宗教科學と全然分離せず、却りて宗教科學の攻究上に成れる宗教の哲學的研究

に臻達せざる可からざるなり、是れ宗教科學以上に宗教哲學即ち吾人の所謂哲學としての宗教を要する所以なりとす。斯くの如く論ずるときは、科學としての宗教研究と、哲學としての宗教研究とは一般の科學と哲學とに於けるが如く、此兩者は双々相併立して、何れも偏廢すべからざる重要な研究なりと稱す可きなり。

科學としての宗教を研究するには、言語學上より古代人民の神話に表はれたる宗教上に各種の對象を呼びし言語や、現今の諸種族間に流布せる宗教に關する諸名稱を、言語學上より比較研究するものの一なり、吾人は之れを呼びて宗教言語學 (Religionsprachwissenschaft) と稱するなり。之れに繼いで各國民がその幼稚なる宇宙觀と人生觀とを、その古代に於て記號的比喩的に表白したる所の神話を比較的に研究するもの、その二なり、吾人は之れを神話的宗教學 (Mythologische Religionswissenschaft) と稱するものなり。之れと相併びて現今諸地方に散在せる蠻民の宗教を比較研究するもの、その三なり、之れを人種的宗教學 (Ethnologische Religionswissenschaft) と稱するなり。然るに現今開化せる諸民族の高尙

なる宗教中にも、諸種劣等なる形式を有せる宗教の民間信仰として混同併存しをるを見る、這種の宗教を捉へて比較研究するもの、その四なり、吾人は之れを社會的宗教學 (Soziologische Religionswissenschaft) と稱するなり。之れに繼いで各宗教の教理史とその開祖及び有名なる僧侶の宗教的生涯を記せる傳記と教會史の研究をなすもの、その五なり、吾人は之れを稱して歴史的宗教學 (Geschichtliche Religionswissenschaft) と稱し、此の中、その第一のものを教義史的宗教學 (Dogmengeschichtliche Religionswissenschaft) と稱し、その第二のものを傳記的宗教學 (Biographische Religionswissenschaft) と稱し、その第三のものを教會史的宗教學 (Kirchengeschichtliche Religionswissenschaft) と稱するものなり。又各哲學者の哲學體系を分析攻究してその宗教的思想を尋究攻明するもの、その六なり、之れを哲學的宗教學 (Philosophische Religionswissenschaft) と稱す。又諸民族の宗教的意識を精査し、之れを兒童の精神發達の歷程に比較對照して宗教的意識の生成發達の痕を追求研鑽するもの、その七なり、之れを人種的兒童心理的宗教學 (Völker- und kindersychologische Religionswissenschaft) と稱す。之れに反して智識の充分發達せる吾人々類

の心理を解剖分拆して、その宗教的要素を闡明考究せんとするものその八なり、之れを心理的宗教學 (Psychologische Religionswissenschaft) と稱す、此八分科の研究を待ちて科學としての宗教は爰にその研究の全般を容ほ完成するを得るものなり。而て今是等科學としての諸宗教の研究を待ちて初めて其哲學としての宗教はその基礎の確實なるを致すを得るもの、而かも此哲學としての宗教研究を経るに非ずんば吾人は到底完全なる宗教的證信に到達すると能はざるものなり。此哲學としての宗教研究を完成して吾人の證信的智識に到達せんと擬するもの吾人之れを稱して宗教哲學 (Religionsphilosophie) と稱す、而て彼の一般哲學が認識論と形而上學とより成るが如く、宗教哲學も亦認識論的研究と形而上學的研究とを経て初めてその研究を完うするに至るものとす。今是等の各分科を表示すれば左の如し。

- (一) 宗教言語學
- (二) 神話的宗教學
- (三) 人種的宗教學

(第一) 宗教學

- (四) 社會的宗教學 (イ) 教義史的宗教學
- (五) 歴史的宗教學 (ロ) 傳記的宗教學
- (六) 哲學的宗教學 (ハ) 教會史的宗教學
- (七) 人種及び兒童心理的宗教學
- (八) 心理的宗教學

(第二) 宗教哲學

- (一) 認識論的研究
- (二) 形而上學的研究

本節を終はるに當りて此に一言すべきとあり、抑も吾人の哲學即ち宗教なりとの立脚地よりして、究竟的證信を得んが爲めに、諸種の宗教科學を研究すと謂はば人或は云はん、宗教の研究は斯くの如き有目的のものなる可からず、宗教も之れを科學として研究する以上は靜平なる冷眼を以て之れを觀察し、その科學的研究の結果の如きは、何かに成りゆくもそれは自然の結果に一任す可きなり、然るに子の今究竟的證信を目的として宗教の科學的研究に従事するが如きは、吾人

の大に解する能はざる所のものなりと。然れど斯かる反對論は畢竟論者が吾人の思想を誤解し、自ら想像する所を以て吾人の説と見做して之れが反論を試むるものと謂はざる可からず、則ち論者は宗教の研究に何等か胸に一物を有する有目的の研究の非なるを辯ぜらるゝは、彼の一派の論者が荐りに成立宗教を辯護せんが爲めに、媒介神學を主張し、之れに由りて宗教的事項を論明したるを見て、斯くの如きは眞に宗教を科學的に研究するものと謂ふ可からず、科學は斯かる辯護的有目的のものたる可きものに非ずして、唯眞理是れ求むるのみ、一成立宗教の興廢存亡の如き何ぞ科學の眼中に在らんや、然れば宗教を全然科學的に研究せんとせば、勢是等の有目的辯護的研究の方法を罷めざる可からずと云ふに在り。斯くの如き見解は吾人と雖も大に之れを賛同せざるを得ず、否な吾人が哲學即ち宗教なりとの研究の結果は實に此本旨より湧出し來りたるものと云ふも敢て不可なると無し、然れば斯かる意義を以て宗教の研究は有目的なる可からずと説くが如きは、何人かその不可を謂はんや、然るに成立宗教の辯護を爲すの目的にて宗教を科學的に研究すと云ふは不可なりと稱すると同一の

意味を以て、吾人の證信的智識を得んが爲めの目的を以て、宗教を科學的に研究するは有目的なるが故に、同く不可なりと説くに至りては、吾人實に論者は論理の形式上一大謬過に陥るれるものなるを斷言して憚らざるものなり、何んとなれば證信的智識を得んと期するが如きは單に宗教のみならず、又一切哲學の目的にして而かもその目的や神學に定めたる既成の基督教的天父の存在等の辯護を以て目的とするものとは大にその類を異にせるものなり、神學者の目的たるや既定的なる一定の標準にありて存すと雖も、吾人の目的には寸毫も斯かる種類の目的あると無く、期する所は彼れ論者自からも許容しをれる唯一眞理に在りて存するものなればなり、斯かる眞理を得んと期するとも有目的なるが故に、科學者は決して之れを有す可からずと謂はば、科學の研究は盲目的自然力の活動と毫も異なる所無き、一種人類以外の科學と化し、吾人の研究せる科學たるの資格無きものとなるなり、然れど吾人々類に在りて先づ初めて一切の科學は成立し得可きものなれば、人類を外かにしては又他に科學なるもの、得て存し得可きとは吾人到底之れを想見する能はざるものなり、然れば論者の謂へる

が如く科學は證信的智識の把持を以て目的とす可からず、換言すれば真理そのものを之れを目的とす可からずと説かば、科學其ものも亦到底成立する能はざるに至らん、科學を構成せんが爲めに科學を研究する科學者自からにして、科學夫れ自身を泯滅せんとするが如きは豈に自家撞着の甚しきものに非ずや、故に彼れ神學者の有する既定的目的たる、神の辯護を專一とせるを以て科學の目的と爲すは、吾人の大に潔しとせざる所、又到底その保有す可からざる目的なりと雖も、單に真理そのものに外かならざる證信的智識を得んことを期して、科學を研究するが如きは、寧ろ科學者の本分たる可き所のものとす、故に吾人の哲學即ち宗教なりとの立脚地よりして證信的智識を得んが爲めの目的を以て、先づ宗教の科學的研究に従事するが如きは彼れ神學的の有目的なるとは大にその意義を異にしをるものなり、何んとなれば彼等神學者の有目的なるは既定的天父の觀念に在るも、吾人が真理是れ期するの、有目的たるは科學者の應さに有す可き正當なる目的にてあればなり、然れば彼れと之れとを混同して彼れを排斥するの心を以て之れを斥けんとするが如きは、未論旨の正確なるものを得ざるも

の、果して然らば吾人の證信的智識を得んが爲めに誠意平靜宗教の科學的研究の素地を形ちづくるが如きは吾人の科學的精神と毫も衝突すると無きものなり、否な管に吾人の科學的精神と衝突せざるのみならず、斯くの如きは實に科學其もの、眞精神にして、若し一朝之れを排斥せんか科學其ものも立ちどころに成立するを得ざるに至らん、然れば證信的智識を以て目的とするが如きは却て彼れ科學夫れ自身の成立には必要欠く可からざる條件制約なりと謂はざる可からず、果して然らば彼の證信的智識を得るを目的として、その基礎たる宗教の科學的研究に従事するが如きは、管に自家撞着たらざるのみならず、最も必要なる研究上の目的なりと謂はざる可からざるなり。

第七節 智識と信仰との調和に關する世人の疑惑を辨ず

斯くの如く哲學としての宗教は宗教科學を豫想して成立し、尙廣く之れを云へば哲學としての宗教は一切科學の研究を待ちて而て後ち成立し得可きものなれば、一切の科學は宗教の基礎となり、その必然的條件となる可きものとす、然れ

は科學に依りて成り、科學研究の結果を集めて大成したる宗教は、決して科學そのものと衝突せざるは勿論の事なりとす、然れば宗教と科學との衝突を避け、智識と信仰との調和を圖らんとせば、彼のテルツリアヌスやアエロエス等の如き宗教的獨斷哲學者の爲し、が如き、二重真理 (Doppelte Wahrheit) 説の如き突飛的方法や、現今の媒介神學者流の主張せる舊信仰に被むらしむるに新衣裳を以てしたるが如き、姑息的手段を以てしては、到底成効し得可からざるものにして、吾人が哲學即ち宗教なりとの立脚地を以てして、初て能く圓滿なる効果を奏し得可きものとす。而て哲學即ち宗教なりとの立脚地は必しも新奇なるものに非ず、苟もその思想にして公明正大に其哲學思辨にして健全深遠なるの學者に由りては常に稱道せられたるの思想なりとす、中世に於てはアウグスチヌス近世に於てはヘーゲルの如き即ち是れなり。然るに今リッテナル一派の神學者や媒介神學者風の佛教徒が、哲學と宗教との連鎖を截斷し、宗教の安全を計らんとするか如きは、眞に無謀の輕舉と謂はざる可からず、見ずや十四世紀に於いてオッカムの唯名論は智識と信仰とを全然截斷して、以て宗教を擁護せんと欲して、却て至

大なる危害を宗教そのものに與へしに非ずや、何ぞ顧みざるの太甚しき。然れど又此に人あり説を爲して曰く、吾人々類の智識や信仰や共に日に發達進歩する所のもの、斯る日進月歩の智識や信仰や、吾人は等兩者間の調和を圖かるも、畢竟無用の徒勞たるに過ぎず、何んとなれば今日の智識は明日の科學に非らず、今日の信仰は明日の信仰に非ず、然れば切角今日勞苦辛酸慘怛の經營を試みて圖りたる智識信仰の調和も、明日に至れば忽ちにして俄然一變するやも圖られず、然れば斯の如き智識信仰の調和を試むるも畢竟益なきの徒事に歸して止まんと。然れど斯くの如きの論難は吾人の嚮者に説明せし所を回顧すれば自然に消滅す可き疑問たるに過ぎざれば、吾人今改めて之れを反覆するの必要を見ずと雖も、今一言之が惑を辨じをかんに、論者は依然吾人精神の有機的統一を認めをらざると、及び余の此に謂ふ智識信仰共に吾人の合理的究竟的證信たるを忘却せると、智識や信仰や畢竟吾人の同一精神の有機的統一を有せる合理的究竟的證信なりとせば、斯かる究竟的智識は縱令理論的には時々刻々變轉化々するものなりと雖も、實際的には論者の思惟せるが如く、甚しき朝變暮改を爲すものに

非ざると是れなり。今その第一の點に就て云へば論者が智識と信仰との調和を圖るも益なしと爲せるは、智識と信仰とは全然別物なるものゝ如く思惟し、同一吾人の精神が全然二分されざるものゝ如く考ふるの過ちに陥るれるものとす、又第二の點を考ふるに、智識信仰共に吾人の合理的證信なるが故に、畢竟同一物たるに外かならず、然れば斯かる同一物の調和と云ふも既に語弊ありて外部の調和を待たずして、既に智識信仰夫れ自らに於て内部より既に業に調和しをるとに想到せざるものなり、又論者は吾人の智識信仰は既成的のものに非ずし、て時々刻々變化するものなれば、斯かる變化改遷の甚しきものを今日調和せしむるも明日は又不調和を來たすやも豫め期し難ければ、斯かる不定の兩者を調和するも益なしと爲せども、既に信仰にして合理的究竟的なる以上は實際上斯かる急劇の變化を爲す可きものに非ざるは吾人の嚮者に詳論せし所なるを以て今更らに之れを贅せず、但し吾人の智識と信仰との調和は、現今の智識と二千年前の基督教や三千年前の佛教の信仰とを調和せよと云ふには非ざること、を記憶せざる可からず、斯かる智識と斯かる信仰とを調和せんとするが如きは、到

底不可能の事にして、又縱令之を爲し得るとするも斯の如きは眞に論者の謂へるが如く無用の閑事たるに過ぎざるものとす。
 次ぎに此問題に關聯して吾人の屢々耳にする所のものは、智識と信仰とは全然別物にして、智識にて知る能はざる所は之れを感情に訴へて吾人の心裏にそを直覺するの外か無し、然れば信仰の範圍は智識以上に在りて存し、此兩者は全然その範圍を異にするものなるを以て、元來衝突す可き理由も無ければ、強いて調和を圖かるの必要も見ずとの説明是れなり。是れアヂテスを始めとしてストラウスの所謂宗教家と哲學者との兩者を冷靜平淡何等の關係無き路傍の行人なりと見んとするの解釋なりと雖も、是れ又吾人の嚮者に屢々論明し置きたるが如く、智識と信仰との兩者は斯く全然その範圍を異にしをるものに非ずして、同一精神中の有機的統一に由りて、其分化の結合せられたるところのものなれば、吾人の精神中には何れの部分よりは信仰、何れの部分よりは智識と云ふが如き截然たる分界線ありて存するものに非ず、故にヘーゲルは智識信仰の兩者を截分峻別せるの人を嘲笑して、彼れ等はその左右の袖裏に、各々別々に智識と